

教育、大学、文学、ドラマ、日常
—教育社会学的考察—

武内 清 著

(敬愛大学客員教授)

はじめに

本冊子は、大きく3つの目的で作成した。

1つは、私が2022年度後期から敬愛大学教育学部で担当する「教育社会学」の授業の資料として役立てようという意図がある。冊子の内容は、教育社会学の全分野を網羅するものではなく、教育社会学の特質といくつかのトピックと周辺のテーマを扱ったものがある。学校教育だけでなく、大学、文学、ドラマ、さらに日常生活を扱い、履修生に教育社会学の面白さを知ってほしいと思った。

2番目は、研究仲間、先輩、後輩、教え子に、私の教育社会的考察の一部を提示したいという意図がある。論文ではなく、いろいろな素材に教育社会的なコメントを書いたものを並べただけであるが、皆の研究の何かのヒントになればと思った。

第3に、同世代の人に対して、私の日常の生活や感想を紹介し、定年後の生活について一緒に考えてみたいと思った。シニア世代の生き方は若い人がキャリアを考える時にも役立つとも考えた。これはこれまでの私の道程を振り返ること（自分史）も含まれる。

教育社会学は、日本の大学の中では、戦後に講座ができた新しい分野で、教育学の主流とはいえないが、その中でもいろいろな見方や立場がある。

私の見方や立場は、マクロでもなく、ミクロでもなく、どちらかというミドル（中間）のものである。つまり、教育を国家（マクロ）や個人（ミクロ）次元でとらえるというよりは、学校などの組織や集団やその文化（ミドル）に焦点を当てて、教育現象や個人の社会心理を解明しようとするものである。

私は量的な調査で、つまり統計（数字）から、人々の行動や意識の一定のパターンを見つけようとする研究を多く行ってきたが、私の見方や方法はそれに尽きるわけではない。

後輩の小林雅之氏（東大名誉教授）からは、「武内さんは、ふわふわしたものをふわふわした方法で捉えますね。それは他の人ができない名人芸です」と言われたことがある、竹内洋氏（京大名誉教授）からも同様のことを言われた。そのような方法を意識しているわけではないが、教育も含め、世の中にある曖昧なものを、ふわふわした方法で、解明にできればと思っている。

私は日頃、感じたことをブログ(<https://www.takeuchikiyoshi.com>)に記録を残している。この冊子は主にそのブログからテーマ別にふさわしいと思われるものをピックアップしたものである。そのような試みはこれまで3度ほどしてきた（『学生文化・生徒文化の教育社会学』（2014）、『敬愛大学国際研究第30号』（2017）、『同33号』（2020））。これはその4作目のものである。この手作りの冊子を、気楽に楽しんで読んでいただければ、幸いである。

2022年（令和4年） 9月5日

武内 清

教育、大学、文学、ドラマ、日常 —教育社会学的考察—

目次

I	教育社会学とは	3
II	大学、大学教員、学生	15
III	学校教育	28
IV	社会学、社会心理学	45
V	読書、書評	54
VI	日常生活の社会学	66
VII	文学の社会学	75
VIII	韓国ドラマ、映画	88
IX	花紀行	98
X	定年後の生活、自分史	106

I 教育社会学とは

ここでは教育社会学の学問的な特質を取り上げる。その後、具体的な研究事例をいくつかあげる。かなり抽象度の高い内容なので、はじめて教育社会学に接する人にはわかりにくいかもしれない。しかも、教育現場の話がほとんど出てこないのも、教職に役に立つのかという疑問をもつ人もいることであろう。

教育実践の背後にある問題やその前提を問うような見方をしているので、具体的な学校教育の実際を知った上で、読んでみると参考になると思う。

1 教育社会学の特質

教育社会学はその特質を単純に言えば、第1に客観性、第2に実証性、第3に脱イデオロギーの3つです。伝統的な教育学が、主観的で、思弁的で、イデオロギー的であったことへの反動で、教育社会学はその対極の特質を強調することで、自分たちの存在意義をアピールしました。

教育のことを考えるとき、伝統的な教育学のように「こうあるべき」という理想や規範から考えるのではなく、「こうある」という現実から考えるという客観性や、どのような原因—結果の因果関係にあるのか厳密な自然科学に近い手続きで検証するという実証性や、運動や実践からは一步距離を置くという脱イデオロギー性が、教育社会学の特質です。

近年、この教育社会学の特質は、学問の確立とともに少し薄れてきて、理想や規範の重視、主観性や感情の重視、政策提言や教育実践への傾斜など、伝統的な教育学と変わらなくなってきている面もあります。

戦後、文部省と日教組の対立があった時代は、教育学は日教組寄り、教育社会学は文部省寄りの御用学問と揶揄されたこともありました。今は最も政府の教育方針を批判しているのは、教育社会学の研究者になっています。これは、教育社会学の学問的特質は変わらないのに、世の教育の風潮の方が変わってきていると、教育社会学の研究者は考えています。

その時の制度や集団や文化的なものがどうあるということが、子どもや青年、そして学校のあり方に大きな影響を及ぼしますので、集団や組織や制度や文化を扱う、社会学的視点は、とても重要になると思います。

学校制度は、政府の考えで人為的に簡単に変えられるものですが、その制度変更が、日本全体に行き渡ります。ただ、実際その制度がどのように教育現場で実践されるかは、学校組織、学校集団、教員の意識、授業、児童生徒の心理や行動やそれらの相互作用によります。そのダイナミズムを、実証的に解明するのは教育社会学です。 (2014年3月9日)

2 新興の学問としての教育社会学

伝統的な学問分野と新興の学問分野は、時に軋轢、対立を起します。伝統的な学問分野は自分達の既得権を守ろうとして、新興の学問分野に関して、自分達の基準から判定して学問としての要件を満たしていないと決めつけます。

「教育社会学」も初期の頃は、伝統的な「教育学」及び「社会学」から、ひとつの学問分野として認めないという攻撃を受け、必死に戦ったということ、私達の先生や先輩達から聞かされて来ました。

教育社会学が、教育という研究対象を、社会学の方法で分析する学問であるのなら、社会学の一分野でいいはずで、わざわざ教育社会学という分野を主張したり、新しい学会を作ったりする必要はないわけです。それに甘んじない訳は、研究対象の「教育」の特質にあります。教育は、価値的なものを含み、また実践も重んじます。そのような価値的、実践的な教育を対象にするために、その研究方法も、社会学を基盤にしながらも、それとは違った独自の方法を探求してきました。

教育社会学が、学問のひとつの分野として外から認められるようになってからは、内部でその方法論に関して、伝統派と新興派の論争がありました。たとえば、エスノグラフィーの研究論文が学会誌に最初に投稿された時、その評価が真っ二つに割れたことがあります（一人の審査員は10点満点で9点、もう一人は2点）。

教育社会学の学問的性格として、自己の立つ基盤を自己反省・自己吟味するという特質があるため、伝統派も新興派の方法論を取り入れ自己革新を図り続けていますので、大きな対立には至らず、共存がはかられています。

価値的、実践的分野の研究には、学際性も大事になっています。それは社会学や文化学におけるカルチュラル・スタディーズのように、さまざまな方法論を許容、共存する研究分野のように思います。（2012年4月21日）

3 教育社会学の2つの立場

教育学と社会学の境界領域の教育社会学には2つの流れがあります。

1つは教育学に近い「教育的社会学」(Educational Sociology)。これはは教師の為の教育社会学で、教育実践のための社会的条件を探ろうとします。

もう一つは社会学に近い「教育の社会学」(Sociology of Education)。こちらは、教育実践には関心が薄く、教育やそれを取り巻く社会の仕組みを鋭利に客観的に見ようとしています。別の言い方をすれば、傍観者的に、意地悪く、皮肉に教育と社会の関係を見ようとしています。何よりも分析の切れ味を大事にします。

私が上智大学で「教育社会学」の授業を担当した時、目指したのはどちらかというと後者の客観的な分析を目指すものでした。受講した教育学科の学生から、「先生の教育社会学を

学ぶと、人が悪くなります」と言われたことがあります。当時は、そのことを気にも留めなかったのですが、この歳になるとそのことが気になります。

人はいつも損得（功利）を考え、差別意識を持ちながらそれを隠し、善意には裏があり、他者や社会の為よりは自分の利益の為に行動するものという人間観や人生観を、私は教育社会学の授業を通して学生に教えようとしたわけではありません。教育を客観的に、そして批判的に見ることは大事ということを書いたかっただけです。

学生たちが、教育社会学を学ぶにしても、人の善意を信じ、素直な優しい心を、大切にしたいと願っています。(2020年8月14日)

4 教育社会学の方法と内容

神田外語大学の「教育社会学」の授業（10月9日）では、教育社会学のこれまでの研究方法と研究内容について説明した。使った資料は、次の2つである。

① 藤田英典「教育社会学のパラダイム展開と今後の課題」（天野郁夫・藤田英典・荻谷剛彦著、改訂版『教育社会学』放送大学印刷教材、収録）。

藤田氏は教育社会学のパラダイムとして機能主義、人的資本論、方法的実証主義、葛藤理論、解釈的アプローチの5つを上げている。そして、戦後の社会の変動と教育社会学の研究内容や方法の対応を鮮やかに描き出している。

② Sociological Theories at a Glance, deMarrais, K. B. & M. D. LeCompte, 1999, The Way Schools Work: A Sociological Analysis of Education.

この資料では、教育社会学の理論として、機能主義、葛藤理論、解釈理論、批判理論の4つを上げ、その焦点、前提、主要な概念、分析のレベル、主要な問いと調査のトピック、批判、貢献した人を詳細に説明している。

教育社会学を専門に学ぼうとしているわけではない学生（ほとんどが教職免許のために受講している学生）に対して、教育社会学の学問的と意義と特質を講義しても、どれだけ理解され役に立つのかと疑いながらも、科目名が「教育社会学」だし、最初の方（3回目）の授業だし、教育社会学の内容と方法の概要を話すのもいいだろうと思い、このような内容になった。学生からは、次のようなコメントが返ってきた。

<教育社会がどういったものなのかというのが改めてしっかり理解することが出来ました。それぞれの時代背景に合わせて教育をどう調整してきたかが理解できました。印象的なのは、時代が発展し便利になるほど、生徒が荒れてくるということ/ 日本の教育の歴史（流れ）について学んだ。社会と教育はつながっていると思った。/ 戦後の教育社会学は時代が進むごとに発展を遂げてきた。時代ごとに様々な課題が出て来て研究も必要になってくる。教育における幅広い現状を考えると教育社会学なんだと理解した。/ 教育社会学の視点と他の学問の違いがわかる授業だった。教育社会学的見解というのは重要であると思った。社会が子どもの発達に大きく関わってということが再認識できた/ パラダイム

は問題の立て方、答え方の模範となるものということですが、何となく理解できますが、少し難しいところでした。/ 葛藤理論や相互作用理論などを用いて分析し、よりよい環境を作ることも教育社会学の一つの役目なのかと思いました> (2015年10月9日)

5 教育社会学のマクロな見方

教育社会学は、教育と社会との関係を扱う分野だが、人の社会化に焦点を置くか、教育の社会的機能に焦点を置くかで、そのアプローチも違ってくる。私自身は、人の社会化に関心があり、教育の社会的機能というマクロな見方にあまり関心がもてなかった。

私が学部・大学院時代に学んだ東大の教育社会学の研究室の雰囲気は「経済発展と教育」や「社会開発と教育」というテーマで教育の社会的機能をマクロに考察するもので、個人の社会化などミクロなことは、他の分野（心理学等）に任せておけばいいことで、教育社会学の使命はもっと別のところにある、教育の制度をどのようにし、教育はどのような社会的機能を果たすべきかを考えるべき、と考えられていたように思う。

別の言い方をすれば「研究は自分のアイデンティティ探しの為に行うのではなく、社会的に有用なことを行うもの」ということである。

今回、小林雅之・東大教授の給付型奨学金に関する意見（日経新聞、2月23日）を読んで、当時の東大の教育社会学研究室のマクロな研究の伝統がしっかり東大の研究者に受け継がれていることを感じた。（2017年2月14日）

6 実証性の大事さについて

教育社会学は、実証性を重んじる学問だが、その重要性を再認識するようなことがあった。一つは、児美川孝一郎「GIGA スクールというディストピア」（『世界』2021年1月号）をめぐって、友人と議論したことである。

私はこの論稿を読んで児美川氏が、現在の文部科学省の教育政策に対して、社会的な視野から批判的に見ていて、明解な論理展開で、とても感心した。経済政策の Society5.0 が、文部科学省の「個別最適化」に大きな影響を及ぼしているという見方にも感心した。

ところが、教育社会学専攻の友人たちの児美川氏に対する評価は、私の浅い読みを批判し、実証性や Reality を重んじるべきというものであった。

「(児美川氏の論は) 批判的な論考としての価値はあると思います。でも、教育社会学、歴史社会学かという、きちんとした理論とデータが足りないと思います。1つの研究が社会学または歴史社会学であるためには、それなりの社会理論枠組みと、一定のパラダイムに乗っ取った方法論に沿って集めたデータとその分析が必要だと思います。データおよびその分析は、質的なものでも、量的なものでも構わないと思います。社会事象としての

Reality が欠如している。ステレオタイプな見方をしている、教育現場の現実を見ていない。教育現場の観察なり調査なりして、現場の見ての論を展開すべきである」と。

この友人たちの指摘から、実証性の大切さを再確認した。

もう一つは、中村高康・東大教授の「大学入試改革は『失敗』から何を学ぶべきかーデータ軽視・現場軽視を繰り返すな」『中央公論』（2021年2月号）を読んだことである。

昨年の大学入試のあり方の混迷の原因の一つが、入試改革論者が、現実の大学入試問題の実際を知らず、また受験生の思いを全く考慮せず、入試改革を進めようとしたことであること、中村教授は、実際のデータでそれを示して論じている。これからも、実証性の大事さを再認識した。(2021年2月13日)

7 教科教育と教育社会学の関係

学校の授業の時間や活動と、授業以外のそれ（時間や活動）との関係をどのように考えればいいのであろうか。

授業は、①教材、②教師、③教室、④児童・生徒といった学校教育を構成する主要な4要素がみな入った場で行われることなので、学校教育の中核で一番重要な場であることは間違いない。したがって教育学の研究で、授業研究、教科教育が主流を占めることに異論はない。ただ、「授業研究、教科研究の視点をもたない教育学の研究は意味がない」とまで言われると、それは違うと言わざるを得ない。

内には見えず、外からなら見えることがある。中には囚われて自由な発想ができないことが、外からは自由に考えることができることがある。

また、「潜在的カリキュラム」という言葉を持ち出すまでもなく、児童・生徒が学校で学ぶことは、教師が教え導く授業の場だけでなく、学校生活全体からや教師が意図しないことから学ぶことが多い。小中高大と長い学校生活の何から学んだんだろうと考えてみても、授業や講義から学んだという思いや意識は少ないのではないか。自分で興味をもって調べたり本を読んだりして心に残っていることの方がはるかに大きいように思う。

教育学が授業（教授、教科）を中心に研究していたのに対して、教育学の中でも後発の教育社会学は、その外側の環境（地域、階層、文化等）に目を向けて、それとの関係で学校の教育を考えてきた。

それで教育学の研究が主観やイデオロギーを離れて客観性を増し飛躍的にすすんだ。教育社会学も、今はその研究の視点を段々外から中に向けている。

戦後初期に教育社会学研究を発展させた清水義弘・東大教授は、教育社会学は学校というお城の外堀（地域や階層）を埋め、最後に目指すものは天守閣（カリキュラム）だといういい方をされていた。(2019年2月21日)

8 教育の実践研究と教育社会学

教育の一番の中核は学校における授業であろう。教育学では、昔から授業研究や実践研究が盛んである。今も各教科の教科教育法では、それぞれの教科の内容に即した授業案を書くことが授業の基本になっている。そして模擬授業という形で、授業の実践の練習をよくしている。各県の教員採用試験には、模擬授業の実技試験があるところが多い。

私の専攻する教育社会学では、授業の研究をあまりみかけない。これは、教育社会学が戦後に講座や科目が出来て、教育学の中でも新しい分野で、それまでの教育学が研究してこなかった学校の周辺や学校の社会的な側面に自分たちの研究分野を求めたせいであろう。

教育社会学は、地域社会と教育、社会階層と教育、経済と教育、青年期と教育といったように、教育とその周辺分野との関係を扱い、学問としての地位を確立してきた。

戦後の日本の教育社会学研究をリードした清水義弘東大教授は、『教育社会学の構造』（東洋館出版、1955）の中で、実践記録の非科学性、主観性、呪術的な性格、英雄主義を批判していて、我々教え子はそれにかかなり感化された。

それでも「学校の社会学研究」の重要性を指摘し、教育社会学も学校の外堀である経済や地域社会や階層との関係の研究を埋めたら、最後は教育内容（カリキュラム）という教育の天守閣を落とさなければならないとよくおしゃっていた。

同じ教育社会学の研究室でも、旧帝大以外、つまり東京教育大（現筑波大学）や広島大学は、高等師範の伝統があり、授業研究や教師研究は盛んであった。

東京教育大学出身で千葉敬愛短大学長の明石要一氏が最近の著書『教えられること 教えられないこと』（さくら社、2021）中で、教育実践に関しての重要なポイントを、分かり易い軽妙な筆使いで書いている。

浅井幸子「教師の教育研究の歴史的位相」（佐藤学他編『学びの専門家としての教師』（岩波書店、2016）を興味深く読んだ。その論稿には、清水教授の実践記録批判への教育哲学者の勝田守一からの反論も紹介されている。そして、無着成恭の生活指導（生活綴り方）から教科内容の研究への変容（「固有名詞を持った子どもの喪失」）や、斎藤喜博の授業研究も、歴史的に位置づけられている。

清水教授の「教育学的思惟様式」（『教育社会学の構造』第2章）を読み返してみると、教育実践研究を無下に退けているわけではなく、その重要性も指摘しつつ、問題点を丁寧に指摘し、教育の科学的研究には何が必要かが書かれていること知った。それが柔軟な文学的な香りのするいい文章で書かれていて感心した。（2021年2月26日）

9 学部時代に学んだ調査技法

私が学んだ東大の教育社会学コースでは、学部3年次に「教育調査演習」という必修の授業があり、誰もがこれを経験して卒業していく。この授業が学部時代の授業の一番の思い出という卒業生も少なくない。

授業の1コマながら、調査テーマの設定、仮説の構築、調査票の作成、サンプリング、調査の実査、集計、分析、報告書の作成、発表（5月祭での発表や冊子の作成）と、社会調査の一通りのことを全部、自分達の手で行うので、調査の全容がわかる。大変な苦勞と時間を費やすものだが、その後、職場で役にたっているという卒業生も多いように思う。

私の時は同期6人で、勤労青少年の面接調査を古河市で行なった。面接は、中卒で集団就職して働いている勤労青少年を職場に訪ね、所長の目を気にしながら職場満足度や勤労意欲等について尋ねた。聞き逃した項目があると再度訪問という命令が指導教官より下り、実地調査の厳しさを学んだ。集計は回答を1枚のカードに写し、それを並べてカウントした。そこで縦横に並べるクロス集計という手法も覚えた。1票が大きな重みをもっていた。

後輩たちの「教育調査演習」のテーマは、児童・生徒やその親あるいは大学生を対象にすることが多くなり、その手法も面接調査からアンケート調査に移り、大量のデータをコンピューターで処理するようになっていった。

そこでの集計は大型計算機センターが使われ、また自分のパソコンでしかもSPSSという便利なソフトで集計、検定ができるようになっていった。ただ、楽になった分、データや集計の重みを軽く考えるようになってしまったように思う。昔はクロス集計1つ出すだけで大変だったし、検定にも手間がかかった。

私の場合は、その後、「東京都子ども基本調査」「日米高校生比較調査」「モノグラフ・高校生調査」「大学生文化調査」など、量的アンケート調査に多く関わってきた。

調査の手法は、私達の世代から大きく進歩している、昔の世代から何かいうのは時代錯誤のような気もするが、大切に思ってきたことを書き留めておこう。

第1に、単なる実態を明らかにする記述的な調査ではなく、何に役立つのかを考えた仮説的（説明的）な調査をすべきであろう。その際、因果法則を満たす3つの条件（時間的順序、変数の共変、第3の変数の統制—高根正昭『創造の方法学』講談社現代新書）は、必須である。

第2に、現代は複雑な多変量分析や、自由回答の分類まで、コンピューターがやってくれて、高度な解析ができる。しかし、最初に質問に答えるのは、生身の人間であり、その肌触りがわかるような分析や考察をすべきであろう。その為には、調査の初心に戻り、質問の仕方（ワーディング）、クロス集計といった初歩的な部分も大切にしたい。

第3に、量的調査と質的な調査を併用して、現実に迫るべきであろう。そして出てきたデータと自分の経験や感覚と違うときは、まずデータや集計を疑い、再点検をすべきであろう。実証は大事だが、データ至上主義に陥ってはならない。>

（『社会と調査』NO16）（2016年3月25日）

10 教育社会学研究者の社会的貢献

どのような職業に就くにせよ、その職業に就くのは、生計を立てたいということ同時に、社会に貢献したい（人の為に役立ちたい、社会をよくしたい）という気持ちがあるのである。ただ、その社会への貢献の仕方は職業や役職によって違う。

教育の分野でいえば、現場の教師として児童・生徒に接し、その子らの成長に貢献したいという人もいれば、校長になったり教育委員会に勤め、教育の条件整備をしたり教師を指導したりして（日本の学校）教育の質をあげたいと考える人もいるであろう。

大学教師の場合も、自分の研究に打ち込む人、学生の教育に情熱を注ぐ人、大学経営に生きがいを見いだす人、社会的に活躍する人など、いろいろである。

私の知り合いでは、研究の分野では優れて有名な人は多くいるが、大学の学長になる人や社会的に有名になり、時の教育政策や世論に影響を与えている人はあまり見あたらない。

それは、「教育社会学」というどちらかという世の主流に対しては懐疑的、批判的なスタンスを取りがちな学問の性格から来ているのかもしれない。ただ、教育社会学はデータを扱い、データや実際の事務の処理には得意なので、大学の実務を担当する副学長に就く人は少なからずいる。しかし学長になる人は少ない。

教育社会学が専門で友人の明石要一氏（千葉大名誉教授・千葉敬愛短期大学学長）が第10期の中央教育審議会の生涯教育分科会の分科会長になったという新聞記事を読んだ。頑張っている。（2019年4月24日）

11 多文化教育的視点

異文化に対する視点に関して、佐藤郡衛氏は、3つの視点のあることを指摘している。（『海外・帰国子女教育の再構築』）「単一文化的視点」「比較文化的視点」「異文化間的視点」の3つである。第3の「異文化間的視点」がいちばん大事で、そこでは「文化を動的にとらえ、相互作用を通して文化は変わりうるものとしてとらえられる」。つまり、異文化に接することにより、自分たちの文化も変わり、人生が豊かになると考える。

これは「多文化教育的視点」とも同一のもので、マイノリティ（権力がない少数者）の立場を尊重し、その集団や文化も尊重し、相互作用を行う中で、マジョリティの文化も変わり、幅が広がり、心が豊かになると考える。

外国籍の児童が半数近くいる千葉市の高浜小学校の佐々木惇校長の次のように述べている。「外国につながる児童の存在は、本校児童の学習活動のための資源の1つとなっている。より効果的な活用を図ることにより、学校教育目標の具現化につながるものと考えている。また、変化が激しい社会情勢の中、児童個々の違いを認め合える環境での学習活動が児童個々の成長を効果的に高めると感じている。」

多文化教育で、大事なことは、多様な見方を理解し、許容することである。その際に、バ

ソクスの「転換アプローチ」は有効な方法である。他国や他者の立場から、同じ事象を見つめる。たとえば、第2次世界大戦や広島・長崎への原爆投下を、日本の視点からだけでなくアメリカの視点からもみよみる。「原爆教育」は、日米で行われている。

「ニューカマーの家族は、自分たちの日本への移動に、それぞれの『家族の物語』を有していた。そしてそれに対応した形で、個別的な『教育戦略』を採用して、日本の社会に適応しようとしている」(出稼ぎニューカマー、難民ニューカマー、上昇志向ニューカマー) (志水・清水編『ニューカマーと教育』明石書店, 2001. p.364)

経済がグローバル化する中で、国を超えた物的人的交流が起こるのは必然であり、他者(当たり前を共有しない人)との関係を築き、「不快さに耐える」ことが必要。多文化教育を、理想だけでなく、現実的に考えることも必要である。(2016年12月10日)

12 敬愛大学のシンポジウム「多文化共生社会と日本」

敬愛大学のシンポジウム「多文化共生社会と日本—教育の視点から」が、水口教授の司会で、千葉の駅上のペリエのホールで開催された。4人のシンポジストの内容のある講演があり、参加者も70名近く満席で、成功裡に終わった。

登壇した清水睦美・日本女子大学教授の最近の論文を読むと、ニューカマー研究は、第2世代の問題に移っていることがわかる。

討論者として参加した私の質問を下記に記載しておく。

<外国籍の子どもの数の推移は、国別も含め、今後どのように変化していくのか。日本政府は、どのような政策をとろうとしているのか。県や市町村はどのような対応をすべきか。また地域社会の人々のなすべきことは何か。/各国の多文化共生の歴史をみると、いくつかのパターンがある。日本がモデルにすべき国はどこか。/多文化共生社会の教育で求められる視点は、平等(国籍に関係なく平等に扱う)という視点と同時に、何が必要か/学校には見えにくい文化や差別があると言われるが、それはどのようにしたら顕在化できるか。また克服できるのか/外国籍の子どもは、日常言語と学習言語は違い、前者は容易に学んでも後者の学びが難しいと言われるが、それはなぜか。どのような方法で、学習言語は学べるのか。/外国籍の子どもの母国の文化や母語の保持は必要か。それはどのような方法で可能なのか。ダブルリミテッド(母語も日本語も中途半端で、思考言語が育っていない。学力が身につかない)をどう克服するか。/外国籍の子どもへの指導には、「日本語指導」「教科指導」「適応指導」の3つがあると言われるが、それぞれ何が大きな課題であるのか。/外国籍の子どもの学力の保証やアイデンティティ形成は、なぜ大切か。これは、子ども達の将来設計と関係があるか。/ナショナリズムが高まる中で、多文化教育をどのように考えればいいのか。/外国籍の子どもへの教育が、日本の学校のあり方や学校文化への問い直しや日本の教育が豊かになるといわれるが、それはなぜか> (2018年3月25日)

1 3 困難を有する若者への支援

昨日、敬愛学園では全教職員が集まったの研修会が開かれ、その基調講演が、中央大学の古賀正義氏からあった。講演はとても素晴らしいもので、出席していた 300 人以上の教職員は聞き惚れた。私も「どうしてこのようないい講演ができるのだろう」と感心した。それは古賀氏の学識と説得的な内容と絶妙な講演技術（話し方）によるものである。同時に氏の専門の教育社会的な考察（データによる解釈）も、多くの人に受け入れられるようになったのだと、うれしく思った。講演のテーマは、「困難を有する若者の現状と支援一見えない未来に問いかける」。いくつか、心の残った考察を書き留めておく。

1 現代は人生の一定のシナリオや順序性が失われ、人が絶えず困難に巻き込まれる液状化するリスク社会である。

2 現代は優秀な子が就職し、就職できない子が、大学院まで進学する場合がある。

3 若者が困難を抱える（ひきこもり、中途退学、フリーター等）の原因は、1つに特定化できるものではなく、相互に多くの要因が重なりあっている。その原因と結果のとは表裏の関係にある。

4 ひきこもり事例にみる問題の複合性として、不登校、いじめ・友人関係の困難、受験・就職の失敗、非行・暴力、発達障害、職場不適應などがある。

5 家庭や私生活で問題が起こると、学校にいくどころではなくなる。学校や教師が嫌いになるわけではない。

6 高校中退の理由相互には関係があるが、その中核に「生活リズム」がある。生活リズムが確立していれば、中退に至らない。また、友人や仲間がいれば、中退に至らない場合が多い。

7 若者は長い期間悩んでいる。その悩んでいる期間に、援助の手を差し伸べられれば有効である。

8 困難を有する若者の社会参加が重要。支援者や相談者が必要。つまり個人の資質や努力不足だけが問題ではない。地域コミュニティの支援資源の利用不能が問題である。脱個人化の視点が必要。

9 問題を「個人化」せず、「社会化」すること。問題の自己責任論や家族責任論を超えて、学校・地域・家庭のネットワーク支援へ。

これまで我々は近代の論理で、個人の能力や努力で解決するのが自立への道と考えてきたが、ポスト近代の今は、人との協力、共同、共生、援助を求めることができる感性や能力（つまり「コミュニケーションの能力」）が大事である。個人で無理に頑張らない、そして共同、相互扶助のしなやかな姿勢が求められている、と感じた。（2016年8月23日）

1 4 英語の民間試験導入と教育の機会均等

教育は社会階層の再生産を行っているという指摘を教育社会学はよくする。そのメカニズムや実証的なデータでそれを明らかにすることが多いが、その事実を追認しているわけではない。社会階層と教育の隠れた関係(メカニズム)も暴露し、その現状を正そうとする。つまり、「教育基本法」の第3条、第4条にある「教育の機会均等」の原則を実現しようと、教育社会学の研究者も考えている。

その意味で、来年から文科省が実施しようとしている大学入試の英語民間試験は、教育の機会均等の観点から危ぶむ声は、高校現場からだけではなく、教育社会学の研究者からも上がっている。教育格差を助長し、階層の再生産を強めるのではないかと。(10月29日の朝日新聞朝刊の記事の一部を転載しておく)

<小林雅之・桜美林大教授(教育社会学)は「身の丈発言は、家計に応じてという意味であれば、自助努力主義そのもの。国がすべきことと全く逆の発言であり、問題だ」と言う。教育基本法には「すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない」、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない」とある。小林教授は「国はもっと支援策を講じるべきだ。全国高校長協会が延期を求めるなど、試験そのものへの批判も強い。再検討した方がよい」と言う。大内裕和・中京大教授(教育社会学)も「経済格差と地域格差。今回の大学入試改革が内包する問題点を大臣自ら明らかにした」と話す。大内教授は萩生田氏が「あいつ予備校通っててずるいよな、というのと同じだと思う」と語った点を問題視。「予備校費用は完全な私費負担だが、英語民間試験は公的な制度に関わる私費負担。公の制度が格差を助長させている点が問題」>.<「東大の中村高康教授は「制度的欠陥を抱えたままタイムリミットが来た。とにかく共通テストはいったん止めるべきだ」と訴えた。>

今日(11月1日)の朝のNHKニュースによると来年度4月から実施予定の大学入試の為の英語の民間試験が延期になったとのこと。文部科学省の方針が、研究者や教育現場の声によって、大きく変更されたという意味では、このことだけでなく、教育政策に関して、とてもいい前例になると思う。教育政策が上意下達ではなく、下からの意見も考慮されることを示したもので、多くの人の励みになると思う。文部科学省の責任を問うというよりは、文部科学省の柔軟性を評価したい。(2021年10月30日)

1 5 勝ち組は自己中心的？

「大学入学偏差値と人の良さは、ある値(真ん中あたり)から反比例する」と感じ、「これは冗談半分の仮説だけれど」と言いながら人前で話したことがある。「人の良さ」というのは曖昧なので、利己主義的傾向(愛他的傾向の逆)と言い換えてもいい。

受験勉強している時、友だちから遊びの誘いがあった時、せっかく誘ってくれたのだから

と受験勉強はやめて友だちの誘いにのる「心やさしき」若者は、勉強時間の不足で偏差値の高い大学には入れない。そこは、冷たく断る利己的傾向をもつものだけが、高偏差値の大学に入れるのである。もう少しゆるやかに言えば、受験勉強は個人でやるものであり、個人主義的傾向が強いものが有利であり、個人より集団（友だちも入る）が好きなものは、受験競争の勝者にはなれない。このように昔から感じていたが、同じようなことは、今日の新聞に掲載されていた。つまり、今日（2月28日）の朝日新聞の朝刊に『勝ち組』はルールを守らず自己中心的」という題で、アメリカとカナダの調査研究の結果が出ていた。

「企業の採用面接官の役割を演じてもらう実験で、企業に不利な条件を隠し通せる人の割合も、社会的階層が高い人ほど統計的に優位に多かった」「赤信号を無視したりする車は、高級車ほど多い傾向も公道の観察から浮かんだ」と書かれている。

日本でも、偏差値や社会的地位や収入と人の良さ（愛他的傾向）との関係を、実証的に調べたくなった。所有している自動車の車種（高級度）と運転のマナーの関係、グリーン車に乗っている人と普通者に乗っている人のマナーの違い、（でもこれでは貧乏人の僻み調査になってしまう？）（2012年2月28日）

16 「男らしさ」について

「世界経済フォーラム（WEF）は13日、2022年の男女平等度を示す「ジェンダーギャップ指数」を発表し、日本は総合ランキングで146カ国中116位となった。21年の調査から順位を四つ上げたが、政治や経済の分野で遅れが目立ち、先進国では引き続き最下位だった（@nifty ニュース7月14日）」とある。このことと関連があるかどうかわからないが、今の朝ドラを見ていて、日本人の思う「男らしさに」について、考えた。

若い男が沖縄の一地域の相撲大会に勝ち、そこで勝って好きな女性（ヒロイン）にプロポーズするという場面があった。対戦相手（二人）にも好きな女性の為に戦うという姿勢が見られた。このように、「男らしさ」とは、（か弱い）女性を守る強い男（性）というイメージが暗黙の前提として存在していることがわかる。それを誰も疑わない。

さらに、女性を幸せにすること（女性の夢をかなえることも含む）に、男は全力を尽くすこと、それを約束することも、男らしさの証として描かれている。女性はそのような強い「男らしい」男に守られ、庇護され、自分の夢をかなえ幸せに暮らすことが期待されている。このようなジェンダー観に「否」を唱えることが、朝ドラのヒロインたちにどのくらいできるのか、今後を見守りたい。（2022年7月14日）

II 大学、大学教員、学生

大学や大学教育に関する考察は、大学教員や大学生にとって、自分の日常を振り返ることでもあり、自己洞察、教育についていろいろ考えることに役立つ。

1 授業でのボーナス・ポイント

A 大学での学生との会話(T;私、S；学生)

「発表の時、詳しいレジメを作ってくると、点数は上がりますか？」(S)

「別に、点数とは関係ないけれど、、、」(T),

「では、レジメを作るのはやめます」(S)、「・・・・」(T)

B 大学での学生との会話(T;私、S1,S2；学生)

「授業の中で、3分間スピーチをしてくれた人にはボーナス・ポイントを上げます。スピーチしてくれる人は申し出て下さい」(T)。

「スピーチはやりたいと思ったのですが、点数の為にやりたくありません。ボーナス・ポイントがあるのなら、スピーチはしません」(S1)

「もらえるものは、もらえばいいのに」(S2)

学生のボランティア（自主的行動）に対する評価は、難しい。(2012年12月10日)

2 学び（学修）の自己評価について

教育において自己評価ということを言われて久しいが、その意味（価値）についてこれまでほとんどわからず、最近になって少し知ったことがあるので、書き留めておきたい。

私はこれまで評価というものは、自分の外の基準で行うもので（外部評価）、自分で評価するなどというのは主観的で客観性がないし意味がないと思っていた。

大学でいえば、大学ランキングというものがあり、偏差値、就職率、科研費の額、有名人輩出率など、外部の基準で判定してランキングが作られている（ただ、大学生生活の満足度などは、学生の自己評価によるものなので、自己評価といえなくはない。）。

高校でいえば、偏差値や有名大学進学率、スポーツの実績などの外部基準でランキングされている。公立の小中学校には、全国学力調査があり、都道府県別だけでなく、各学校の学力平均が算出されている。これら、皆外部の基準での評価であり、自己評価ではない。

先日、植草学園大学のFD研修会に参加して、関西国際大学学長の濱名篤氏の話聞く機会があった。その講演のテーマは「学修成果の可視化と質保証」というもので、自己評価を含んだ定性的評価（質的評価）の話であった。

そこでは、ルーブリックや学修ポートフォリオ等を使って、大学や学生がどこまで学修したのかを自己評価することの重要性が強調されていた。確かに、大学生たちは試験やレポートの評価が優良可不可などで付けられ、そのような外部的な点数だけでは、自分がどのような点が学修できてどのような点が学修できていないのかはわからない。その点、ルーブリックや学修ポートフォリオは、自分の学修を自分で評価するものあり、自分の優秀性や劣っている点を、自分で具体的に知ることができるものである。この意味で、学修の自己評価というものは、外部評価より優れているかもしれないと思った。

また濱名氏は、大学には「リフレッシュ・デイ」が必要と提案している。それは「各学期の試験やレポート等を返却することにより、最終的にはどのように評価されていたかを明確にし、自分の学習成果を確認し整理することにより、自分の得意な点や不得意な点を明確にして、次の目標設定につなげてゆく取り組み」である。

確かに、大学でも試験答案やレポートの返却し、学生の学修できた点や出来なかった点を具体的に示せば、学生に対する効果は大きいであろう。これは、多分アメリカの大学ではやっていることである。これを日本でやるためには、日本の大学の授業のシステムをかなり変えなければならないであろう。(2019年3月21日)

3 教育実習の効果

6月は、教職課程を履修している学生にとって、教育実習の季節。小学校の場合、4週間と長い。

学生も教育実習の前と後ではかなり違い、大きく成長している。それは、単に教育実習の効果というよりは、それまでの大学での授業や演習の結晶化を表しているのであろう。

学生は教育実習の経験を通して、教員の大変さを知り教員志望を諦める学生もいるが、一般的には、教職への意識を強める学生が多い。中には、教員にはならない免許だけほしいと言っていた学生が、教育実習の経験を経て、強い教員志望に変身する場合もある。

先週は南房総の最南端の小学校で実習の学生がいて、その精錬授業を見学に行った。南房総も過疎化が進み、学校を統合しても、1学年1学級で、その人数も20名強。国語のいい授業を展開していた。校長先生は、千葉敬愛短大の出身の素敵な女性校長だった。この学生も、教育実習でまた一段と成長して、大学に戻ってくるであろう。(2014年6月9日)

4 現代学生考

これまでいくつかの大学で学生に接してきた経験から、大学と大学生に関して考えてみたい。自分の場合は、受験勉強を終え大学に入学して受けて授業はさっぱり心に響いてこなかった。それで大学の授業を諦め、大学外に知の源泉を求めた(読書等)。

1970年代後半に大学教師になり学生に接してみると、大学の講義への出席率は2割程度と低く、大学生活の中心は友人関係とサークル活動であった(スキー、テニス、マージャンは定番)。学生たちは厳しかった受験競争の疲れを4年間のモラトリアムの期間に取り、企業戦士として社会に出ていった。企業も受験学力は評価したが、大学教育には何の期待もしていなかった。

1990年代以降になると、大学の授業改革が進み、「大学の学校化、学生の生徒化」が進行して、学生たちは素直になり、授業への出席率は急速に高まった。学生たちは大学の授業から何かを学ぼうと考えたのであろう。情報化社会になり情報量が膨大となり学問が高度化しているので、どの分野でも基礎的な部分は大学で学ぶ必要が生じた。それで知識は大学の授業から得るもので、大学外から学ぶという意識は薄れていった(読書の習慣がなくなった)。

『キャンパスの生態誌』(潮木守一、中公新書1986)によると、大学には、「自動車学校型」「知的コミュニケーション」「予言共同体」、の3つがあるという。現代の大学をみていると、この3つが薄められた形で存在していることを感じる。資格試験や採用試験に向けての知識技術の習得(自動車学校型)、ゼミや演習の必修化(知的コミュニケーション)、行動を推奨するアクティブ・ラーニング(予言共同体)。さらに、幼い頃からのデジタル環境の影響(スマホとゲームの世界への耽溺)と社会的貧困からくるアルバイト生活が加わる。

これらをバランスよく配置し、大学生活を送ることが今の大学生に求められている。大学生活満足度は年々上昇していることから、それは成功しているのであろう。ただ、学生の批判精神が薄れていることが気付きである。(「内外教育」ひとこと、2019年10月8日号)

5 大学での講義と私語について

同世代の元大学教師のN氏が、私が以前に「敬愛大学国際研究30号」(2017年)に書いた「学生、大学教育、学問他について—教育社会学からの考察」(下記、再掲)を、読んでくれたようで、電話で大学の授業での私語のことが話題になった。N氏は私が「大学の授業という場で、私語やスマホいじりが頻繁にみられる」と、書いたのが気になったのであろう。

N氏は、授業の初回に学生に、「良い授業をする、私の授業を真剣に聴かなければ、皆さんが損をする、私語・内職や居眠りなどを禁止する」と明るく宣言するという。そのことは自身に「相当なプレッシャーを与え、頑張るエネルギーになり、自分にもいい授業を行うことを課し、学生の為になる授業をやるように努力する」という。このように授業の最初にきちんと教員の意向や意気込みを話すと、以後の授業ではほとんど私語はないという。もっともN氏は博学の方で著書や論文の多い研究者なので、その講義内容は密度の濃いものだと推察される。同時に落語が好きで、落語から話し方や間の取り方を学んで、それを自分の話し方も取り入れたという。

私の授業観や実際の授業はN氏のものとはかなり違っていたと思う。「私のこれまでの大

学での教員人生を振り返ると、とにかく書かれた優れた資料を探して、その説明に終始してきたように思う。話し方を工夫したこともない。内容さえすぐれていれば、学生はそれに感銘を受けると考えてきた。」と以前のブログに書いたことがある。つまり話し方に工夫が必要とあまり感じたことがなく、その改善の努力もしてこなかった。学生はさぞ聞きづらく、退屈だったのであろう。

私の教室での講義は、どこでもかなり私語が多かったのではないと思う。上智大学時代の「教育社会学」の講義では、聴講している学生の中で私のゼミ生のおしゃべりが一番多い時もあり閉口したことがある。少人数の講義より、かえって上智全学から受講者が300人以上いた「教育原論Ⅱ」の授業の方が、私語がなく静かであった。

私の私語観は、「現代学生の私語」と題して「IDE・現代の高等教育」(NO323, 1991)に書いたことがある。それを読んだ同僚の先生から、「学生に甘すぎる」と批判されたものである。今、読んでもあまり意見は変わっていないので、今私が大学で講義をしたら相変わらず私語が多くなることであろう。

私が大きな影響を受けた研究者のひとりに作田啓一がいる。作田啓一の著作は何度も読み返した。ただ、教えを受けたこともなく、面識もない「師匠」である。武蔵大学のゼミで作田啓一の「価値の社会学」(岩波書店)をテキストにして、作田啓一がいかに素晴らしいかを力説したことがある。ゼミ生のひとりが京都に行った折、京都大学の作田啓一の授業に潜る込み聴講してきて、その様子を報告してくれた。「ぼそぼそと小さな声でしゃべり、ほとんど聞き取れなかった」とのこと。本の文章は緻密で明晰なのに、話はひどいのかと思った。そのことで、氏への尊敬が薄れたことはない。(2022年1月29日)

6 オチやボケのある授業—関西と関東の大学の違い

東京育ち、湘南住まいの知人が、大阪に住み、関西の大学に勤めるようになってもうすぐ1年。彼は、大阪が面白く、たいそう気に入っているようだが、学生から、「先生の話にはオチがありませんね」と言われて、ショックを受けたということを、年賀状に書いてきた。

昔全国大学生協のシンポで、私の前の報告者の竹内洋氏(当時京都大学助教授)の話聞いて、青ざめたことがある。話はユーモアに満ち、ボケとオチがありで、聴衆は爆笑とともに聞き惚れていた。その後で、どのような話をすればいいのか冷や汗ものだった。居直ってデータの解説に徹し、その場を凌いだ、関西の話文化の伝統のすごさを知った。

自己卑下や自虐的などの自分を低く言うのは、関西の漫才の文化と、確か多田道太郎が書いていたと思う。つまり、漫才は、最底辺の位置に自分を置いて聴衆の優越感をくすぐるものである。ボケ(自虐)に対するツッコミは、それに対する優れたリアクションであり、関西では日常化しているという。

それから、私は自分の講義にも努力してボケ話やオチを入れるように努めたが、学生の反応はイマイチ。関東の大学で、自分がボケた話をして関西風にツッコンではくれなくて、

その通りにとられ、憐憫と軽蔑の混じった視線を向けられる。

私は関西で生活したことはないが、関西の血は流れており（父が兵庫の出身、親戚は関西に多い）、関西人の祖母によく面倒を見てもらい、関西弁、関西文化に浸ってきたので、関西の文化は身体化されているはずである。これまで関西の大学で教える機会がなく、それが試せていないのがとても残念。（2013年1月9日）

7 京都大学の教育社会学の学風

同じ「教育社会学」の講座でも。京都大学の教育社会学研究室の学風が全く違い、政策研究や実証的な研究よりは、理論的、歴史的、文化的（時に文学的）、人間的な研究が主流だったのではないかな。

私自身は、京都の学風を作田啓一や多田道太郎、井上俊、竹内洋氏らの文献を読むことでしか知ることが出来なかったが、京都の教育社会学の研究室で学んだ石飛和彦氏（天理大学教授）は、当時の研究室の授業の様子的一端を、氏のブログに書いていている。その箇所を読むと、東大とはかなり授業の内容や雰囲気や学問の継承の仕方が違うことがわかる。氏のブログより一部転載させていただく（転載箇所は、非常勤の大村英昭教授のこと）。

くたしか大学院の M2 のときに大村英昭先生が集中講義でいらしたんだってと記憶する。ゴフマンの話をされて、たしか落語のような口調とあいまってすごくおもしろかったという印象の記憶があり、また、ゴフマンの邦訳書についていろいろ言っておられたような記憶がある（まあ翻訳についてというか…「出会い」って何なんだ、とか…）。ジラールの模倣欲望についても話しておられたような覚えもあり、自分はレポートでジラールについてなんか文句を言ったような言わなかったような M2 的イキリを發揮したようなものを書いて提出したような覚えもある。ともあれ、大村先生は、面白くてすごく切れる、恐ろしい先生、という印象なんである。（中略） また、大村先生が、自殺の例として「いじめ自殺」をあげて、それを、正当にも「愛他主義」（と「宿命主義」）に関連付けているところに共感しつつ、自分も以前そんなことを書いたり学会発表したりしたなあと思い出したりしてた。それはまあ、世代、ということで、大村先生のもを読み、また集中講義を受け、またそこから自分はエスノメソドロジーのほうに行きたいと思って、じゃあ何をどう考える、とか、また薬師院さんのデュルケム論を読み、そのうえでデュルケム=ゴフマン=ガーフィンケルの線で何が考えられるか、みたいなことをぐじゃぐじゃいいつつ大学院生時代を送っていた世代なわけだから、まあ、この本は、なにか懐かしい、しかしそこから自分はなにか別の一步を進めようとしていまに至る、みたいな、そういうかんじが、個人的に、したわけである。（以下略）（2020年9月）

8 大学の遠隔（オンライン）授業について

8月5日朝日新聞は、大学のオンライン授業について、「これが授業と呼べるのか」「友達ゼロで夏休み」「オンライン授業 憤る学生」「メンタルケアも課題」という見出しで、オンライン授業が問題であるという論調で、記事を掲載している。また今週の週刊ダイヤモンドは、大学のオンライン授業の不備と学生のオンライン授業への悲鳴を特集している。

これを読むと、高い授業料を払いながら、いろいろな相談を大学の教職員にもできず、大学の施設を使えず、友人も作れず、サークル活動もなく、繋がりにくいZoomの授業、教科書を読んで課題に答えなさいという手抜きの授業、課題ばかり多くて、提出してもコメントもない授業、訳の分からない実験の指示など、学生のストレスがかなり高まっていることがわかる。

しかし、大学や大学教職員も努力をして、オンラインでさまざまな工夫をしている事例も多いのではないかな。

私は、講義ノートと授業資料を15回分、大学の教務のサイト（KCN）で配信して、毎回の課題への解答を200字～1000字で求め、それへのコメント返すだけのシンプルな方法をとっている。学生の学びと解答は、例年の教室での講義以上によいものが得られている。それは、授業資料をいろいろ工夫したせいもあると思うが、活字を読んだり映像を見るのは皆と一緒によりは、一人で自分のペースで閲覧してもらった方が、理解が深まるように思う。教室での授業では、スマホをいじったり私語をしたり友人に気を遣い授業に集中できないことが多い。

高等教育に詳しい小林雅之氏より、次のようなコメントももらっている。「問題は教師の方で課題ばかり大量に出して、一切フィードバックがないなど、これまでの手抜きをオンラインで続けている者が少なくないようです。学生も教師もこれまでとは異なる授業形態であることを十分に認識せず、従来の授業の延長で考えていては、オンライン教育は質が低いということを立証することになります。」デジタル時代の大学の授業に関しては、考え方を変える必要があるように思う。（2020年8月7日）

9 大学の遠隔授業の効用

新型コロナ禍で、大学は新学期より遠隔授業をはじめ、そのまま継続した大学が多い。学生の通学時の過密を避けたいという理由が主なものであろう。また遠隔授業を行う設備とデジタル能力が教員と学生にあったということでもある。

遠隔授業には大きく二種類あり、一つはZoomのように同時配信・双方向の形態、もう一つはオンデマンドの形態。学生からは、遠隔授業に対しては不満も聞かれる。「ネットが繋がりにくい」「教室で皆と一緒に勉強したい」「キャンパスライフを楽しみたい」等。教室での授業より遠隔授業の方が、学生の自主的学習時間が増えるということを指摘した

い。

昨年 11 月に行われた文部科学省の「全国学生調査」によれば、日本の大学生は授業にはよく出席する（週に 11 時間以上出席する学生が 72%、平均 17 時間）が、「予習・復習・課題など」をする学生は少ない（週に 5 時間以下と少ない学生が 67%、平均 5 時間）。

アメリカの大学には、学生を勉強させる仕組みが整備されている。各授業の必読文献が配布され、討論、ノートの点検、レポート、試験問題と学生を勉強させる仕組みは整っていて、学生の自主的勉強時間は長い。

日本の大学でも授業改革が行われているが、「全国学生調査」の結果が示すようにその成果はあがっていない。それが、遠隔授業で様変わりした。

遠隔授業になると、通学時間、友人との私語、教師の叱責や無駄話等がなく、学生は授業の内容や課題に集中でき、自主的学習時間が確実に増える。教室にいる時のようにスマホをいじったり私語したりをして、授業をやり過ごすことはできず、課題の文献を自分でじっくり読まざるを得ない。遠隔授業の効用は意外と大きい。

今後は遠隔授業も定着して、教室での授業との併用になることが考えられる。これを契機に日本の大学の授業や学生の学び方が変わることを期待したい。

（「内外教育」ひとこと、2020 年 8 月 4 日）

1 0 新型コロナ禍の大学生の勉学態度

大学教育学会が、会員を対象に、各大学各教員が新型コロナ禍に対してどのような対応をしたかの調査を昨年秋（10 月）に実施し、その結果をHP（下記）に公開している。

概要を千葉大学の白川優治氏（教育社会学）が「教育学術新聞」に書いている。調査の回収率が 24.7%、回答数 312 件と少ないのが少し気になるが、今年度前期の大学や教員の対応、（教員の目から見てのことだが）学生の反応などが示されていて興味深い。

「授業や課題に対して意欲的に取り組んでいた学生」の割合は、「9～10割」が 30.3%、「7～8割」46%と、多くの学生が意欲的に取り組んでいる。またコロナ禍以前と比べて学生の授業や課題の取り組み状況について 40.6%が「良くなった」と感じており（「変化なし」27.8%、「悪くなった」5.7%、「一概に言えない」19.2%）、学生の学習状況に対して肯定的な評価が多くみられた。（2021 年 2 月 6 日）

1 1 新型コロナ禍と大学生

新型コロナ禍で多くの大学で、授業が遠隔になり、大学への入構も制限されている。その為、大学生が対面授業を受けることができず、サークル活動も交友関係もなく大変な不満とストレスを抱えている、と論じられることが多い。実際はどのようなのであろうか。大規模な大

学生調査から、その実態を見てみたい。

参照するのは昨年10月～11月に全国30大学11,028名から回答を得た「CAMPUS LIFE DATA 2020」。(全国大学生生活協同組合)

「学生生活は充実している」と答えた学生は74.2%で、1年前より14.6%減少している。学年差がある。「充実している」は1年生56.5%、2年生77.1%、3年生81.5%、4年生86.4%と、通常のキャンパスライフ未経験の1年生の不満は高い。2年生以上は前年とほぼ変わらない。上級生は対面授業やサークル活動がなくても、大学生活の充足度は変わらないと感じている。

大学は新型コロナ禍の中で遠隔授業が主になりになり(72.8%)、学生たちの勉強時間は増加している。授業や大学外の勉強時間の1日の平均は5時間21分と、前年より28分増加している。読書時間も1日32分と2分増加している。「大学生活の重点」では「勉強・研究」(33.4%)が1位で、高い水準を維持している(40年前19.5%)。

このように、大学の遠隔授業で、生活の中心が勉強になっている。これまでの大学生の生活が、授業に出席さえすれば私語をしてもスマホをいじっていても楽々に単位が取れたものが、遠隔授業になり自主的に勉強しない限り単位の修得が難しくなっている。教室での友人との私語はできないが、ズーム等で議論はでき、友人関係は成立する。教員は一人一人にコメントを送るなど、学習弱者への配慮も増やしている。

アルバイト収入は1か月自宅生37680円、下宿生26360円で、前年度よりそれぞれ4～7千円減少している。小遣いや仕送りも減っており、支出を切り詰めた学生生活を送っている。大学生に必須の「合宿」「留学」「旅行」「就職活動」は大きく減少している。国や各大学の学生への経済支援が必要であろう。学生の気にかかっていることとしては、「就職のこと」が一番多い(42.7%)。

このような学生の実態もふまえ、コロナ禍時代の大学のあり方として、遠隔授業を工夫し、サークルや友人関係もヴァーチャルを生かし、学生が自主的に学び、卒業後のリモートワークにも適応できる能力や資質を育てていくことが必要であろう。

(「内外教育」2021年5月18日)

1.2 オンデマンドの大学の授業 一武内 2021年度 後期授業 「教育課程論」

今年度(2021年度)後期は、敬愛大学で1コマだけ担当した。科目名は、「教育課程論」(中高向き)で、受講生は教育学部と国際学部の学生が55名、経済学部が19名、合計74名である。授業形態は遠隔のオンデマンドで行った。

基本的には、毎回KCNで「講義メモ」と「授業資料」を数枚配信し、講義メモの最後に書かれている設問に、200字から1000字の字数で答えるよう指示した。学生の書いた解答(コメント)には、毎回個々の学生にコメントを返したので、その数は1000を超えたことになる。

私の授業の場合、学生は教室での対面授業より、遠隔の授業の方がよく「講義メモ」や「授業資料」をよく読み、しっかりした解答（コメント）を、毎回寄せて来ているように思う。学生にも他の受講者の解答（コメント）の一部を解答例として、匿名で、KCN のクラスフォーラムで知らせている。今回の毎回の講義テーマは、下記のようなものである。

第1回 教育課程とは / 第2回 教育課程の2側面 / 第3回 学習指導要領の変遷 / 第4回 「主体的・対話的で深い学び」とは / 第5回 教育に関するWEBサイトを読んだ感想 / 第6回 学校と地域社会の関係を考える。 / 第7回 新型コロナ後の教育 / 第8回 中学生・高校生の特質、生徒文化 / 第9回 ジェンダーと教育 / 第10回 受講者の解答（コメント）を読んだ感想 / 第11回 新型コロナ禍と教育（敬愛大学シンポの感想） / 第12、第13回 総合的な学習の時間 総合探求について（静岡県立大学の学生作品への感想） / 第14回 高校教師について。高校の新教育課程 / 第15回 まとめと最終レポート課題 （2022年1月17日）

1.3 ズームによる大学授業ー 馬居政幸静岡大学名誉教授の授業

大学の遠隔授業は、ズーム行われることも多い。その記録をHP(<https://www.uer-labo.jp>)に残している人がいる。それは 静岡県立大学「総合的な学習・探求の時間の教育・指導法」の2021年9月に行われた馬居政幸静岡大学名誉教授の集中講義である。私の敬愛大学での授業でも、その記録を読んで感想を書いてもらった。その感想も掲載されている。

今の学習指導要領で重視されているアクティブ・ラーニングや「主体的、対話的で深い学び」は、全ての教科で提唱されているものだが、「総合的な学習の時間」（中学校）や「総合的な探求の時間」（2022年度から、高等学校）が、一番実践しやすい時間（科目）である。それを教職課程の授業で教えるのには、その背後の理論等を学生達に講義すると同時に、それを実際に学生達に協働学習で実践してもらうのが一番効果的であろう。この授業ではその基礎や背景になる論文、著書、答申が多数のものが教材として提示されている。それも大変参考になるが、実際の授業の様子が詳細に記録され（多くのゲストの講義もある）、さらに、学生の協働学習の成果が、記録に残されている。一つの成功した、模範になる大学の授業だと思われるので、ここで紹介させていただく。（2021年12月24日）

1.4 大学生も一人一台PCで授業を受講する時代

小中学校等に児童生徒一人一台の情報端末（タブレットなど）が配布されているが、大学生も情報の端末つまりPC（パソコン）を、各自教室に持ち込み、授業を受ける時代になっている。

それは、学生がノート代わりにPCを教室に持ち込むということではなく（もちろんその

ようなことはこれまでもなされてきたが)、教員が PC を各自授業に持ってくるように学生に指示し、学生が各自 1 台の PC が手元にあるという前提での授業が展開されるということである。

大学の教室には Wi-Fi が来ていて、教室の全面の大きなスクリーンに、教師の PC からの映像が映し出され、皆が見るということはこれまでもなされてきたが、それだけでなく、教室で学生一人ひとりが自分の PC で、教師の指示したサイトや学生各自が検索したサイトを見ながら、授業を受け、一人一台の PC を使って学習や討論をするという新しい方法である。

馬居政幸・静岡大学名誉教授の「2022 年度静岡県立大学『総合的な学習・探求の時間』教育・指導法」の授業の詳細が、馬居教授の HP (<https://www.uer-labo.jp/#>) に掲載 (公開) されているが、そのような授業が展開されていることがわかる。大学の遠隔授業だけでなく、対面授業も大きく変わる時代になっている。(2022 年 5 月 27 日)

1 5 「大学入試共通テスト」の国語の問題について

大学入試の制度に関してはいろいろ議論されることが多いが、大学入試問題の中身に関して議論されることは少ないように思う。今回の大学入試共通テストは、理系の平均点が低いようだが、文系科目の試験問題に問題はないのであろうか。たとえば、国語の平均点は前年より 8.7 点低いが、数学などよりは高く妥当で、適切な問題が出されたときみなされている。ただ実際にその出題内容を見てみて、疑問に感じるものがいくつかあった。

現代文に関してしてみると、課題文がとても難解なことである。2022 年度の大学入試共通テストの国語の評論は、檜垣立哉・阪大教授と藤原辰史・京大准教授の「食べること」に関する哲学的な内容と、文学は内向の世代の黒井千次の「庭の男」の一節が出題されている。

今の若者 (高校生) の読書離れがすすみ、長い文章を読めない書けない若者が増えていると言われる中で、同一年齢の半数近く (約 53 万人) が受験する大学入試共通テストの試験の問題に、このような難解な文章を読ませる意味はあるのか。出題者は、受験生の活字リテラシーの実態をどの程度理解しているのか、何を意図してこのような難解な文章を出すのかと疑問に思う。

作家の黒井千次氏の「庭の男」の内容は、高齢者の生活心情がよく描かれていて同世代の老人が読むと感銘を受けるが、これを高校生に共感しろ、異文化理解が大事だというのは、あまりに押し付けがましいように思う。もう少し、高校生の心情に寄り添った内容の文章でないと、文章題の設問に対して、高校生の共感や理解を得るというのは無理ではないかと思った。現代の大学入試の国語は、若者が老人の気持ちをどの程度理解できるかを測るというものなのであろうかと疑いたくなる。

現代文の設問を見ると、書かせる解答もあるが、大部分は 4～6 拓の中から、解釈として

適切なものを選べというもので、もし課題文を全く読まないで、解答してもかなりの確率で正解に至ることができる。明らかにおかしい解答の選択文を除外すればさらに正解の確率が上がる。このように、数学などと違って、国語の場合内容を全く理解していなくても、正解に至る確率はある程度ある（社会や英語も同じであろう）ので、平均点が高いと言っても、問題がないわけではない。

作家の古井由吉の文章が大学入試で出題されることは多い。古井由吉の文章は独特で慣れないととても読みにくい。芥川賞を受賞した『杳子』は名文だが、わかりにくい。その冒頭部分を出題している大学もある。それは情景の描写と心理描写が入り交じり、何をいつているのか理解するのに苦労する。特異な人、マニユアックな人でないと好きになれない。それが入試によく出るということは、国文学者の古井ファンが国語の入試問題を作り、自分の好みの文章を選んでいるとしか思えない。一般の受験者に大学教員の好みを押し付けるのはいいことなのかと、少し疑問に思う。

別の見方も書いておく。安藤宏・東大教授は「なぜ国語に文学」という題で、「異質な他者に触れ、心情を思う」ことがこれからは大事ということで強調している（朝日新聞 1月22日朝刊）。高齢化社会の中で若者に世代の違う高齢者という「異質な他者に触れ、その心情を思う」ことが必須になるというのなら、（上と逆に）今回の黒井千次の文章の出題は時代の要請に合い、きわめて適切なものであったともいえる。

上記は「若者の読み書き能力が高くない」という前提で書いているが、実際大学で学生に遠隔授業で資料を読ませそれへのコメントを書かせると、学生は難解な文章の内容を読み取り、いい文章でコメントを書いてくる。それは少数の学生ではなく、多くの学生に見られる傾向である。大人の世代が思う以上に、今の若者世代の読み書き能力は高いかもしれないとも思う。（2022年1月24日）

16 大学教員と本

渡部昇一「知的生活の方法」（講談社現代新書、1976年）を読んだ時の衝撃は忘れられない。知的生活を送る為に、誰からも邪魔されない集中の時間が必要であり、その為には手元の参照する本を置いて置くことは必須であると書かれていた。優れた研究者や作家は皆立派な蔵書や書庫を持っているという。

そのような考えが、この頃少し揺らいできた。今はネットで何でも調べられる時代である。論文の引用は本からすべきと言われていたが、今はネットからの引用も許されるのでないか。写真もプリントアウトする必要はなく、デジタルで保存した方が見やすい。映画やドラマも、これまでは優れたものがDVD化され、それをレンタルして見るのが普通であったが、最近のドラマや映画はDVD化を考えず、（いつでのどこでも見れる）ネット配信だけのものもあるという（Netflix等）。

同じように、本もデジタルで読む時代で、それを印刷した本として残す必要はなくなるの

ではないか。研究者が書く論文もデジタルで読むことができれば、それを印刷媒体に落とす必要がない。現に、学会の発表要旨も活字の冊子ではなく、デジタルで配布（配信）されるところが増えている。また大学のシラバスや紀要もネットで読むようになってきているところが多い。

研究者は、自分の研究の成果を、生きた証として後世に残すために本を出版したい、一般の人も自分史を本にして後世に残したいと考える人は多いが、それは今のデジタルの時代に的確な方法なのか考える必要があるかもしれない。

上記のように書きながら、旧世代の者には本のない生活は考えられない。本（棚）に囲まれた部屋にいと落ち着く。本の題を見ただけで、その書籍に書かれていたことが思い浮かび、読んだ当時の心情が蘇る。どんなに意匠を凝らした建築や部屋でも本（棚）がおかれないと貧相に見える。どんな素晴らし自然や景色も、本（棚）に囲まれた部屋を超えることはできない（と私は思う）。このように、全く違う考えが、私の中で行き来する。

（2022年1月25日）

17 放送大学について

私の放送大学との付き合いは長い。かれこれ30年以上になる。面接授業は、放送大学が千葉幕張に開校して以来、千葉学習センターの面接授業を20年以上担当した。初期の頃は、放送教材と面接授業がセットになっていた。確か私の担当した科目は「現代社会と教育」である。新井郁男先生や岡崎友典先生の番組のセットのものだったと思う。平日の夕方6時過ぎから8時過ぎまで4週に渡り講義して、受講生は50人を超えた時もあったが、最後の方は、2～3名の時もあった。最後の会が終わるとよく学生と食事会に行った。

放送大学では（かつては）卒論論文も必修で、その指導も、手伝った。文京学習センター専任の岡崎先生の手伝いで、卒論指導を何年か行い、指導の学生に上智大学の私の研究室に来てもらったり、代々木オリンピックセンターで合宿したりしたのが懐かしい。その後修士論文の指導もした。

番組作りは、『子ども・青年の生活と文化』（テレビ、心理学の藤崎先生と共同）、『子ども・若者の文化と生活』（ラジオ、岩田弘三先生と共同）の主任講師のほか、深谷昌志先生、新井郁男先生のテレビ番組に出させていただいたことがある。テレビやラジオは苦手という意識は最後まで消えなかった。

4年前より客員教授として勤めている東京文京学習センターでは、また「子ども・青年の特質と教育」と「大学と学生支援」（小林雅之、岩田弘三、鈴木美伸氏と共同）の面接授業を毎年開講した。その他に幅広い分野から面接講師を探し、お願いして、担当していただいた。教育に関する「自主ゼミ」も、月に2回ほど開講した。

放送大学の存在は、意外と一般に知られていない。暇な方は、番組を見たり聞いたり、学習センターを見学されることをお勧めする。（内容のレベルは、一般の大学と比べ遜色がな

い。いや、それ以上だと思う)。東京文京学習センターは、昨年全面改築になり、レンガ作りの外装だけでなく、中のインテリアもおしゃれで明るく、設備も充実している。

(2012年12月22日)

18 大学の公開講座について

今から四半世紀くらい前は、教育の世界では、生涯教育や生涯学習のことが盛んに言われた。学校教育中心の教育から生涯学習中心の教育への移行がいわれ、学校教育もその観点からの見直しがいわれた。大学もその一翼を担い、各大学は社会人入学や大学の公開講座を開設するところも増えた。私の勤めていた上智大学も公開講座(コミュニティ・カレッジ)の伝統があり、多くの講座を上智の専任教員が開設していた。私も高等教育関係の講座を3回ほど開設し、その記録を『大学とキャンパスライフ』(武内清編、上智大学出版、2005)として残した。

今は、この生涯学習についてあまり聞かないように思う。団塊の世代が高齢化して生涯学習を必要ないし継続している数は増えていると思うのだが、それが常態化しているせいなのか、必要性が説かれたり、新たなことが提案されたりするのを目にしないように思う。文部科学省のサイトで「生涯学習」というキーワード入れて検索してみると「第11期生涯学習分科会」というのがあり、そこで生涯学習のことが検討されているらしいことはわかる。ただその検討課題を見ると、「今般、社会全体のデジタル化が進む中、国は「デジタルの活用により、一人ひとりのニーズに合ったサービスを選ぶことができ、多様な幸せが実現できる社会」を目指すとし、「誰一人取り残さない、人に優しいデジタル化」を進めていくこととしている。」とか、「高齢化が進む地域社会(基礎自治体の中心部を想定)において必要とされる社会システム・社会の閉塞感や活動の制約が増す中で、生涯学習・社会教育関係者の果たすべき役割」「今回は、生涯学習と若者を取り巻く環境」をテーマに議論を行いたい。」など、一般的で、斬新さが全く感じられない。

私の関係する敬愛大学にも「生涯学習センター」があり、千葉の広報にも載っている。独自の講座を開設するだけでなく、もう少し大学の授業を公開し、大学教育の生涯学習化をはかってもいいように思う。(2021年9月2日)

Ⅲ 学校教育

ここでは教育の中核にある学校教育に関して言及したものを掲載する。学校教育に対する教育社会学的な考察、教育実践、学習指導要領の社会学、新型コロナ禍の学校、最近の教育のデジタル（ICT）化をどのように考えるかなどである。

1 学校の社会的特質について（神田外語大学講義の記録）

先週は、4つのことをお話しました。第1に教育の社会学の方法やパラダイムに関する「機能主義」、「葛藤理論」、「解釈理論」、「批判理論」という4つの方法です。

第2に学校の特質について説明しました。一つは家庭と学校の機能の違い（家庭は子どもたちに「所属本位、個別主義、拡散性、感情性、取り換え不可能」という価値を教え、学校は「業績主義、普遍主義、限定性、感情的中立性、取り換え可能」という価値を教えているということ。

第3に学校の潜在的カリキュラムの社会的機能（たとえば、「学校で無意味な規則の黙って従う習性は社会に出たから施政者に都合のいい法律に従順に従う態度を養成する」、「退屈な授業に耐えることは社会の中の繰り返しの多い退屈な仕事に耐える態度を養う」）などについて説明しました。

第4に学校は、①カリキュラム（教科書）、②先生、③児童・生徒（友達）、④学習の場（教室）という4つの要素からなり、その重なりの部分に授業があり、そこが学校の中核だが、子どもたちは授業以外の要素からも多大な影響を受ける、ということを説明しました。

今日は、先週に配布したプリント（武内清「子どもの学校生活」『子ども・若者の文化と教育』）を使って、それ以外の学校の社会的特質について説明します。

具体的には、学校文化、教科内容、学校組織の特質、学級集団、一望監視システム、学校の階層的特質、教師-生徒関係、ホームスクーリング、教育家族、学校と子どもの今後などです。

これらの学校の社会的特質の考察から、学校とはそもそもどのようなところで、本当に必要なのところなのか、子どもは学校に行かなくてホームスクーリングで学ぶという選択肢があってもいいのではないかなどということも考え、グループでも話し合い、発表していただきたいと思います。（2016年5月7日）

2 授業から深い学びへ

教育的な見方の特徴は2つある。一つは教育の高い理想や目標を掲げ、それに達していない教育の現実を非難・叱咤すること。もう一つは学校の授業だけに注目し、子どもたちが学

校の授業以外で学んでいることを軽視すること。

教育現象を考察するとき、理想より現実から考えることが大事である。また授業だけでなく学校や教師や子どもを取り巻く社会的要因（潜在的カリキュラム等）に注目しないと現実的ではない。

このことは教育や子どもの現実をただ追認すればよいというわけではない。客観的現実がなくても主観的な思い込み（予言）によって現実が生み出される場合がある（予言の自己成就）。教育の理想や教育改革への熱意が教育の現実を作り出す。また教育は受け身でいるとその効果は小さく、主体的に関わることによって達成度が高まる。

その意味では、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の考え方は有効である。それは、抽象度が高い言葉だけに、かなりの自由度がある。文部科学省による細かい規定や解説はいらない。

溝上慎一は「深い学び」のエッセンスを「関連づけ」としている（『学習とパーソナリティー』東信堂）。外から教えられる知識や技術を学習者が、自分の持っている興味関心や認知と関連づけて受け取り（アウトサイド・イン）、自分の言葉で他者に伝え、行動に移していく（インサイド・アウト）というものである。

これは、汎用性のある知識を学ぶと、それが他のさまざまなことに応用が利くということである。その意味で、最初に学校の授業で基礎的で汎用性のある知識をきちんと学ぶことが大事である。巷には情報が溢れ、どの知識を選択すべきか迷う。人類の知識のエッセンスを、教員の工夫した授業から学び、それを各自のさまざまな学習や行動に結びつけていく。

学びの質も高めたい。それは外部の基準で計られる学力ではなく個々の学習者がどこまで学んでいるかを自覚できて、次の目標に向けて努力することを促す生成する知識である。（「内外教育」ひとこと、2019年4月2日号）

3 子どものスポーツでも対話的学び

新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」に関して、最近思ったことを記録にとどめたい。

「主体的」に関しては、社会学者はこれも後天的なものと思っているかもしれないが、教育学者は先天的なものと考えているように思う。同じ幼いきょうだいでも、好みや性格が違うのを見てみると、ひとり一人に個性がある（つまり主体的なのは）先天的な要素が強いように思う。それを教師も見極めて子ども個々に応じた指導をしなければならない（「個別最適化」をAIに任せることはできないであろう）。

「対話的」に関しては、教師との対話もあるが、主となるのは子ども同士の対話であろう。それは主体同士のぶつかり合いで喧嘩になることもあるかもしれないが、強いものに同調し、その場の空気を読むことよりは、異論（主体）をぶつけ合いことの大切さを指導したい。音楽でいえば、同じ音のユニゾンより、合唱のハーモニーや、違う楽器の音が奏でる音楽の

素晴らしさを伝えたい。「深い学び」は、異質なものの共存から生まれる結果と、それを各自が自分の中に取り込む自己変容（成長）をはかることであろう。

これが、個人の学習だけでなく、子どもたちのスポーツの世界でもあることが、2月20日の朝日新聞記事に掲載されていた。子どもたちのサッカーチームでも、大人が指示するのではなく、子どもたちに話し合い（対話）でいろいろなことを決めさせる。結果も付いてきて、子どもたちの主体性と自立心が育つという。（2021年2月22日）

4 アクティブ・ラーニングについて

今学校や教師は困っているという話を聞いた。新型コロナの児童・生徒への蔓延の話かと思ったら、そうでなくロシアによるウクライナ侵攻のことだという。ウクライナで多くの民間人、女性や子どもたちが空爆で傷つき殺される映像が、テレビやネットで流れ、それを日本の子ども達が目にして、「私達で何かできることはないの」と先生たちは尋ねられるという。

このような「政治的な問題」に対して、これまで学校や教師は教育する準備をしておかなかった。情報も遮断していたとも言える。今はネットの時代で、その情報は子ども達にも直に伝わる。また、知識としては教えてもそれはよそごとの知識であり、自分達に関わることとしては教えておかなかった。それが、今回のことは今後の日本にもかわりが大きい。

また今教育界ではアクティブ・ラーニングが推奨され、単なる知識ではなくそれをどう評価し、行動を起こしていくことが大切とされている。実際のロシアのウクライナへの侵攻と同時に、フェイクニュースが行きかう情報戦争の様相も呈しており、教師はそれらも含めて、子ども達にこの問題をどのように教え、子ども達にどのような行動を推奨するのか、教師の力量が問われている。（2022年3月21日）

5 アクティブ・ラーニング批判

今、アクティブ・ラーニングの重要性が言われ、その実践が模索されている。それ自体はいいことだと思うが、あまりの行き過ぎには注意しなくてはならないと思う。

1月16日のNHKの「探検バクモン」（爆笑問題他出演）が、「日比谷高校 生きる力の授業」という番組を放映して、数学の授業で生徒が問題を解きそれに他の生徒が意見を言い、教師はほとんど口を挟まないという授業や、3年生が受験勉強よりクラス全体で演劇に打ち込む様子が放映され、それが今のアクティブ・ラーニングの模範のように紹介されていたが、それは少し違うと感じた。

教師が教えなくては肝心なことがスルーされてしまうし、演劇をして試験や受験の点数が上がるわけではない。よほど優秀な生徒や家庭や予備校での学習のしっかりされている

生徒にとって、それでもいいかもしれないが、普通の生徒にとって、そのような生徒の興味本位の授業では、基礎学力が身につかず、受験もおぼつかないのではないか。

オーストラリアの教育学者が、今欧米や豪州で一般的な児童中心の inquiry learning の教育方法を批判し、中国での伝統的な教師主導の direct instruction の方法が、国際学力テストの点数も高く、優れている面を指摘している。生徒を誉め自尊心を高める教育や生徒一人一人に合った教育方法が有効だという考えも根拠のないことを指摘していて、興味深い。

児童中心の inquiry learning に問題があるというわけではないが、低学年では基礎をきちんと教え暗記させることも必要という意見には、納得させられる (2019年2月7日)。

6 知識や知性の動的側面

アクティブ・ラーニング、つまり「主体的・対話的で深い学び」の重要性が盛んに論じられている。これは、静的ではなく動的なことの重要性の強調のように思われる。動的というのは、個人内に留められるのではなく、他者との相互作用（対話等）や社会とかかわりで、外に影響を及ぼすというものである。

知識に関しても、単に個人の中に蓄積されればいいというものではなく、その知識が他者や社会と交わり、影響を及ぼすというものである。学会の大会などは、まさに個人の知識の表明に止まらず、その交換や共鳴で、そこで新たな知識が生まれ、参加者に共有される場である。学校や大学の授業もそのような知識の動的な創造、共有の場になるのが理想かもしれない。

内田樹の「反知性主義者たちの肖像」(内田ブログ 2020.9.3)も、そのような文脈の中で理解した(以下、一部転載。これは知識ではなく、知性について論じているが)

<私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。/ ある人の話を聴いているうちに、(中略)「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たち及ぼす力のことを知性と呼びたいと私は思う。/ 知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかどうかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量できない。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。/ 個人的な知的能力はずいぶん高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるというようなことは現実にはしばしば起こる。きわめて頻繁に起こっている。その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の

知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。これまでのところ、この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない。>
(<http://blog.tatsuru.com>) (2020年9月10日)

7 教科横断的な教育課程の編成について

私は哲学に関しては全く無知であるが、当たり前だと思っていたことを疑ってみることは楽しい。それは、山本雄二氏が次のようなことを書いていたことに通じる。つまり鬼の角が1本か2本かをめぐって激し論争があった場合、そのどちらに組するのではなく、その前にその二つの立場が共通に前提にしていること、すなわち「鬼は本当に存在するのか」ということを考える必要がある。

現在、教育界では「教科横断的な教育課程の編成」が盛んに議論されている。上智大学名誉教授の加藤幸次先生も『教科等横断的な教育課程の編成の考え方・進め方』（黎明書房、2019）という優れた本を出版され、議論を巻き起こしている。加藤先生から既存の教科の分類は、1つの分け方に過ぎないということも教えていただいた。

私たちが当たり前と思っている学校の教科—国語、算数、理科、社会、英語、保健・体育、芸術（音楽・美術・書道）、技術・家庭—は、いつの時代から、どのような根拠に基づいて分類され、学校現場に定着したのであろうか。それは、時代とともに変遷してきたのであろうか。また、諸外国も同じような教科分類を使っているのであろうか。（日本の場合、明治維新や戦後に、欧米の影響がかなりあったことが考えられる）

また学問の各分野の内容は、大学から高校以下に降ろされるのだと思うが、日本の教科の実際を見てみると、大学と高校・中学・小学校の間には大きな断絶がある。国語、算数（数学）、理科、社会（地理、歴史、政治、経済）、英語、体育、音楽、美術、家庭、技術、情報などは小中高の科目にあり、多くの場合大学の科目の中にも存在するが、哲学、人類学、民俗学、社会学、心理学、教育学などは、大学ではじめて設けられる科目であり、小中高と大学で断絶がある。なぜ、このようなことがおこるのか。諸外国はどうか。（2019年7月26日）

8 教育現場の優れた実践研究—東書教育賞 審査委員講評

審査委員の武内です。全体的な感想を述べさせていただきます。一番感じるますことは、応募のテーマや内容は、時代を反映したものが多いということです。

一般に学校の先生方は、学校の中にこもって、あまり時代の変化には敏感でないという傾向があると思いますが、応募される先生方は、意欲的な方が多く、何ごとにも熱心で、時代の流れや要請にも敏感になっているように思います。

今、学習指導要領の改訂で、授業や子どもの学習の仕方が大きく変化しようとしている時期です。その流れを敏感に感じとった実践が多かったと思います。特にアクティブ・ラーニング的なもの、すなわち「主体的、対話的で、深い学び」に関するものが多くみられました。この「主体的、対話的で、深い学び」というのは、抽象度の高い概念なので、具体的には幅広く解釈でき、実践でもいろいろ工夫のできると思います。それだけ、先生方の力量や実践の工夫がよく示せるキーワードのように思います。

小学校の部で言いますと最優秀の田山雅弘先生は「熊本地震復興数え歌」を児童に作らせるのに先哲の考え、児童同士、地域の人々の考えなどとの対話を多用し、発表会や新聞での公開という目標も設定し、人々に感動を与えるものを完成させています。

優秀賞の山本かよこ先生は、聴覚障害児が個性に応じて主体的に学習する様々な工夫を音楽（楽器演奏等）で行っています。また優秀賞の赤川峰大先生らは、卒業に関わる各活動の「思い」を各自考え、それを皆で共有することから「思い出、感謝とエール、決意」という3つの思いに集約し、主体的に卒業行事を行う実践を指導しています。

中学校の部では、最優秀の沼田芳行先生は朝の美術鑑賞というユニークな実践を行い、生徒が自由に表現し対話するということをされています。

優秀賞の木場和成先生は、社会科の授業で、既成の時代枠にこだわらず「新しい時代区分をつくろう」という課題を生徒に提示し、生徒が歴史的事象を多角的にとらえ対話しながら歴史を深く考える実践をされています。それらの「主体的、相互的で深い学び」の工夫、実践が高く評価されたのだと思います。

またこれらの実践には、今の時代に求められている教科横断的な視点やカリキュラム・マネジメントの視点も含まれています。

これからの時代の教育に大切と感じることを2つ、申し上げたいと思います。

今の時代、抽象的な教育論議より、具体的で実践的なことが大事だと思います。NHKの朝ドラが「モノづくり」（即席ラーメン作り）の万平さんを描いていますが、抽象的な理論やイデオロギーではなく、実際の子どもの教育や学習の実践やその成果が問われているように思います。もう一つは、今厚生労働省の統計調査が問題になっていますが、現実のデータをきちんとした方法で集め考察することの重要性です。最初に結論ありきのデータ蒐集ではなく、データに語る実践や研究が必要だと思います。

さらに、時代の要請にのるだけでなく、各教科の独自の論理の研究や実践が積み重ねられてきていると思います。そのようなものも大切にしたい実践も期待したいと思います。今回も、このような要件を備えた応募の投稿が選ばれていますので、これらが日本の教育実践のモデルになり、日本の教育のレベルが一層向上していくことを願っています。受賞された先生方、おめでとうございます。（2019年2月6日）

9 教育現場の先生の特別講義1 一三幣貞夫先生

敬愛大学で私の担当する「教育原論Ⅱ」の今学期最後の授業（1月22日）は、講師の方を招いての特別講義で締めくくることができた（経済学部中山教授の「道德教育研究」と合同）。

講師は南房総市教育長の三幣貞夫先生。テーマは「教師をめざす学生へー私の教師像」。講師の三幣先生は、A4で5枚のレジメを用意され、それに沿って格調が高く内容のある話を1時間半に渡ってされた。

「教師には創造する喜びがあるーセンスとアイデア、そしてデリカシー」「教師の魅力ー子どもと喜怒哀楽をともにすることができる、子どもとともに成長できる」「教育は生き方を教えることができる」「尊敬されることはすべての始まり」「こわい、すごい、すてき、ありがたい存在に」「教師の最もいい姿は、新鮮だということ、謙虚だということ」「思いの強さに分だけ成長させられるー願いとねらいをもった指導」

以上のような含蓄のあるフレーズが、レジメに満載されていて、それを事例をまじえて、具体的に説明された。学生達も、三幣先生の長年の教育現場の実践委裏打ちされた話に聞き惚れ、教職への思いを熱くしていた。（以下、学生の感想の一部転載）。

「人生経験を踏まえた話がとても素晴らしかったです」「レジメに書いてあること全てが身に沁みます。ますます教師になりたいと思いました」「教師という職業に挑戦したいという思いが強くなった」「貴重なお話をさせていただいて勉強になりました」「一番感銘を受けたのは、教師の道は'楽苦しい'という言葉です」「忍耐力と地道な努力が必要だと感じた」「教師は児童を育てるだけでなく、児童と一緒に成長するものだと聞いた時は少し安心した」「叱るときは叱るなど、自分にできるか不安になったが、子どもの為に、頑張りたいと思います」「子ども達に尊敬されなければ始まらない、その言葉を胸に自分も頑張ろうと思います」「すべてが自分自身に足りないものだと痛感した。きっと家に帰り、一人で悩むでしょう」「厳しい言葉の中にも優しさがあり、自分の甘さを思い知った」「文章を読むことがとても重要なんだということを理解した」「ひとつひとつの言葉がすごく重く心に響きました。今回のお話はこれから生きていく上で大変糧になるものだと感じました」「素直さと忍耐力をもって大学生活を送りたいと思う」

学校の管理職（校長等）を経験した人の、スケールの大きさを感じた。いろいろな修羅場もくぐって来られたのであろう。人間的な幅が広く、深いと感じた。教師としてまた人間として、子どもへの並々ならぬ愛情とその子達を育てる為の厳しさを、実践の中で鍛えてきていることが感じられた。我々「知識オタク」の大学教師とは一味違うものを感じた。学生達が魅きつけられるのも頷ける。（2014年1月23日）

1 0 教育現場の先生の特別講義 2 小原孝久先生

知り合いの小原孝久先生（元都立高校教諭、上智大学非常講師）に、敬愛大学の私の担当の「教育原論Ⅱ」で、1 時間授業をしてもらった（12 月 11 日）。小原先生の名授業に、いつもの私の時と大違いで、学生達は、熱心に耳を傾け、その授業内容に心打たれていた。

以下、学生のリアクション

「いつもと違う雰囲気の授業がとても新鮮に感じることができました。さらに、自分が将来なりたい先生についてのことを深く考えることができました。」「小原先生の授業は、自分の体験談を話の芯にし、わかりやすく、これからの私に大事になるお話をしてくださいました。一番印象に残ったのは「ハート&スキル」のお話です。なぜ学ぶのか、これからは見定めて3年間頑張りたいと思います」「90分のとても濃い時間を過ごすことができた。最後のDVDを見て、教師になることへの不安な気持ちが晴れた気がした。自分のやりたいように大学生活を過ごした、夢につなげていきたい。今、やりたくても勇気ができなくてできないことに勇気をふりしぼって一歩ふみだしてみよう」「私はこの授業を通して、感じたことはたくさんあります。だけどこの中に書ききれないので、1つだけ言います。小原孝久先生のような先生になりたい」

小原先生からは、授業後、次のようなコメントをいただいている。

「コメントを読んだ限り、ほとんどの学生さんが、かなり熱心に授業を受けていたことが伝わってきました。また大事な内容をきちんとつかみ、またそれを的確に表現できる学生さんもかなり見受けられました。全体的に見ると、自分自身に引きつけて具体的に授業からの学びを書いていた学生さんが多かったことに注目しました。授業を熱心に聞いていただき、うれしかったです。」

大変な準備をし、学生に感銘を与えた授業を展開してくださった小原先生に、心より感謝したい。小原先生の長年の教師経験、学識、人柄からにじみ出る影響も大きいものがあると感じた。（2013 年 12 月 25 日）

1 1 教育改革と教員の意識

文化的遅滞（カルチュラル・ラグ）という言葉がある。社会の各分野によって変化する度合いが違うというものである。教育という分野は、とかく社会の進歩には遅れがちで、教育制度も教員の意識も旧態依然としていると言われる。産業界や文部科学省から提案される時代の趨勢に合わせた教育改革もそれを実践する教育現場で滞り、骨抜きにされることは多い。

学校の教員がさまざまな教育改革には懐疑的なことが各種の調査データから明らかになっている。『教育改革に関する教員に意識調査』（中央教育研究所、平成 27 年）のデータで小中教員の意識をみると、教育改革への賛成率は「デジタル教科書の導入」5 割弱、「学

制（6・3・3制）の改革」2割、「公立中高一貫校の設置」1.5割、「学校選択の自由化」1割とどれも高くない。高校の「教育課程の改訂」に「非常に関心のある」高校教師は3分の1、「教科横断的な視点に立つ学習活動」には4分の1、英語入試の外部試験には1割強の賛成率である。教員は制度的な大きな変化に対しては反対することが多く、学習指導要領の改訂への関心もあまり高くない。その為、多くの教育改革は教育現場で頓挫する。

ただ、教育改革への温度差は、教員の属性によってもかなりある。管理職の教員は、中教審答申や学習指導要領の改訂や関心をもち、それを現場におろす役割を担おうとしている。非管理職や女性教員は、改革への関心は低い（『高校教員の教育観とこれからの高校教育』中央教育研究所、平成30年）。

現代の社会は合理化、標準化、分業化、効率化つまり官僚制化がすすんでいる。その波は教育界にも押し寄せている。少子化に伴う学校統廃合や小中一貫教育、チームとしての学校、校長の権限の強化などはその現れである。

一般の教員は、深海魚のように海の底に鎮座して、改革の波をやり過ごす時代遅れの堅物が多いと考えるべきなのであろうか。現実の教員や調査データからは、そのようには思えない。小中の教員はこれまでの教育実践の知識や技法を大事にしている。高校教師は担当教科への専門意識が強く、長年教えてきた自分の教科内容や教育方法への自負をもっている。教師たちは、教育現場に疎い人たちが机上で考えた教育改革案が、学校の現状や子どもたちの現実に対応できないと感じている。

教育が時代の流れと無縁でいいわけではない。子どもたちの出ていく社会は情報化、グローバル化がすすんでいる。教育の論理を大切にしつつ、時代に遅れない教育のあり方を教育現場でも模索していかなくてはならない（「内外教育」2019年7月2日号）。

1 2 学習指導要領の社会学

教育の世界で、学習指導要領はどのような位置にあり、どのような働きを果たしているのだろうか。

学習指導要領の解説のような文章や本はよく見かけるが、その社会的政治的背景や機能などに言及した「学習指導要領の社会学」という研究があるのであろうか。

ネットでみると、学習指導要領への辞典的な説明は下記のようにになっている・。

<学校教育法施行規則に基づき、学校の教育課程の基準として定められているもの。文部科学省告示として官報によって公示される。文部科学省に設けられている教育課程審議会の答申を受けて、小学校、中学校、高等学校別に作成されている。教育課程の全般的な事項（総則）のほか、各教科別に教科の内容と指導方法の要点を示し、また教科以外の道徳や特別活動についても定めている。小学校、中学校、高等学校の教科書は学習指導要領に準拠して編集される。第2次世界大戦後の教育改革にあたり、アメリカのコース・オブ・スタディを模範として新学制実施とともに1947年作成されて以来、ほぼ10年に1度の割合で見直

しおよび改訂が行われている。> (<https://kotobank.jp/word/学習指導要領>>

教育委員会や教育現場は、学習指導要領の内容が絶対的なもので、それをいかに教育実践の中に表していくのかに一番の関心があるように思う。

教育研究者の中にも、学習指導要領の正しさを疑うことなく、その解説や実践への移行を橋渡しするのが役割と考えている人もいなわけではない。

ただ一般の教育学の研究者からすると、学習指導要領は、教育についての1つの見解に過ぎないと思っている場合が多い。大学の某同僚もその作成に関与しているらしいが、そんな時間があれば、自分の研究をすべきではないのか、政府関係の審議会の委員もそうだが、研究とは無縁のことに多くの時間を潰すのは、研究者としてどうかと思うーそう思っている研究者は多いのではないか。

それはともかく、学習指導要領は、教科書の内容を規定し、実際に教育現場に大きな影響を及ぼしているもので、それを無視せず、批判的、社会学的な考察は必要であると思う。知りたいことを、思いつくままに列挙する。

1 毎回の学習指導要領の作成にあたり、誰が実質的な決定者なのであろうか。またその決定の背後には文部科学省の意向や利益団体が存在するのであろうか。ただ、文部科学省の意見も一枚岩ではないであろう。

2 総論と各論の間に齟齬はないのであろうか。その時の学習指導要領の内容を支える教育の理念や目標掲げた総論と、各教科の目標や内容を掲げたものとの間には齟齬はないのであろうか。きっと総論を書く人と各論を書く人は別の人であらう。つまり総論とは別に、各教科の部分を別のグループ(専門家)が決定し文章を書くかということであり、教科のより事情は違うのではないか。(たとえば、英語科は独自の論理で動いており、総論に影響されないということを聞いたこともある)

3 学習指導要領の内容が決定しても、それを下に伝える役割を果たす文部科学省の役人(局長、課長、課長補佐、係長など)や専門官(視学官、教育調査官)が、それをどのように理解し、それを下にどのように伝えるかで、かなり違ってくる。

4 各都道府県の教育委員会、市町村の教育委員会、そこの指導主事が、それをどのように理解し、校長や現場(学校)にどのように伝達、指導するかでも違ってくる。

5 さらに、教育現場では、校長、教頭、各種主任、一般教員で、その受けとめ方が違う。教育現場では、表面的には受け入れながら、実際は骨抜きにすることも多いのではないか。入試のあり方も現場の実際の授業を規定するので、その影響力も見なければならない。それは小中より高校の方が多様な気がする。高校は大学受験もあるし、高校の先生は専門への自負が強い。その実際を検証する必要がある。そこにどのような教育現場の生き残り戦略(サバイバル・ストラテジー)が働いているのであろうか。これは、教育政策の社会学という分野だと思うが研究が待たれる。(中央教育研究所研究報告 NO92)(2018年2月10日)

1 3 高校間格差

戦後、高校進学率が上昇する中で、学力（偏差値）による輪切り選抜が進み、高校間に格差ができ、入学してくる生徒の特質や教師の教育指導にも学校間で大きな違いが生じた。進学校の教師は適応的で意欲的な生徒に対して、授業中心の指導や生徒の自主性を重んじる指導を行っていたのに対して、非進学校の教師は、反抗的で勉強に興味を示さない多くの生徒に対して厳しい生徒指導で臨んでいた。

ただ、その後の高校の受験競争の緩和、多様化政策、推薦・AO入学の導入、少子化の進行等々によって、高校現場は様変わりしている。高校教育の様々な側面でみられた学校間格差は、現在も存在するのであろうか。

中央教育研究所は昨年 10 月—11 月に全国の高校教師を対象にアンケート調査を実施した（全国普通科 3 5 0 校の教師に調査を依頼。回答数 7 6 4 人、回収率 31・2 %）。そのデータから考察してみよう。

高校間格差の指標として、大学進学率と難関大学への進学率の割合をもとに、非進学校Ⅰ、同Ⅱ、準進学校、進学校、超進学校の 5 群に分けた。

教員の属性でみると、男性、中堅が進学校に多く、女性、若手が非進学校に多い。

生徒の特性でみると、超進学校には「熱心に授業を受ける生徒」「授業の予習・復習をする生徒」「受験勉強に打ち込む生徒」が多く、非進学校にはそれらは少なくなっている。部活動や学校行事に熱心に参加する生徒も進学校、超進学校に多い。「(大学への) 推薦入学をめざす生徒」は準進学校に多い（図、7 割以上いる割合）。

「海外への進路に興味を持つ生徒」「理工系の進路を選ぶ女子」は超進学校に多く、「経済的な理由で希望の進路に進めない生徒」「進路を決められない生徒」は非進学校に多い（8 割以上）。

校則を守らない生徒は非進学校で若干多い傾向にあるが、非進学校でも 7 割の生徒は校則を守っている。かつてのように学校や教師に反抗する生徒は、今や少数派。反抗よりも消極性や無気力な生徒の気質が問題となっている。

どの群の高校でも、教師は皆熱心に指導を行っている。「生徒の質問や相談に親身に答えている」（9 割強）、「授業のやり方をいろいろ工夫している」（9 割弱）、「授業では指導案や講義ノートを作っている」（6 割）など、丁寧な授業準備やその実践に関して、学校間の格差はほとんどない。「生徒指導に力を入れている」は非進学校で 8 割弱と多少多いが、超進学校（7 割弱）と大きな差ではない。

教師たちが授業で「とても大事」だと思っていることを聞いてみた。進学校では「大学受験に対応した授業」が 9 割強を占めるのに対し、非進学校では「職業に結びついた知識や技能が得られる授業」が 8 割強という違いがあった。

「基礎的な力の付く授業」や「生徒が興味や関心が持てる授業」「アクティブ・ラーニング」に関しては顕著な差はなく、どこの学校の教師も大事と思っている。

教師たちは、それぞれの学校の生徒の特質（生徒文化）に合わせた教育指導を工夫してい

る。それは教師の生き残り戦略でもある。

現在、文部科学省主導の高校改革が進行中で、科目の編成や大学入試も変わろうとしている。一連の改革の動向や新学習指導要領の動向に関心を持っているのは、超進学校の教師たちである。一方、それ以外の高校の教師は、現在の改革が実際の学校や生徒の実情に合っていないことに戸惑いを感じている。

そうした戸惑いは、調査に寄せられた教員の生々しい声からもうかがうことができる。

「生徒の実態を見て欲しい。目的意識も持たず、ただ皆が行くからという理由で入学し、入学後も努力することなく、ダメなら退学すればいいやと割り切っている生徒がいかに多いことか。バイトに明け暮れ授業中は寝ている」「現場では様々な新たな取り組みが行われていて、多忙感が著しい」「問題はとにかくマンパワーやお金が足りないこと」「英語の外部検定試験の機会やデジタル機器の所持などは、経済的な問題を抱える家庭では十分に対応できずさらなる格差を生むのではないか」「役立つか否かばかりにとらわれず、幅広く人を育てる教育に戻すべき」「新しいことをどんどん取り入れることも大切だが、昔からある教育の原点のようなものを忘れてはならない」。

高校間の格差は依然存在する。これからの高校はどこへ向かうのだろうか。

上位の進学校が学校の実績や伝統を重んじ、生徒の資質や実力をさらに伸ばす教育努力をすることは当然であろう。国際競争力を伸ばすためにも卓越した教育は必要だからだ。

一方で、今日の高校は受験競争の緩和に伴い、学力をもとにした学校間格差の意味が薄れ、高校選択の基準が多様になっている。

資格が取れ就職に有利な学校、地元に残り仕事のできる学校を選ぶ生徒も多くなっている。総合的な知をはぐくみ地域づくりに貢献する試みも報告されている。「高校の魅力化プロジェクト」で人口が流出する地方の疲弊を救おうとする試みもある。外国籍や特別支援の子ども達も多く入学する学校も増えている。

高校教師たちは格差を越えて、それぞれの地域の学校の伝統や生徒の特質に応じた教育指導、進路指導をきめ細く行うことが求められている。（「日経新聞」2018年10月1日）

1 4 高校教師の特質

現在、高校教師のことを調べている。敬愛大学の客員教授で、これまで小中高の校長を務めたことがある S 先生に高校教師の特徴について話をうかがった。その時間聞いたことをメモする。

1 小学校の教師は全教科教えるが、中学高校の教師はそれぞれ専門の教科がある。中学高校の教師は、教科担当の意識が強い。

2 小学校教師は、1つのクラスで、1回限りの授業をすることが多いが、中高の教師は同じ授業を数回繰り返す。その為、小学校教師は、その単元が学習指導要領や教師の指導書にどう書かれているかを参照することが多いが、中高の教師は、最初その個所を教える時、そ

れらを参照するにしても、その後は何回も教える中で自分流のやり方を確立し、それらを参照することはなくなる。

3 中高の教師は専門の教科意識があるとはいえ、その程度は中高で違っている。中学の教師は浅く広く教えるので専門教科意識はそれほど高くない。高校の教師の専門教科意識はかなり高い。それに社会科や理科では、その中が専門の領域で分かれている（世界史、日本史、政経、物理、化学、生物。地学など）

4 中学校に入ってくる生徒は能力も特性もさまざまであるのに対して、高校は入試があり、学力で輪切りされて、それぞれの学校には、能力も特性も同じような生徒が入学している。進学校と非進学校、普通科と専門学科で、生徒の特質は違い、それに対応して先生達の意識や行動の違いが、学校グループ（類型）ごとに違っている。

5 高校グループ（類型）間の違いは、現在も明確にあるが（進学校は受験や勉強中心等）、昔に比べれば、その差は小さくなっている。かつては非進学校で、校内暴力や荒れがあったが、今は生徒は皆おとなしくなっている。

6 管理職が部活動の顧問等になることはほとんどない。部活動で実績を上げることは、その個人の名声を高めることになるかもしれないが、それで管理職への道が開けるわけではない。部活動の指導で名声の高まった人には、私立から誘いが来る。

7 学習指導要領を読む（参照する）のは、教科書の採択時と、年度初めの年間授業計画を書く時だけである。それも改訂があった時に参照するだけである。それも自分の専門の教科のところだけで、総則は読まない。

8 教師たちは、学習指導要領より教師用の教科書の指導書の方をよく読む。教師用の指導書には、学習指導要領の該当する箇所に関してもわかりやすく書かれている。指導書には教科書をどのように使えばいいかが丁寧に書かれていて、指導書を読めば、わざわざ学習指導要領を参照する必要がない。

9 それに高校の教師はそれぞれの教科の専門家であり、教育現場で長年教えてきている。その教育現場の実情をよく知らない文部科学省の役人や大学の教師の作った学習指導要領は、一般論として正しいことが書かれているのかもしれないが、具体的に教育現場で通用するわけではない。教育現場では自分の専門的知識の方が勝っていると、教師たちは自負を持っている。（2018年8月30日）

15 新型コロナ危機の後の教育

重い病気になった時や死を意識した時、自分にとって何が重要なことなのかに、思いを巡らすことであろう。そのような時こそ、本当に大切なものに気付く。しかし、病気が治り、危機的状況の時に考えたことは忘れ、もとのような功利を求める生活に戻ってしまう。いま新型コロナウイルスの世界的な蔓延で、私たちの日常生活は一変し、重い病気にかかったような状態にある。そのような時こそ、何が大切なのか何が重要なのかを考えたい。

新型コロナウイルスの感染の拡大は、社会の諸分野に影響を及ぼしている。教育の世界への影響も大きい。とりわけ、長期にわたり学校が休校になったことは、学校中心の生活を送っていた子ども達の生活を一変させた。その影響は計りしれない。休校になり、授業、遊び時間、部活動、交友もなくなり、子ども達の学びや楽しみが奪われている。そして学びの社会的格差、家庭間格差が拡大している。これまで学校が担ってきた教育機能の重要性や平等性が改めて認識される。コロナ後は、この間に滞った教育機能の回復・補修がまず早急になさなければならない。

一方で、自明であった学校教育の意義も問われている。効率優先の一斉授業、興味のわからない教科の学習、生きる力にならない知識、退屈な学校行事、無意味な校則、教師のストレス解消のお説教など、なくなってみるとスッキリする。これまでの学校教育のあり方の見直しも必要であろう。

休校中の家庭での自由な学習、親子関係の親密化、ウェブ学習、地域の遊び集団など、これまでの学校教育とは違った自由な学習や生活に、子どもたちは本来の興味と活動に目覚めたということもあるだろう。不登校やホームスクーリングも見直されている。

黒板とチョークを使っての学校での授業に替わり、家庭での遠隔学習を経験した子どもも多い。デジタル・ネイティブの今の子どもにとって、ウェブ学習で、学ぶことの楽しさは増している。コロナ危機後の教育では、ウェブによる教育が学校でも家庭でも盛んになることは必然である。しかし、教育のデジタル化には多くの課題がある。子どもの集中力や深い学びには、ウェブ学習より伝統的な教育（紙とチョーク）が適合的という報告もある（教育のデジタル化のすすんだ県が全国学力テストの得点は高いわけではない等）。

コロナ危機は、経済や政治の分野でも大きな変化をもたらし、教育にも跳ね返ってくる。経済的な不況による教育費の削減、危機管理を名目にした超管理社会への移行など。危機後は教育力の維持、教育的格差の是正、民主主義の維持などがなされなければならない。

（内外教育 2020年5月12日号）

16 「個別最適化」について

アマゾンで本を買うと、「その本を買っている人がこの本も買っています。それがお薦めです」という内容のメッセージが届く。ネットフリックスでドラマや映画を観ると、「そのドラマや映画を観た人はこれも観ています。それがお薦めです」という趣旨のメッセージが表示される。このようにAIが、次に読むべき本やドラマや映画を教えてくれる。

今教育界では「個別最適化」とキーワードが話題になっているという。それぞれの子どもが次に学ぶべきことは、上のような原理でICT(AI)が判断してくれるという。子ども一人一人がタブレット持ち、その子どもに最適の内容を次々とコンピューターが提供してくれ、それに従い学ばばいいらしい。教師は必要なくなるのではないか。

果たしてそのような時代が来るのであろうか。アマゾンやネットフリックスのお薦めは、多

少の参考になるが、それに従うのはせいぜい1割程度のような気がする。デジタル(AI)による教育も、せいぜい多くても2~3割止まりではないかと思う。

上智大学の奈須正裕教授は、次のように述べている(朝日新聞10月6日朝刊から一部転載)

<ICT(情報通信技術)を活用した教育の広がりにもない、近年、「個別最適化」という言葉が、あちこちで聞かれるようになっていきます。コロナ禍の長期休校で、オンライン教育なら個々にあった教育ができるとも言われます。(中略)子どもが、文房具のようにタブレット端末などを使って学ぶことが不可欠な時代です。ただ、ICTで「個別最適化」を進めることには、危うさもはらみます。(中略)個別最適化に注目した時に、特にこれから活用されるのは「AI(人工知能)ドリル」のようなAIを使った学びでしょう。一人ひとりの解答をAIが分析し、次に取り組むべき問題を自動で出題してくれます。(中略)情報を選択するプログラムがどうなっているかは、使う子どもや親、教師には見えない。これって不安じゃないですか。課題は「情報の推奨」です。個別最適化の「最適」を誰が認定するのか。できるだけ情報をフラットに提供し、何がどう「最適」かは、教師や子どもが選択する仕組みにするべきではないでしょうか。(中略)ICTは、もっと探究など学びのツールとして、使うことを考えてほしい。> (2020年10月8日)

17 「学校パソコン、もう返したい」

アクティブ・ラーニングの「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」に関して、溝上慎一氏は、「関連づけ」が大切と述べている。(これは歳のせいかもしれないが)あることを読んだり聞いたりした時、昔読んだり聞いたりしたことを思い出し、「関連づけ」てしまう。

一昨日(2月15日)朝刊の日経新聞に、文部科学省が昨年小中の児童生徒にパソコンやタブレットの端末を一人一台配布し、遅れている日本の教育のデジタル化を推進しようとしているのに対して、それが現場ではあまり進まないことが書かれていた。その記事の見出しが、「学校パソコン、もう返したい」であるのに大変驚いた。

政府や文部科学省の上からのお達しに対して、教育現場は正面切って否とは言えず、できることはせいぜいそれをスルーして骨抜きにすることある。それが、「学校パソコン、もう返したい」と、政府のデジタル教育推進の流れに、否と教育現場の教師が言えるということに驚いた(取材に答えただけで、公に言ったわけではない)。

そこから関連づけて連想されるのは、明治の時代、近代学校ができた時、労働力として大切な子どもを学校にとられて家の農業が成り立たなくなると、各地が学校打ち壊し運動(「学校一揆」や「学校焼き討ち」)が起きたことである。また、その他、上からの(教育)政策に関して、激しい反対運動が、学生運動を含め起きたことが思い出される。

教育のデジタル化は、近代の学校教育が保持してきたさまざまなシステム(教科書の検定制度もその1つ)を破壊する側面がある。それに対する抵抗が「学校パソコン、もう返したい」という言葉に象徴されているように思う。(2022年2月17日)

18 一定のへだたりのある関係

宇佐見りん『推し、燃ゆ』（河出書房新社、2020）の中に、印象的な一節がある。「あたしは推しの存在を愛でること自体が幸せなわけで、お互いがお互いを思う関係性を推しと結びたいわけではない。一定のへだたりのある場所で誰かの存在を感じ続けられることが、安らぎを与えてくれる」

今の時代、このような一定の距離のある関係はアイドルへの推しだけでなく日常的な行動や教育の場面においても大切になっている。

新型コロナの蔓延で一時学校が休校になり、学校での対面での接触や協働学習、部活動が制限されるようになってきている。人間同士の交流こそ教育の基本と考える立場からは、由々しき事態である。しかし人間同士の直の交流が必須とする考えは見直されてもいい。

対面での授業や集団行動が、児童生徒や教師にとっても一番好ましいこととは必ずしもいえない。対面行動はそのことに多大なエネルギーを使う。教室での教師の発言は、他の子どもへの叱責や無駄話など、教科内容と関係のないことで費やされる時間も多し。発達段階から考えると小学校においては生の直の人間関係が大事であるが、中学高校さらに大学においては気を遣う対面での場面は少なくして、遠隔教育が導入されてもよい。対面より遠隔教育の方が適している児童生徒はいるし、遠隔教育の方が実質的な学習時間は長く、それに適した学びや教科もある。

小中学生一人一台配布された情報端末を有効に生かす教育のあり方が工夫されてもいい。情報端末を利用して、家庭と連携した学習も可能である。学級の人間関係の軋轢が生じるいじめや不登校も、遠隔教育で少なくなるであろう。遠隔授業を体験した大学生は「時間場所を問わずに学べる、自分で調べ考える主体的な学習」をメリットとしてあげている。

藤原新也は、アメリカのフリーウェイでの見も知らない者同士の軽くうなずき合いが、親密な関係以上に、「お互いの命を思いやるようなちょっとした感情の機微が垣間見え、軽やかな後腐れのない感情を裸のまま交わし合うとことのできる現象を生む」と指摘している（『アメリカ』情報センター出版部、1990）。多田道太郎は「恋愛についていえば、それはオリジナルの向こうに、オリジナルを超えて自分だけの夢をみることである」と述べている（『管理社会の影』日本ブリタニカ、1979）。

このように、新型コロナの蔓延が日常化した現在、対象と一定の距離をとり、対人関係に煩わされず、自分の思いや夢を大切にすることや、主体的な学習や行動をすることが大事になっている。（「内外教育」ひとこと、2022年8月23日号）

18 ホームスクーリングについて

20年以上前になるが、WISCONSINのMadisonに1年間滞在した時、ホームスクーリング(HS)という言葉は初めて聞き、子どもを学校に行かせず親が子どもを家庭で教育する方法が、アメリカの各州で認められていることにとっても驚いた。

知り合いのHSの子どもの様子も見学した。それでホームスクーリングについて調べ、(日本の)学会でも発表し活字にもした。(上智大学教育学論集30号,1995,pp65-109)

それから、ホームスクーリングはどのようになったのか、きちんと調べることをしていないが、4月16日の朝日新聞朝刊に最近の様子が紹介されていた(『親が「先生」,米で増加のホームスクーリング、実態は』)それを読むと、20年前とあまり状況は変わっていないようにも思えた。ただ、少し新しいと思われるのは、下記の点である。

- 1 州によっては、学校関係者の家庭訪問を義務づけたりする場合もある。
- 2 (ある)子供たちは、近くの「コンパス・ホームスクール」に通う。地域に住む現役教師や研究者らが週2回、5～18歳のHSの子供に様々な教科を教える。
- 3 米家庭教育研究所によると、2017年時点でHSの子供は約200万人で、なお増加傾向にある。当初は白人が大半だったが、今は3分の1が黒人やヒスパニック系。ゲイサー教授は「以前はイデオロギー的な理由が主だったが、今は教育内容で選ばれている」という。大学など複数の調査で、「子供によりよい教育を受けさせたい」という家庭が半分以上を占める。
- 4 親に教育経験がなくても、ネット経由で良質な教育を受けられるようになった。新たな需要に対応しようとオンライン教育の種類も増えている。
- 5 HSが虐待の温床になっているとも言われる。「責任ある自宅教育連合」によると、0～12年、HSの家庭で虐待やネグレクトによって子供が死亡したのは84件。一般家庭よりもその死亡率は高いという。6(日本)では、「以前はメディアでHSについて話すと、ネットを中心に『教育放棄だ』と激しい批判を浴びた。最近はそれが減り、少しずつ受け入れられている感触がある」

上記は新聞記事で、研究論文ではないので、どの程度正確な内容かわからない。アメリカの研究論文や教育雑誌を見て、現状を知る必要がある。

日本では、今は学校の抑圧より家庭の児童虐待の方が問題になっているので、あまりホームスクーリング(HS)への関心は高まらないのであろう。(2019年4月18日)

IV 社会学 社会心理学

1 社会学の当たり前を疑う

社会学は当たり前を疑う学問だと思うが、その社会学自身の当たり前を疑うことをあまりしないのではないか。「社会の創造主は人間」という前提が社会学にはあることあまり自覚しない。大澤真幸のコラム記事を読んでそのように感じた。ルーマンは社会学のその当たり前を疑い、別の見方を提示したという。

＜私の考えでは、ルーマンが試みたことは、理論の前提から「神」を完全に排除したとき、社会はどう記述できるかの探究である。……という、社会科学はみな神など前提にしている、と反論されるだろう。/ しかし、どの社会理論も「人間が社会をつくる」と考える。このとき人間は、あたかも創造主のように社会の外に立ち、社会を操作できるかのように、思い描かれる。そう、「人間」という概念のうちに、ひそかに神の役割が転移されているのだ。/ というわけで、ルーマンは、徹底した反人間主義の立場をとる。彼は、理論から人間概念を追放した。社会システムの要素は人間ではない。では何か。コミュニケーションである。/ 社会システムは、コミュニケーションだけで成り立っている。＞（「古典百名山＋plus:116 ニクラス・ルーマン『社会システム理論の視座』（朝日新聞、1月15日朝刊）より一部転載」（2021年1月17日）

2 考現学について

私がこれまで唯一古本屋に買い取ってもらった本は、『今和次郎集』全9巻（ドメス出版、1955年）である。あまりに嵩張り、本箱に置けなくなったせいである。今は少し後悔している。

今和次郎は考現学の創始者で、そして彼一代限りで終わってしまった。考現学は考古学との対比で考えられた名称で、現在あるものを観察で明らかにしようとするものである。対象はモノでも人間でも何でもよい。ただ、方法は観察に徹し、アンケートを取ったり、インタビューしたり、試葉を使ったりしない。今和次郎は東京美術学校図案科卒で、観察したものをデッサンに残しているが、その由来（原因—結果）などは探求しようとはしない。考現学はその後、「生活学会」や「現代風俗研究会」や「路上観察学会」や「ファッションの定点観測」など受け継がれている。

私が旅先でいろいろ人々の暮らしぶりを観察するのは考現学の影響と思っている。大学の研究室の考現学的調査（観察に徹し、研究室のものの配置などの記録を作り考察する）をすると、大学教員の生態がみえてきて面白いかもしれない。（2013年4月28日）。

3 アバウトな方法について

放送大学で、物理専門の先生（岡野・文京センター長）から、次のような考えを聞いて、大変感心した。

＜最初はいろいろ雑多なものを集める。それを篩(ふるい)にかける。すると自然にいいものが下に落ちる。篩の精度を高めたりしながら、それを繰り返す。＞

このやり方は、かなりアバウトで、篩さえ作れば、あとは自然の理（ここでは引力）に任せておけば、自然にいいものが残る、つまり選別できるというもので、エネルギーもあまり使わず、自然の理にかなって、優れものだと思った。

今の社会は、先に目標を定め、その目標を達成するためにどのような手段を取るかを決め、さらにその具体的なスケジュールを設定し、その通りに行うのをよしとする目的合理的な風潮があるように思う。

大学の授業も、最初にシラバスをきちんと提示するよう文部科学省からのお達しがある。つまり＜授業の目的＞＜到達目標＞＜学習の内容＞＜授業計画＞（毎回の授業の内容）、＜準備学習＞＜成績評価の方法＞＜教科書＞＜参考文献＞などを、シラバスにきちんと書くように定められ、その実行を迫られている。

最初に目標を定め、達成手段を決め、そのスケジュールに従い、懸命に努力することをよしとする。—これではあまりに人工的で、自然の理に反しているのではないかと、という気持ちが出てきた。

大学の授業は、そのようなものもあってもよいが、すべてそのようなものではなく、もっとアバウトで、自然なものもあってもいいのではないか。それらは篩にかかり、いいものが残るはずである。(2012年4月13日)

4 師匠としての作田啓一

直接教を受けた先生（恩師）ではないが、その著作を読み感銘を受け、師と崇める人がいる。私にとって、社会学者の作田啓一はそのような人のひとりである。

氏の著作『価値の社会学』（岩波書店、1972年）を何度読んだことであろう。1冊目はボロボロになり、2冊目、3冊目も購入した。ゼミのテキストでも使ったことがある。

私のようなものでも影響を受けたのだから、作田啓一が、日本の社会学や教育社会学研究に与えた影響は、とても大きかったのではないかと思う。

作田啓一は、永く京都大学の教養学部の社会学の教授だったので、関西では直接教を受けた人が多かったと思うが（京大出身の井上俊、柴野昌山、竹内洋など）、関東にいる私は本でしか知らず、いつか京都に行った時、作田啓一らしき人を京大近くでバスからみて感激した。上智大学での社会学会の大会が開催された際は、部会の発表は聞かず、司会の作田啓一ばかりを見ていた覚えがある。

作田啓一は、社会学の理論家として卓越していただけてだけでなく、文学にも造詣が深く（漱石やドフトエフスキーに関する本も書いている）、その文章は緻密で味わいが深い。

私は院生の頃、朝一番で氏の文章を読む習慣があった。すると頭がすっきりとし、その日の勉強がすすむ。このような文章が書けないものかといつも思っていた。仏文学者の多田道太郎との親交も厚く、多くの文学や文化的な共同研究があり、学問とはこのように楽しいものかということをお教えされた。

「師と仰ぐ」ということは、遠くから尊敬をして憧れているということである。畏れ多くて、その人と話そうと思ったことはない。その作田啓一が、亡くなったという記事を今日の新聞で読んだ。ご冥福を心よりお祈りする。(2016年3月18日)

(追記) 上記のブログの文章がみて、お便りを下さった方がいる。高名な社会学者の井上俊先生(大阪大学名誉教授)である。井上俊先生は、京大時代の作田啓一教授に学び、同教授と共著でも多くの本を書かれている。単独の著作も多数ある。若い頃書かれた『死にがいの喪失』(筑摩書房)も印象に残っている。井上俊先生の講演を、私は日本教育社会学会や日本社会学会の大会で聞かせていただいたことがあるが、面識はない。その高名な先生が、私のブログを読んで、わざわざお手紙を下さり、作田啓一に関する思い出の文章(「日本社会学会ニュース No 218, 2018.8.31」)を送ってくださった。その内容は、作田啓一の映画好きや、私の知らなかった著作(『現実界の探偵』白水社、2012年等)のこと、また学生への指導の様子も書かれていて感激した。まったく面識のない方が、共通の「師」を媒介に、コミュニケーションできるというのは不思議でもある。深く御礼申し上げる。(2016年12月29日)

5 コトバが現実をつくる

客観的な状況があってもなくても、コトバ(予言)によって客観的な状況が作り出される(例;あの銀行が潰れるという噂によって、人々が預金を引き出し本当にその銀行が潰れてしまう)ということがあるのは、社会学の常識である(予言の自己成就)。

「保育園に落ちた!!!日本死ぬ」と書いた人が匿名であっても(実際保育園に落ちたのではなく、あるいは実際落ちたにしても)、その言葉に共感した人が多数いるということが、重要な「事実」である。この「事実」が世の中を動かす。このようなことを、3月13日の「天声人語」が上野千鶴子の言葉を引きながら書いている。

村上春樹のノンフィクションの方法もこれと似たところがある。村上春樹は、地下鉄サリン事件の被害者にインタビューしてその記録を『アンダーグラウンド』に、加害者にインタビューして『約束された場所で』に残す。それを執筆するにあたり、ノンフィクション作品の基本ともいえるべき「事実の裏を取る」ということをしない、しかもそのことを自分の方法としているという(加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』岩波新書、2015年、p163)。

<「語られた話」の事実性は、あるいは精密な意味での事実性とは異なっているかもしれない。しかしそれは「嘘である」ということと同義ではない。それは「別のかたちをとった、

ひとつのまぎれもない真実なのだ> (村上春樹「目じるしのない悪夢」『アンダーグラウンド』)

この方法は、「近代的な遺制」を脱した現代の哲学思想の知の地平では常識的なことだと、加藤典洋は述べている(前掲、p 164) エビデンスを重んじる現代の教育界の風潮や社会学の実証的方法にも、一石を投じるコトバだと思う。(2016年3月13日)

6 リアルとバーチャル

私は古い人間なので、「リアルとバーチャルのどちらがいいか」と聞かれたら「リアル」と答えると思う。また(バーチャルな)来世も信じていないので(?)、現世の「リアル」を大切にしたいと思う。しかし、ことはそんなに単純ではないかもしれない。

「IDE・現代の高等教育」の今年1月号の特集は「ニュー・ノーマルをどう築くか」で、大学の学長たちが、自分の大学の新型コロナ禍の大学運営を論じている。それを読むと実体験と深い学問的見識に基づくものが多く、読み応えがある。

巻頭論稿の奥田潔「遠隔地にある農畜産系大学の現在と将来」などは、各大学がモデルにすべきことが丁寧に書かれていて感心した。

また畑山浩昭「今後のキャンパス。コミュニティ、メンバシップ」には、「リアル・キャンパス」の他に「バーチャル・キャンパス」というものが出来つつあり、これも大切だと書かれていて、いろいろ考えさせられた。鈴木典比古・国際教養大学学長は、世界を駆け巡る「オンラインによる出前(授業)」が、大学のあり方を変えると述べている。

よく考えてみると、自分のリアルな体験と思っていたことが、自分の思い込みのバーチャルなもの(現実ではなく想像に過ぎないもの)だったかもしれない。恋愛や失恋も、自分の思い込み(想像)に過ぎないものが多い。だからと言って価値が低いものという訳ではない。恋愛ドラマのヒロインと相手役は、恋愛を演技として(バーチャルに)演じるのであるが、後から振りかえって、自分のリアルな恋愛や結婚と比べ、演技したバーチャルなドラマの世界は、価値低いものと言えないのではないかと思う。

SNSで結ばれるアイドルや歌手のファンのコミュニティはバーチャルであるが、結びつきが強い。写真家の藤原新也はCAT WALKというバーチャルなコミュニティを作り、その会員たちに一体感が生まれている。大学も、リアルなコミュニティだけに頼るのではなく、バーチャルなコミュニティを工夫して作り、学生の学びと体験と一体感を作り運営していく時代ではないのか。それも世界規模で。(2021年1月31日)

7 他者への配慮—余計なおせっかい?

「自分にしてほしくないことを、人にしてはいけない」というのは、子どもへのしつけや道徳教育で言われると思う。それでは「自分にしてほしいことを、人にしなさい」というのは正しいことであろうか。

昔家族でアメリカのマディソン (U.W.) で1年過ごした時、そのアメリカ人からたくさんのお恩恵を受けた。いろいろな行事に誘ってもらったり、家に招待してもらったりと。異国で土地勘もなく、知り合いも少ない中で、それらの招待や誘いは大変有難かった。

ただ、その恩恵は一方的なもので、お返しができないのがもどかしかった。その分、もし同じ人でなくても、外国の人が、日本に来たときは、そのお返しをしたいと思っていた。

最近、隣の家にアメリカの女性が滞在しており、暇そうにしている時もあるので、「うちの家族と一緒にバラ園に行きませんか」とか、「海を見に行きませんか」と誘ってみることがある。その人は、その誘いの半分くらいには応じ同行し、「親切にしてくれて、ありがとう」とお礼を言うのであるが、誘いに少し迷惑を感じているのではないかと思う時もある。人それぞれ、生活のペースや好みはあるものだし、自分の好み（自分が外国に行った時してほしいこと）を人に押し付けるのは、たとえそれは親切心からであっても、余計なおせっかいなこともあるのかもしれない。

自分にしてほしくないことは他人もしてほしくないことであることは多いが、自分にしてほしいことは、他人もしてほしいことではないことも多く、「自分にしてほしいことを、人にしなさい」とは言えないかもしれない。

ただ上記も日本人にありがちな遠慮だったかもしれない。彼女の日本滞在記をブログで読むと、下記のように、私達の家族の「おせっかい」も楽しんでくれたようで、それならもう少し、誘っておけばよかったと今は思う。

I made friends with the family across the street and they took me on several outings including two very nice flower gardens, a gigantic mall, and they invited me to their backyard BBQ dinner. Three generations live in the same house and one daughter is in Tokyo. The entire family speaks fluent English, which was refreshing...even the three-year-old grandson...who is the sweetest little boy and can sing Row Row Row Your Boat like a professional! (2016年5月21日)

8 相手を思いやるということ

「相手を思いやる」や「相手の立場に立って考える」ということは、道徳教育の項目にもあがっているし、多文化教育の「転換アプローチ」(相手の立場から考える)もそうであり、重要なことである。しかし、実際は行き違いもあり、次元の違いもあり難しい。

こちらが相手のことを思いやったり言ったり行動したりしても、その言動が理解されず、恨まれる場合がある。さらにややこしくなるのは、相手もこちらを思いやっている場合である。その思いやりが自分を傷つける場合がある。それも、お互いを思うゆえにである。

親がゲームばかりしている子どもを叱り、ゲームを辞めさせるのは、ゲームをしたいという子どもの意向を禁止する、思いやりのない行動ではなく、子どもの将来を考えた思いやり

行動である。自分に片思いの相手に冷たくするのは、相手に自分に対する未練を早く断ち切ってふさわしい人を探してほしい、という思いやり行動である。これらの行動は、今理解されなくても、いずれわかってもらえるので問題はない。ここで問題にしているのは、これとは違う。

今評判の韓国ドラマ「愛の不時着」の15話で、恋人同士がお互いに、警察で自分が罪を被り、相手が罪を免れるような供述をする場面がある。二人はそれぞれ自分を犠牲にしての相手の幸せを願って、このような供述をする。ところが、相手の為を思って自分がした供述（罪は自分の側だけにある）は、自分の幸せを一番願っている相手の願望を真っ向から否定するものである。お互いに相手の為を思った供述が、相手を深く愛する二人故に、お互いの思いとは逆の結果を招く（浅いレベルでは、相手は罪を免れ幸福になるかもしれないが、自分の幸福を何よりも願う相手の願望を否定する）。それでお互いに、死ぬほど傷つく場面がある。（囚人のジレンマの逆？）

シエル・シルヴァスタイン著・村上春樹訳『おおきな木』（あすなろ書房、2010）では、リンゴの木は少年が好きで、その願いをかなえることに生きがいを感じている。少年に、自身（リンゴ）の実、枝、幹を提供し、自分は切り株になっても後悔はしない。少年の為になることが至上の願望だからである。一方少年は、そのリンゴの願望を当たり前のことと考え、リンゴの木が自分に幹まで提供し切り株になっても、それがリンゴの願望をかなえることなので、悪いことをしたという意識はない（読者もそう読む）。

この「愛の不時着」と「大きな木」の意識の違いは何なのであろう。前者は恋人同士であり、後者は母子関係だからであらうか。前者は対等であり、後者は母親の子どもへの無償の愛が前提になっているからであらうか。（ドラマ「屋根裏のプリンス」の場合、片思いの側の相手への無償の愛の要素もあり、後者に近い面もある。）このように、ものごとには、深さもあり、相手の気持ちもあり、一筋縄ではいかない。（2020年7月9日）

9 認知的不協和について

心理学に「認知的不協和理論」がある。それは、「人が自身の認知とは別の矛盾する認知を抱えた状態、またそのときに覚える不快感を表す社会心理学用語。アメリカの心理学者レオン・フェスティンガーによって提唱された。人はこれを解消するために、矛盾する認知の定義を変更したり、過小評価したり、自身の態度や行動を変更すると考えられている」（ウィキペディア）。

この理論を持ち出すまでもなく、私たちは認知の矛盾を解消することを、無意識的にやっている。たとえば、私は、A（村上春樹）という作家が好きだとする。私は、Bという人に友情を感じているとする。ところが最近、BがAのことを悪く書いているのを知った。私→+A、私→+B、B→-A（+は好き、-は嫌い）という関係にあり、私からみて、私とAとBの3者の関係は、矛盾（不協和）になる。（その関係の符号の積がマイナスになると不

協和)

そこで、私がこの矛盾（不協和）を解消すべき取る方法は、① Aを嫌いになる。② Bへの友情を解消する（薄める）のどちらかである。普通 ②の方法をとることになると思うが、少し残念なのは、BがAのことを悪く言うのに接した（B→-A）ということである。そのようなことがなければ、あるいはあっても知らなければ、Bへの友情は薄れることはない。つまり、そのようなことは知らない方がいい。さらに言えば、そのような事態を起こさないようにした方がいい。自分の好きなことは、自分だけにとっておき、親しいし人にそれを押し付けたり、その感想を聞いたりしない方がいい。夫婦や親友といえども、自分の好きなこと（たとえば小説や映画やドラマ）は勧めない方がいい。そんなことをすると、認知的不協和が生じ、関係が壊れる危険性がある。でも、自分と感覚や価値観の近い人と結婚したり親友になったりするので、それとの矛盾・認知的不協和をどうすればいいのだろうか。人生は矛盾が多い。（2020年9月26日）

10 第1印象や先入観の固定化について

第1印象や先入観は固定化する傾向があると思う。その後の事柄の解釈は、第1印象や先入観を補強するような形で働くのではないか。昔アメリカ人のベトナム戦争への見方は、ベトナム戦争の進行と共に、推進派はますます推進の意見に、反戦派はますます反戦の意見になっていったという。同じ戦争の進行の事実を見ても、最初の見方によって180度違ってしまふ（ロシアのウクライナへの侵攻に関しての見方に関しても同様であろう）。さらに定着した制度に関しては、その反対の制度に理解を示すのはなかなか難しい。

日本の学校では、教室で一人の教師が多くの児童生徒を一斉に教える一斉指導が、明治以来制度と定着している。したがって、そうでない「個に応じた指導」やオープンスクールを、1971年にアメリカの学校で視察した日本の教師は、その教育方法が全く理解できなかったという（加藤幸次『個別最適な学び・協働的な学びの考え方・進め方』（黎明書房、2022.3,pp22-23）。一斉指導が慣習化した日本の教師にとって、児童・生徒が個別に学ぶという発想は皆無に等しい。

村上春樹の短編小説「ドライブ・マイ・カー」（『女のいない男たち』（文藝春秋2014年）を原作とした映画がつくられ、アカデミー賞（国際長編映画賞）を受賞し話題になっている。ただ、映画は原作とはかなり違っているという。それだと、原作を読むのが先か、映画を見るのが先かがかなり悩ましいところである。きっと、先に見た方が先入観として残り、その観点から残りの方を見る（or読む）と思う。私の場合は、既に小説は読んでいたので、映画は見るべきかどうかは迷う。

私の小説への感想は、あまりいいものでなかった。車を運転する女性に関する描写や、役者（俳優）の心理に関しては興味深い指摘がたくさんあったが、この小説のメインテーマである亡くなった妻（女優）が、生前つまらない男に惹かれたのは何故だろうと悩む主人公の心

理はあまり理解できなかった。

この映画は、原作の小説「ドライブ・マイ・カー」だけでなく、村上春樹の他の作品も取り入れ、春樹ワールドを描いているのという解釈もあり、映画が原作を逸脱して優れたものになっているのであれば見たいと思った。(2022年4月6日)

1.1 自虐的な発言に対するリアクションについて

東大出版会の情報誌『UP』(NO567,2020.1)に載っている文章(川添愛「たったひとつの冴えた Answer」)に中に次のような箇所があり感心した。

「自身についてネガティブなことを言うてしまう人のほとんどは、内心『否定してもらいたい』と考えているはずだ」「自虐的な発言の裏には、結構いろいろな意図が隠されている」「『理想の高さ自慢』さらには『客観性を失わないワタシ自慢』、(そして)『目の付けどころがシャープ自慢』が含まれていたりする」。

自虐的発言に対する人のリアクションは、大変難しいという。それを義務的に否定することも、正面からガチ否定することも失礼にあたり、技術的なこと以上に、普段からの心のもち方に根差したリアクションが要求されるという。(2020年1月3日)

1.2 人とのコミュニケーション、人との交流について

人と人とのコミュニケーションや親密性はとても難しく、それがあり得ても、持続的に親しくなるのではなく、一瞬の短い瞬間のことかもしれないと、藤原新也の『アメリカ』を読み返して思った。

<アメリカのハイウェイで「追い越したり追い越されたりする間際のすれ違う刹那、もし、私が彼や彼女に視線を送るなら、彼や彼女はきっとそれを感じる。一瞬、交差する視線。1秒か2秒くらいのものであろう。人生の中の最も短い他者との出会いと別れ。/ 運がよければ3日に1度くらいは、アメリカの人生の達人ともいえるべき、あのアメリカ的な博愛主義者が短くて0.5秒、長くて2秒程度の私の車窓の横を通りかかるのだ。/ 私たちがお互いになしうること、すべきことはきわめて単純でやさしいことだということを教えてくれる。つまり車の窓の向こうで心の窓を開くことだ。そんなふうに笑みをたたえ、軽くうなずき合う。/ 命の危険にさらされた高速の中での出会いと別れあることによって、そのうなずき合いの中にお互いの命を思いやるようなちょっとした感情の機微が垣間見えもする。/ 私は彼や彼女の素性を知らない。彼や彼女は私の素性や人生を知らない。しかし、お互いを知らないことが、お互いを知っているとき以上に、軽やかな後腐れの無い感情を裸のまま交わし合うことができるという逆の現象を生むのだ。フリーウェイ上でのこの小さな出来事は、アメリカという国における人間関係を知るヒントになる。> (藤原新也『アメリカ』情報センタ

一出版部、1990年、pp.114-116)

アメリカのように異質な属性(民族、言語、風俗、価値観、思想、生活習慣)を持つ人々がコミュニケーションを取ろうとする時、それはお互いの共通点を見つけようとか親密になろうとかするのではなく(それは不可能なことが多い)、ハイウエイを追い越し追い越される時の一瞬の笑顔の交換のような「属性を超えた人間の根底にある単純で純粋な理念や感情で繋がろうとする楽天的ともいえるほど赤裸々な感情の交流」(p.117)による。

私たちは、親しくなるということは、その人のことさらに深く知り、関係を持続することであると思いがちであるが(友人関係や恋愛関係、結婚など)、それとはまったく違う親しさ、しかも自分とは違う人との深い交流の仕方があることを、この藤原新也の指摘は教えてくれる。

我々の日常でも思い当たることがある。「片思い」(2020.5.6)や「推し」(2021.3.6)もこれに当たるであろう。これらは相互的ではなく一方的であるが、持続的でないが深さは有している。(2021年7月23日)

13 文脈の大切さについて

話ことばでも書きことばでも、前後の文脈がわからないと何を言っているのかわからないことが多い。逆に言うと、前後の文脈がわかっているならば、語られた内容が、明確に聞き取れないあるいは読み取れなくても理解できる場合がある。このように前後の文脈を知っているかどうかということは重要なことである。

外国語の理解の場合は、それが一層顕著である。語られたあるいは書かれた外国語の内容が理解できるかどうかは、個人の語学力に帰されることが多いが、そうではなく、文脈の理解の有無による場合も多い。したがって個人の語学力を判定するのであれば、前後の文脈によらない論理的な内容の理解を問うべきであろう。

実際の大学入試の問題に、映画やドラマの中の会話を出す大学があると聞く。きっとそれは出題者の心を動かされた映画やドラマを使っているのものであろうが、前後の文脈を無視して、映画やドラマのある部分を切り取り、その会話を穴埋めさせても、それは正しい語学力の判定にはならないのではないか(このようなことをするのは外国人教師が多いのかもしれない)。

「(それは)標準英語から外れている表現があったり、話の途中から出してくる上に、そもそも映像がないので内容がよく分からなかったりで、解答する側(受験生)からすると迷惑なタイプの問題です。解答の客観的根拠も出しにくい」という専門家の声も聞こえてくる。文脈を大切にしてほしいものである。このような問題を出すのなら、その前後の文脈をきちんと説明する必要があるだろう。一般に国語の問題で、長い文章が出題されるのは、文脈を大切にしているからであろう。(2020年3月17日)

V 読書、書評

大学教師にとって本を読むことは一番重要な仕事であろう。それは古今東西の様々な人との会話のようなものである。直接の知り合いからの情報以上のことが、読書から得られる。同時に知り合いから出版した本を寄贈していただくこともある。それを読んで、知人がこんなことを考えていたのかと驚くこともある。その感想を書いたものを集めた。

1 黒岩ユリ子『メキシコからの手紙—インディヘナのなかで考えたこと』(岩波新書、1980年)

黒岩ユリ子氏は、1940年東京生まれで、16歳の時、NHK音楽コンクールバイオリン部門第1位特賞を受賞し、桐朋学園音楽科在学中にプラハ音楽芸術アカデミーに留学し、チェコ演奏家芸術家賞を受賞し、メキシコを拠点に世界的に活躍してきた著名なバイオリニストである。

その黒岩ユリ子が、今は千葉の外房の御宿に住み、「バイオリンの家」を開設したというので、氏の初期の著作『メキシコからの手紙—インディヘナのなかで考えたこと』(岩波新書、1980年)を読んでみた。

バイオリニストの書いた軽い読み物と思ったら、とんでもなく、メキシコのインディオの立場に立った文化人類学的な、しかもご主人のメキシコの原住民庁の一地方(ワステッカ)の所長としてインディオを支援する活動を支え、そのため共に暗殺や誘拐の危険にさらされ、それでも搾取されるインディオの立場に立ち、何ができるかを模索した苦闘の記録である。

インディヘナの子どもが学校で母語でないスペイン語で教育され、親元と疎遠になり、都会に出て金持ちの「女中」になるような進路しか得られない教育を広い観点から痛烈に批判している。教育とは母語も大切に、育った地域も豊かにするようなものでなければならぬということを事例から説得的に書いている。

「今日の地球上の俗に『第3世界』と呼ばれる地域に住む人々が、先進諸国の繁栄をささえているのは彼らなのだ、という事実も知らずに貧困生活をしているのを見ていると、自分は学者だからと言ってのんびり研究室にこもって(中略)満足しているわけにはゆかなくなってしまう」(45頁)

「学問というものが、学問のための学問ではなく、生きている人間に直接、今すぐにも何か益をもたらすものになることが、世界の現状を知っている学者に課せられた急務であるという考えに到達したからであろう」(45頁)

このように、今の多文化教育のあり方や学問のあり方についても、極めて的確なことを、具体的な体験の中から述べていて迫力があり、いろいろ考えさせられる名著である。(1997年に25版) (2017年4月2日)

2 深谷昌志『子ども問題の本棚から』（黎明書房、2019）.

先輩の研究者で、現在も活躍されている方が、私の周囲では何人かいる。それも何かの名譽的な役職に就いているというのではなく、新しい著書を出版されているのであるから驚きである。本を執筆・出版するということは、他のこと以上に、頭を使い体力を使い神経を使う。それだけ齢を感じさせないということである。

私が若い頃、調査研究他でお世話になった深谷昌志先生（東京成徳大学名誉教授）から、最新刊『子ども問題の本棚から一子ども理解の名著 25 冊を読み解く』をお送りいただいた。

<半世紀以上にわたって子ども研究を重ねてきた著者が、現代の子どもを捉えるのに示唆に富むと思われる 25 冊を厳選して紹介。古今東西の名著のすばらしさ、面白さ、問題点を著者独自の鋭い視点で批評。><子ども問題に精通する著者が、P・アリエスの『〈子供〉の誕生』や千原ジュニアの『14 歳』など古今東西の 25 冊の子ども理解の名著を読み解きながら、子どもが抱える様々な問題を独自の視点で説明します。>（ネットより転載）

上記の本の紹介にあるように、教育や子どもに関する古典を丁寧に読み解いたもので、その文献の歴史的、時代的意味を解説し、また現代の視点からも考察した内容で、筆者の若い頃の読みと今の読みの比較、本の著者の思いへの共感（そして疑問も）など、円熟した研究者ならではのもので、深い感銘を受ける。原著者と評者のスリルに充ちた論争のようで、思わず原著を読み直し、その議論の行く末を見極めようとした文献もいくつもある。

大学の教員も定年があり、定年まで勤めればあとは研究など続ける必要はないと思われがちだし、本人もそう思っている人は多いと思う。深谷先生のように定年をはるかに過ぎて（1933 年生まれ）、研究意欲が衰えず、新しい著作を次々出版される方が少数ながらいる。その意欲はどこから生まれてくるのであろうか。その何分の 1 かでも学びたい。

（2019 年 5 月 7 日）

3 深谷昌志『子どもの目で見た日本の学校』（22 世紀アート、2021 年）

深谷昌志先生より最近出版されたご著書『子どもの目で見た日本の学校』をお送りいただいた。444 ページの大著である。深谷昌志先生は、1933 年東京生まれで、東京成徳大学名誉教授。「日本子ども社会学会」の第一人である。

著書の内容は、明治の時代から現代に至るまでの 161 人の自伝（161 冊）を集め、それを丹念に読み解き、それを歴史の流れの中に位置づけている。その手法は見事で、学識と卓越した洞察力のある学者のみができる業績である。取り上げられた 161 人は多様で全国に及び、その生きた時代、出身地や出身階層も明記されており、日本人の生活や意識、とりわけその時代の学校や子ども時代の様子がよくわかる。東京の下町育ちの先生の読み解きには、先生自身の自分史の片鱗がうかがえる。

「まとめに代えて」の書かれている提言（①日本の学校は 20 世紀の優等生、②「受容」

から[能動]への教育の視点のコペルニクス的転換を、③小学校では子ども主体の「生活（経験）単元」を根底に据える、④アフタースクールの充実を、⑤発展途上国並みの文教行政からの脱皮を）は、歴史的な多くの自伝を読み解いた知見に基づいた提言だけに、説得力がある。（2021年5月16日）

4 谷川彰英『千葉の地名の由来を歩く』（ベスト新書、2016年）

柳田国男研究で有名な谷川彰英先生（筑波大学名誉教授・元副学長）より、ご著書『千葉の地名の由来を歩く』を、サイン入りでいただいた。

先生の「地名の由来を歩く」シリーズの6冊目のご著書で、その精力的な執筆活動に敬服させられる。

私は半年前、偶然御宿駅で谷川先生にお会いし少し町をご案内させていただきただけだが、御宿についてもその名前の由来はじめ、興味深い記述がみられる。

私は千葉に生まれ育ちながらも、千葉は東京に隣接するだけで、たいした歴史も文化もない県と思っていたが、このような歴史の深さや面白さのあるところと、谷川先生のご著書から多くのことを教えていただいた。また、千葉県が古くから全国各地（特に徳島県や紀州）とも密接につながっていたというのも興味深い。

千葉県人はこの本を読むと、千葉県に住んでいることに誇りを持てるかもしれない、と感じた。（2016年10月25日）

5 谷川彰英『ALSを生きる』（東京書籍、2020）

最近、高名な教育学者で、また有名な地名作家である谷川彰英先生（筑波大学名誉教授）が、自分史に近い本を出版された。いろいろなことを考えさせられ、励まされる内容だった。谷川先生には、下記のようなお礼状を送った（一部転載）

＜ご著書をお送りいただきありがとうございます。ご著書は、一気に読ませていただき、「すごいな」という驚きの一言につきます。先生のこれまでの歩み、生き方、学問への姿勢、その業績、大学管理職の仕事、地名作家としての努力と著作、そして、ご病気の経緯、難病への対処、奥様の気遣いと看護、どれをとっても、すごいなと、感銘を受けます。ご著書はとても読みやすく、一気に読めます。ただ、軽いということではなく、深く考えさせられる内容が、明解な文章で、スリリングに書かれていて、最後まで、緊迫感をもって読ませていただきました。先生の少年時代や大学時代のエピソードも、興味深く、その後の先生の生き方や学問的業績の萌芽がそのようなところにあったのかと納得できます。若い時のドイツへの冒険的な旅行には、先生の人間としての大きさを感じます。また、加藤幸次先生の紹介で行かれたUWのことも、懐かしく読ませていただきました。順風満帆に走っていた船が、

急な突風で、沈没寸前までいったのにも関わらず、冷静沈着に対処する谷川先生の、気力と体力には、本当に心動かされます。励みになります。先生が難病と闘いながら、どうしてこんな立派な本が書けるのだろうかということが驚きです。とても明晰で、論理的で、それでいて暖かく、人の心を打つような内容が満載です。暗さが全くないのも驚きです。また、先生のこれまでの学問的な業績が巻末に挙がっていて、その多さにも驚きを禁じ得ません。先生の他の著作も、もう一度読み返してみたいと思いました。コロナウイルスの猛威や季節の変わり目に、ご健康にはくれぐれも注意してお過ごしください。御礼まで。>

(2020年3月21日)

6 寺崎昌男著『大学研究の60年』(評論社、2021.4)

東大名誉教授の寺崎昌男先生よりご著書『大学研究の60年』(評論社、2021.4)をお送りいただいた。

先生は、1932年(昭和7年)福岡県出身、東京大学教育学部、大学院を卒業され、これまでに大学は東京大学、立教大学、桜美林大学に勤務されている。清水義弘先生より少し後の世代で、麻生、潮木、天野先生らの少し先輩にあたる。先生には多数の著書があり、「日本教育学会」や「大学教育学会」の会長を歴任されている。

私は先生が中央教育研究所の理事長をされているときご一緒させていただいた。先生の生育史や研究史に関しては、これまでのご著書や中央教育研究所でのお話(講演)等でお聞きしたことはあったが、今回このご著書を読ませていただき、新たなことがたくさんわかり感激した。

寺崎先生の就職までのご苦労や、博士論文を仕上げるまでの苦労の話は、とても学ばせていただくことが多く、先生ほどの人がこれほど苦労するのかという驚きも禁じえなかった。先生の卒論のテーマが「明治初期の高等教育と学生との関係」ということも今回、はじめて知り、現代の学生の文化に関心を持ち、いくつかの調査をしてきた私としては、先生との近さを感じた。大学での行き違いで、ご指導を受けられなかったのがとても残念と感じた。

寺崎先生が卒業されまた教えられた東大の専攻は教育史である。今は教育社会学でも歴史的な研究は盛んで、その橋渡しをされたのは、寺崎先生ではないかと思った。

ご著書の中に出てくる先生方の名前がとても懐かしく、半世紀以上も前のことが、少し前のことのように思い出される。私の駒場時代は、清水、持田、細谷教授の「教育原理」の授業を受け、宗像教授の特殊講義を受講し、潮木講師の演習を受講した。私が本郷の3年次に進学した時は、教育社会学の研究室は、牧野教授が退官された後で、清水一松原体制ができたばかりの時である。学部3年次には、教育社会学の授業の他、大田教授の「教育学概論」や、仲教授の「教育史概論」、岡津教授の「教育内容」の授業を受けた。学部4年の時の私の教育実習をわざわざ市川の中学校まで見に来て下さったのは学校教育の稲垣助教授であった。

本書は『大学研究の60年』という題で、「大学のことは教育学者の研究対象ではない」といわれた戦後の時代の中で、先生がいかにして、大学や高等教育を教育学の研究対象にしていったかの歴史を、先生の奮闘の自分史から書き下ろしたもので、「東京大学百年史」の編集（委員長）や「東洋大学百年史」の編集、「立教大学全学共通カリキュラム」の作成他など、高等教育研究や大学研究のことが多く紹介されている。高等教育研究としても、また卓越した研究者の自分史としても読める優れた著作である。（2021年6月20日）

7 神野藤昭夫著『よみがえる与謝野晶子の源氏物語』（花鳥社、2022）

数年前、放送大学文京学習センターの客員でご一緒した国文学の神野藤昭夫先生（跡見学園女子大学名誉教授）から、最近書き下ろされた1冊のご著書をお送りいただいた。462ページの分厚い日本の古典文学に関する著作で、大学退職後このような学術著を執筆された神野藤先生の意欲と学識に驚かされた。

私には文学、特に古典に関する素養がなく、まともな感想を述べることはできないが、学ぶことが多かったのもので、その記録を下記に残しておく。

著者の神野藤先生は、1943年東京生まれ、早稲田大学院卒の文学博士である。「みだれ髪」という和歌集で話題となった与謝野晶子の自伝とその翻訳（源氏物語）の研究書である。

本書は、「新資料の数々をもとに、（与謝野晶子の源氏物語の）訳業の具体像を明らかに」した学術的に価値の高いもので、同時に推理小説を読むような謎解きのスリリングな読みものということは、素人の私でもよくわかった。

古典の文学研究や書誌研究の方法が、ご著書からわかり、勉強になった。源氏物語のオリジナルが今見ることができないこと、過去の普及版はいくつかあること、与謝野晶子の現代語訳も、直筆の原稿と、清書されたものと、初版と再版等で、中身が変わっていることを丹念に調べ、その原因を突き止めていく著者の手法は見事で、推理小説を読んでいるようなスリルを感じた。

与謝野晶子の直筆の現代語訳原稿が、訳者の思いを流れるように文章にし、原典や漢字なども気にせず、一気に書いている様子が考察からわかり、このようにして現代語訳というものがなされるのか（なされたのか）ということに驚いた。

与謝野晶子の在仏滞在が、どのような意味を持つのかを、実際に、現地調査をして、自分の足や自分の目で確かめる手法その記述には迫力があり、著者が、与謝野晶子研究の第1人者である所以が理解できた。

源氏物語がなぜ、日本でこれほど重要な文献として扱われているのか知りたくなった。古典としての価値なのだろうか。与謝野晶子以外にも、多くの人が現代語訳を出している。ただ、近代の恋愛結婚とは違う（自由？）恋愛を扱った内容の「源氏物語」が、高校の教科書に載るというのも、教育としてふさわしいのか、と不思議に思う。

与謝野晶子の「みだれ髪」が自由奔放なものという説明があったが、与謝野晶子の恋愛観

と、源氏物語の恋愛観、結婚観に関しては、通じるものがあったのだろうか。実際の夫の与謝野鉄幹との関係は、どのようなものだったのか。現代の視点から見ても興味深い点が多い。

私は、江藤淳や吉本隆明などの批評家の作家論は好きでよく読んだことはあるが、文学、古典の学術研究の本というのは読んだことがなく、素養や基礎が全くない故見当外れのことばかり感じたが、異文化の分野の学びの楽しさを味わうことができた。

(2022年7月14日)

8 山本雄二『ブルマーの謎〈女子の身体〉と戦後日本』(青弓社)

長年研究し、出版した著作が世に認められるというのは、研究者冥利に尽きることであろう。日本の教育社会学研究の理論派の第一人者である山本雄二氏(関西大学教授)が、長年研究してきたテーマの本を出版し、今日の朝日新聞の書評欄に大きく取り上げられた。

女子のブルマーがテーマということで、なかなか出版してくれるところが見つからないと、山本氏は困惑していたが、青弓社というアカデミックな内容の本を多く出版しているところからの出版で、朝日の書評でも高く評価されたということは、友人の一人としてとてもうれしい。

山本氏の論文は昔から学会誌(教育社会学研究)で読んでいたが、長い間面識はなく、今から22年くらい前、UWのM.アップル先生の授業で出会い、UWでは当時院生でアップル門下の野崎・井口夫妻らと一緒に授業に出、さまざまな議論をし、毎週のようにテニスをした。

山本氏の訳した『抵抗の快樂』(J.フィスク著、世界思想社)も名著・名訳で、その本からカルチュラル・スタディーズを学び、マドンナ現象の文化的意味も知った。(2019年4月24日)

9 伊藤彰浩『戦時期日本の私立大学ー成長と苦難』(名古屋大学出版会、2021年)

伊藤彰浩氏(名古屋大学教授)より、近著『戦時期日本の私立大学ー成長と苦難』を送っていただいた。300ページを超える大著、しかも膨大な歴史的な資料やデータの発掘や、その丹念で緻密な分析、膨大な註(56ページ)参考文献(11ページ)にも、感心させられた。

戦時期の日本の私立大学は、政府や軍部の上からの強い命令に従順に従い、存続をひたすら図ったと思いがちだが、そのような思想や学問への弾圧という側面だけでなく、個々の大学の経営行動や財政的な側面、そして学生の進学行動が、個々の大学のあり方を決定づけていたことが、具体的なデータをもとに実証されている。

その手法は教育社会学的で、鮮やかである。大学規模別にも様々なタイプの私立大学があり、大規模の日本大学と小規模の上智大学の規模の違いによる戦時期の大学生生き残り戦略

の分析も興味深い。文部省の態度がはっきりせず、それを見破り、したたかに対応を図る私立大学もあったことも明らかにされている。

戦時期の私立大学を、このような視点から実証的に研究したものはじめてで、著書の大変な努力がうかがえる。後世に残る大学史の研究書になるものと思う。

本書の分析対象が、1945年の敗戦時点で、大学令による認可を受けて存在していた27校に限られていたが、その他の高等教育機関、専門学校（戦後大学に昇格した例えば成城、成蹊、学習院、武蔵など）が、戦時期にどのような状態であったかもさらに知りたくなる。さらに、戦時期の各大学や高等教育機関の在り方が、戦後にどのように生かされたかもしれない。（2021年4月12日）

10 尾嶋史章・荒牧草平 『高校生たちのゆくえ—学校パネル調査からみた進路と生活』（世界思想社、2018）

今回日本教育社会学会から学会誌に掲載する書評を頼まれ、自分の専門に近い著作の本の書評を書いた。自分の専門に近いとつい辛口になってしまう。

<質的な社会調査は少数の具体的な事例の報告から始まり、そこから普遍的な傾向を見いだそうとするもので、興味深く読むことができる。それに比べ、量的調査は、調査データの、数字の羅列やその説明が主で、読んでいて退屈なものが多い。そのような中で、本書は興味を持って読める数少ない量的調査の報告である。その理由を考えてみると、データの社会的背景の的確な記述、データの単なる記述ではなく説明（原因-結果関係）、データの解説にとどまらない政策的・実践的課題の提起などをあげることができるであろう。

本書は、高校3年生を対象にした量的調査の報告書である。3時点（1981、1997、2011）での変化を追っている。主に二つの内容が中心になっている。一つは高校生の将来展望（キャリア）。もう一つは学校生活を中心とした高校生の意識構造である。生徒の出身階層や生徒の通う学校ランク（学校間格差）との関連の分析が丁寧になされている。共同研究者11名（執筆者）の討議が十分になされることが内容からうかがわれる。各章とも最後に要約と今後の課題、提言が書かれていて読みやすい。各章の概要は編者によって序章に的確になされているので、ここでの紹介を省略したい。調査したデータの統計的な検証に基づく興味深い知見が、各章に数多く記述されている。そのいくつかをあげておこう。

1 「高校タイプや出身階層と卒業後の進路選択の関連構造は、30年間ほとんど変化していない」「学校生活に関する意識が学校タイプや出身階層によって分化する傾向は弱まっている」「学校での活動に『まじめ』に取り組む生徒が増加している」、「学校では『まじめ』にやりつつ、多少の不満は学校外で昇華し、教師に反抗することもない」（1章） 2 「就職希望者の割合が一貫して減少してきたが、就職希望者の成績は男子では上昇している」（2章） 3 「高卒就職—販売・技術職」「大学—事務・管理職・未定」「大学—専門・技術職」

「短大・専門一準サービス職」という関係を「潜在クラス分析」で見出した(3章) 4「大学進学希望に対する父不在の負の効果は、男子の場合は学校タイプを統制すると消失するが、女子ではその効果は残る」(4章) 5「高卒者の就職口が縮小するなか、とくに普通科の進路多様校では進学を選択せざるを得ない状況に直面している」「奨学金情報の周知や応募において、高校の果たす役割が間違いなく大きくなる」(5章) 6「どのような進路を希望しようとも安定した経済的基盤を求めるのは変わらない」「生徒は、興味や関心に基づき仕事を選ぶことにあまり現実味を感じていない」「就職希望者の自己実現志向が弱い」「自己実現志向は高い威信の大学を希望する高校生で強い」(6章)。 7「学校タイプにかかわらず、一般受験を予定していることが学校外教育の利用傾向を高めている」(7章) 8「学校タイプや進路希望をコントロールしても、まじめな生徒ほど学習時間が長く、学習以外の生活時間は短い(8章) 9『ゆとり教育』のもとでの学校教育は、高い学校生活満足度の形成をもたらした」(9章) このように、高校生の将来展望や意識を明らかにするのに、社会的(時代的)背景、親の社会的階層、学校ランクの規定関係を的確におさえ、さまざまな意識間の関係をクロス集計、多変量分析を駆使して分析し、教育政策や実践を提言する本書の内容は、教育社会学の研究の王道をいくものであり、続く研究の模範となるものであろう。

若干気になる点をあげておこう。1 現在全国で高校は4907校あるが、今回調査対象になった高校は地域的にも限定された17校であり、今回の調査結果を一般化できるのか。また最新(3回目)の調査が行われたのが2011年である。社会や教育界の激しい変化の中でここでの考察が、現在も通用するのか。2「学校パネル調査」という興味深い名称を使っているが、調査対象が必ずしも同じ学校ではなく、「学校タイプ」を分類する基準も回により少し変わる中で、「学校タイプ」別の変化を追うことに多少の無理を感じる。3 分析は高校生に対する意識調査の結果のみから行われており、各高校の客観的なデータ(学校の伝統、教育経営の特色、生徒文化の特質、進路実績、教育改革等)や教員の意識との関連は、データから考察されていない。その間に乖離はないのか。実際の高校教育はこれらの要因の相互関係・相互作用で進行している。4 生徒に対する調査票は16頁に渡り、31問・120項目に関して答えるように作成されている。このような膨大な質問をしないと、求めるデータが蒐集できないのか。5 さらにその調査項目は、生徒の進路意識を中心に、研究者の問題関心から作成されたものである。それは今の高校生の関心や志向の枠組みに則っているのか。たとえば、今の高校生は将来の進路より、友人関係、恋愛、ネット利用、引きこもりなどに関心があるのではないか。また現代の高校の地域社会との関係、教育改革(カリキュラム改革等)が生徒にどのような影響を及ぼすのかは現代では重要な問題ではないのか。

多少の疑問はありながら、本書は長年の調査の実績を積み重ねた上での緻密な統計分析と、共同討議から書かれたものである。後世に残る高校調査の報告になるであろう。一読をお勧めする。> (「教育社会学研究」105集、2019年11月30日、pp173-175) (2019年12月28日)

1 1 北澤毅・間山広朗編著『囚われのいじめ問題』（岩波書店、2021）

本書を、編者の二人からお送りいただき読んだ。岩波書店刊で 323 ページの分厚い本なので、なかなか読み始める勇気が出なかったが、読み始めると学術書とは思えないスリリングさがあり、一気に読むことができた。

構築主義の立場からの大津いじめ事件の多面的な考察で、いじめ観の転換をはかる画期的な本という印象をもった。昨日の朝日新聞や今日の NHK の朝 7 時のニュースの大津いじめ事件 10 年目の取り扱いは、相変わらず古い定型的な古しいじめ観のままがっかり、マスコミ人にも本書を薦めたい。

北澤氏の学識、優れた分析力や明解な文章に感服するが、北澤氏が立教大学で教えられた院生たちが北澤氏の指導や共同研究で力を付けて、ここまで分析や執筆ができるまでになったのかということも、驚きである。

本書を読んで教えられたこと印象に残っていることは多々あり、そのいくつかを列挙しておく。

1 新聞報道の地方紙と全国紙の扱いの違い、その世論への影響の仕方の違いの鮮やかな分析（1 章、越川洋子）。

2 テレビ報道の資料の収集方法の大変さ、テレビ報道の手法の巧妙さの考察に納得（2 章、間山、3 章 稲葉浩一）。

3 事件の社会問題化のメカニズムが鮮やかに説明されている（「自殺練習」という風評や「教育委員会や学校のいじめ隠蔽」という検証なしの前提）（2 章、間山）。

4 「結論ありきの報告書」－いじめはあったという前提から出発の問題点。「X（被害者）の意味世界」「目撃証言」の多様性（4 章、北澤）。

5 当事者経験への接近－遺族（5 章、今井聖）、「いじめ加害者になるという経験」（元生徒と保護者）（6 章、越川）、担任教師（7 章、稲葉、山田鋭生）は、同じ事件を違って見ていることの鮮やかな考察、記述に感心。

6 「物語としての判決と羅生門的解釈」（8 章、間山）、「囚われの意味するところ」（終章、北澤）－世論の主流になっているいじめ論や、教育評論家の尾木直樹氏のいじめ観への根本的な批判を含んでいて興味深い。

いじめに関する論は、被害者の心理的な苦痛で定義するという文部科学省の見解から、いじめはどこでも起こり得るという認識になり、またいじめの加害者や関係者（教師、学校、教育委員会）はそれを隠蔽するものという前提での見方が一般的になっている。

しかし、それは偏った見方に過ぎず、「真実」を見逃し、冤罪を生む可能性もある。いじめで子どもを殺された親の気持ちに寄り添うということも、絶対視すると危ない。父親の自殺した子との関係やその叱責の仕方を調べると、父親に子どもの自殺の責任が全くなかったとは言えない（裁判でも、父親の過失相殺を 4 割認めている）。そのようないじめ論の呪縛、囚われから解放されるべきというのが本書の趣旨と理解して読んだ。以上は、一読しただけの感想なので、理解不足や誤読もあると思う。再読したい。（2021 年 10 月 11 日）

1.2 清水睦美・堀健志・松田洋介他『震災と学校のエスノグラフィー』(勁草書房、2020)

半世紀以上前のことになるが、学部時代に読んだ専門(教育学)の本で一番感銘を受けたのは、卒論のテーマも決まらず悶々としていた4年生の秋に読んだ本、木原健太郎『教育課程の分析と診断』(筑摩書房、1958年)である。当時の教育社会学の研究室の先生たちの関心は「経済発展と教育」や「社会開発と教育」といったマクロなところにあり、そのマクロな問題がミクロな人々の関心や心理とどのように結びつくのかわからなかった私は、教育社会学への関心を失っていた。教育実習に行った直後、偶然図書館で手にした『教育課程の分析と診断』は、教育社会学にもこんな面白い本があるのかと驚いた。

その内容は、教育社会学の研究者の木原健太郎氏が、名古屋の小学校に通い、一つのクラスの授業と子どもたちの様子を丹念に記録に残したものである。授業を手作りのアナライザーで分析し、教師と子どもの関係、子どもたちの集団構造をデータで明らかにし、教室の様子、教師と子どもたちの思いも生き生きと記録に描いている。学校社会学の祖と言われるW. ウォーラーの『学校集団』に触発されての研究とのことであるが、実証的なデータ分析とその生き生きとした学級集団の描写に魅せられた。

その後日本の教育社会学の分野でも、エスノグラフィー研究という形で、優れた研究が続いていった。その流れの1つだと思うが、今回清水睦美・堀健志・松田洋介他『震災と学校のエスノグラフィー』(勁草書房、2020年)を著者から贈っていただき、読む機会があった。とても素晴らしい本で、昔、木原先生の本を読んだ時の感動を思いだした。

次のような礼状を書いた。

<このたびは『震災と学校のエスノグラフィー』(勁草書房、2020)をお送りいただきありがとうございます。とても感銘を受け、現在1章ずつ、丹念に読み進めています。読みやすい内容ですが、いろいろ教えられること、考えさせられることがたくさんあり、安易には読めないなと感じています。

清水さんの生徒の作文の分析や堀さんの教師のインタビューやその他のエスノグラフィー分析の見事さに、驚いています。被災状況や人口動態、進路選択などのマクロ分析も精緻になされています。またその分析の背後の理論的な枠組みは、教育社会学の理論や最新の社会学の枠組みが的確に入っていて感心しました。

この理論枠組みが共同研究者の中に共有され、全体に筋が通り、いい本に仕上がっていることを感じました。皆さんの研究と教育に対する熱い思いと冷静な分析がマッチして、とても素晴らしい、歴史に残る著作になっていると思います。>

勁草書房のサイトには、<東日本大震災後、学校は災害経験とどう向き合ってきたのか。陸前高田の中学校における8年にわたるフィールドワークを基に描き出す。被災の前後で、学校のありようはどう変わり、変わらなかったのか。統計データ分析、中学校におけるエスノグラフィー、教師インタビュー調査、生徒の作文の分析等により、教師・生徒にとっての震災経験の位置づけや学校文化の変容を明らかにする。また、近代教育システムとの関連で、災害が近代学校に何をもたらしたのかを検討する。>と、紹介されている。

本書の魅力の 1 つは、震災以降の学校教育が、教育社会学の手法で分析されていることである。

それは、「個々の教育実践は社会的に規定されているという視点であり、ある程度の自律性を有した教育システムが成立しており、そのシステムに制約されながら、実践がつくられていく様相を重視するという視点である。これは教育社会学が近代教育システムという近代特有の学校制度を主たる対象にしてきたことと関わっている」と、松田洋介氏は述べている（10 ページ）。

しかし、このことは教師の教育実践を軽視することではない。「個々の学校は、それぞれの学校が置かれた社会的文脈にそくして変化する。そして、そうした個々の学校の変化が、教育システム全体の変化にいかに連動しているのか、自律しているのかを追求することは教育社会学の中心的な課題のひとつである」（11 頁 同）。「ローカルレベルでしばしば生起する文脈志向のペタゴジーが、（近代教育システムが基本にする）脱文脈志向のペタゴジーが支配する教育システムのあり方を変えること可能性も追求する」（14 頁、同）と、バーンステインの文脈志向ペタゴジーvs 脱文脈志向のペタゴジーという分析枠が興味深い。

さらに分析では、＜震災からの自由（震災の忘却）＞と＜震災への自由（震災経験の乗り越え）＞という 2 つの力学の葛藤という視点、子どものヴァルネラビリティやレジリエンスという視点が、全体の分析に貫かれ、その具体的な様相がエスノグラフィーデータで考察されている。

その他、興味深い分析が盛りだくさんで、多くのことを教えられる。東日本大震災からちょうど 9 年が経過した今—2020 年 3 月に一、読むのにふさわしい本でもある。

（2020 年 3 月 14 日）

1 3 「教育社会学の 20 人—オーラル・ヒストリリーでたどる日本の教育社会学」（東洋館出版、2018）

本書は、清水義弘先生、潮木守一先生、天野郁夫先生はじめ、教育社会学の諸先生や諸先輩の先生方の研究経歴や研究への思いが満載の本に感銘を受けた。

教育社会学は戦後に講座や科目ができ、伝統的な教育学の中で実証性を重んじ、研究を進めてきた新興の分野である。教育学が理想や実践を重んじるのに対して、教育社会学は現実や実証や批判的観点を重んじ教育実践への寄与があまりないように見える。しかし教育の現実を規定する社会的要因（階層、ジェンダー等）や教育組織の解明、教育の実態に基づいた政策的提言は、教育の理想の実現に欠かせないものである。

本書は主に日本の戦後の教育社会学の主に第 2 世代（第 1 世代が基盤を築いた後に活躍した世代）の 20 名の研究者の歩みをオーラル・ヒストリリーの手法で記録に残したものである。この手法は聞き手に恵まれると自分史以上に興味深い内容になる。自分では気が付い

ていない分野にも、聞き手の質問によって思いを走らせるようになるからである。学会 70 周年記念行事として第 3 世代の加野芳正会長（当時）のもとで吉田文と飯田浩之が責任編集者となり、学会の総力を挙げての聞き取りや編集が行われた。教育社会学の研究者のみならず、教育関係者、歴史研究者が読んで参考になる本である。

一つの新興の学問分野が市民権を得るまでには、既存分野との葛藤や戦い、個人や組織の並々ならぬ努力があったことが当事者の語りからわかる。個々の研究者が教育社会学という分野にたどりつくまでにどのような出会いや紆余曲折があったのかが示され、研究者のライフ・ヒストリーとしても興味深い。

高等教育研究としても読める。実学・政策重視の東京大学、理論研究や文化の濃厚な京都大学、高等師範の伝統の東京教育大学、文理の伝統の広島大学、地方国立大学の教員養成学部など、大学の出自や伝統が違ふとそれぞれの研究者の研究やその特質に差異を生じさせていることが読み取れる。

教育社会学研究の今後に関しては、柴野昌山京都大学名誉教授は「理論パラダイムの歴史性感覚」をあげ、新井郁男上越教育大学名誉教授は、「社会学的視点での研究、教員研修」の重要性を指摘し、深谷昌志東京成徳大学名誉教授は「子ども支援の実践家との連携が大事」と述べ、天野郁夫東大名誉教授は「教育現場を批判的に斜に構えて見るような教育社会学では現場の力になりえない。もっと教職・教員養成の問題にんえていかないといけない」と述べている。今後の教育研究と教育実践との関係を考える一書にもなる労作である。>

（「教育展望」2019 年 11 月号）（2019 年 11 月 11 日）

VI 日常生活の社会学

人は日常生活を送るなかで、いろいろなことを感じ考えている。それは人それぞれであるけれど、それを社会的にみたら面白いと思うことがしばしばある。ただそれは一般の人からみたら少し癖のある見方で（裏を読んだりする？）、慣れないとなかなか理解できなかつたり、皮肉や嫌味と感じたりする。私の読みを試しに読んでみてほしい。

1 スピーチについて

「スピーチをするときは、事前に何も用意せず、その場で思いついたことを話した方がよい」と同僚の先生が言っていたのが心に残っている。確かにその方が臨場感があり人の心を打つ話ができると思うのだが、「人の前に立ち頭が真っ白になり話すことが何も浮かばなかったらどうしよう」という心配が先に立ってしまう。パネルディスカッションの討議の場面で「あと 1 分後に自分が何か話さなければいけないのに何を話せばいいのか何も頭に浮かばない」という恐怖感を味わったことがある（でもその危機を間際で脱した満足感も大きいのだが）

先日、東書教育賞の授賞式があり、審査委員の一人として 3 分間のスピーチ（講評）をすることになっていた。私はその場で機転をはたらかせる勇気がなく、用意した原稿を読みあげるだけのつまらないものになってしまった。ところが、他の審査委員の人（谷川先生、鳥飼先生、赤堀先生他）を見ていると、簡単なメモを片手に、実にいいスピーチをしている人ばかりで感心しめげた。少し話し方を練習しなければ。（2019 年 2 月 6 日）

2 人との初対面の会話内容

人に会った時、どのような内容の会話をかわすのか。特に初対面の人との会話内容が気になる。

江藤淳の『アメリカと私』の中で、江藤淳がプリンストンで初対面に近いジャンセン教授に会った時の様子が印象に残っている。人は初対面の人とこんな難しい話をするのかと。

＜私たちは、アパートの話に移る前に近衛公の性格を論じていた。（中略）このような話は、私にとってと同様に、教授にとっても、わずらわしいアパートの話よりはるかに愉快的話題であるらしかった＞（『アメリカと私』講談社、1969 年、35 頁）

昔大学の武蔵大学のゼミの最初の時、皆に自己紹介をしてもらったが、その内容は出身地や出身高校、趣味などを話す学生が多かった。同じようなことを期待して、非常勤で担当した東大の大学院の演習で、受講生に自己紹介をしてもらったところ、個人的なプロフィール

の話は一切なく、「私の研究テーマは〇〇です。その内容は××です」という話が続き、さすが東大の大学院生と感心したことがある。

最近近所に住む 80 歳を過ぎた元大学教員の人と知り合い、「話に来てください」と言われ、その人の自宅を訪ね、2 時間ほど話をした。個人的なことをどの程度話したり聞いたりしていいのか戸惑いながらの会話であったが、お互いに知りたいのは、お互いの研究のことだったと思う。その方は、西洋史が専門のようで、ザビエルについて最近もかなり長い論文を大学の紀要に書いており、(それを私もあらかじめ読んでいって) いろいろ尋ねてみた。日本の近代化に関心があり、それをザビエルの来日を通してその起源を歴史的に探りたいと思ったとのこと (80 歳を過ぎてのその探求心に感嘆した)。「あなたの専攻する社会学では、近代化をどのようにとらえていますか?」と聞かれ、いきなりの直球の質問に私の答えはしどろもどろになった。次回は、きちんと勉強し用意して、会話に臨もうと思った。

(2020 年 3 月 12 日)

3 人との距離の取り方について

今ソーシャル・ディスタンスが言われ、人との距離を取ることが推奨されている。韓国ドラマをみていると、人々が頻繁に一緒に食事をしたり飲みに行ったりして、人との距離が近い場面が多く出てくるが、今私達は、ほとんど家族以外と食事をしたり飲んだりする機会がない。人との短い立ち話も、はばかれる雰囲気である。ただ、ネットでのコミュニケーションは可能だが、それも実際の人との接触の減少に伴い減っているように思う。このような中で、人と人との距離は、今後どうなっていくのであろうか。

また人との距離はどの程度が最適なのであろうか。快適な人との距離に関しては、国民性があり、アラブ人は西洋人より人との距離を近く取る傾向があり、その両者がビジネスで立ち話をしている時、アラブ人が西洋人をどんどん押して壁までいくという分析を読んだことがある。

性差や年齢差もあるであろう。また個人差も大きいであろう。特に初対面の人との距離をどのように取り、その後どのようになるかは個人差があるように思う。普通は、初対面と人とは最初ある程度の距離を取り、相手とやりとりしながらの、その距離を縮めたり遠ざけたりするのではないか。

私の場合、初対面の人との距離を最初通常より近くに設定してしまう傾向があるように思う。未知の人に出会ったのがうれしくて、勝手に親しみを感じてしまい、距離を近くに設定してしまうのである。人との関係は必ず、お互いを傷つけるので、相手が自分を傷つけた程度に応じて、相手との距離を取る (初対面の時に近かった人との距離がだんだん遠くなっていく)。このような人との距離の取り方に関して、後輩から「そのやり方はひどいと思います。それだと人はあなたから『傷つけた』と必ず恨まれるようになります。そして悪いのは傷つけた人ということになります」と言われ、びっくりしたことがある。

「間の取り方、出会いのマナーに 新しい作法」という記事が昨日の朝日新聞に載っていた。これから、人との距離は、コロナやネット社会の中で、どのように変化していくのであろうか。(2020年8月29日)

4 人への評価について

私たちは、いろいろなところで人を評価していると思う。その評価の高低は、どこに比較の基準を置くかで違ってくるし、もう一つはどの部分を評価するかでも違ってくる。

古今東西の一番優れた人と比較すると、ほとんどの人は低い評価になってしまうのではないか。社会学でいえば例えばM. ウェバーと比較すれば、現代のどんな優れた社会学者も低い評価になるであろう。

人を評価するとき、自分と比較することも大事だと思う。自分だったらどこまでできるかと比較して考えると、たいていの他人は自分より優れているとなるのではないのか(少なくとも私の場合は)。たとえば研究者の著書や論文を評価するとき、いろいろ欠陥が目についても、自分だったらどこまで書けるだろうと思うと、その著者を高く評価せざるを得ないように思う。自分のことを棚に上げての評価はフェアではないように思う。

(2019年4月24日)

5 欧米への憧れや幻想を捨てて

日本人にとって明治以来そして戦後も外国それも欧米へのあこがれは強かったように思う。政治の面でも学問や知識の面でもまた暮らしの面でも、日本に比べ欧米の方が圧倒的に近代化が進んでいて、見習うべき点がたくさんあった。欧米に渡航したり留学したりした人の持ちかえる見聞が本になり、それを読んで一層欧米へのあこがれが強くなった。

それがここに来て、状況が少し変わってきた。テロや犯罪が多い欧米に比べ、日本は安全で住みやすく伝統的に優れたものが多くあると、政府が日本賛美を推奨し、マスコミもそれに乗り、若い人の留学離れもすすんできた。欧米の生活や暮らしぶりを紹介する文献も、これまでは欧米先進国がいかに素晴らしいかという内容が多かったが、そうではない報告も増えて来た。たとえば、今ネットでよく読まれている「イギリス毒舌日記」、イギリス人と結婚した日本人が、イギリスの田舎町の日常や人々のことを描いている)を読むと、イギリスの実際の生活や人となりがよくわかる。それを読むとイギリス社会やイギリス人に対するあこがれは薄れていく。

アメリカのトランプ大統領の発言ややり方に呆れるだけでなく、それを支持しているアメリカ人が多くいることに、アメリカ社会やアメリカ人への幻想は薄れていく。だからと言って、日本賛美に走ることは危ないが、欧米への憧れや幻想を薄め、国にとらわれず、何が

正しいのかを見極めなければならない。(このことは、広く外国に目をやり、自国の生活や文化を相対化をすることの大切さを否定するものではない)。(2019年5月6日)

6 住むところを移動することについて

農耕民族と狩猟民族では、安定や心の安らぎの形態が違っていることであろう。農耕民族は一定の地域に定住し土地を耕し作物を育てる。狩猟民族は獲物を求め常時移動する。日本人は農耕民族であり、一箇所に定住してこそ心の安定が保てる。日本人も近代以降の社会では産業が農業から工業や第3次産業に移り、地域移動が常態となり、教育や仕事の為に故郷を離れざるを得なくなり、遠くにある「ふるさと」の歌を口ずさみ、心の安定を図るようになる。退職してふるさと(故郷)に戻る人もいるであろう。

インドや世界を長く旅して今は東京・千葉に住んでいる藤原新也も、ふるさとの九州・小倉のことにはよく言及している。小倉の少年の写真集を出したり、自身が出身の小倉の小学校で先輩として授業をしたりして、郷土愛が深い。その藤原新也が、仕事場に関して、興味深いことを言っている。

<「(その場所を) 味わい尽くした」「仕事でものを生産する場所は5年ごとに移る」「表現というものは熱量を使い、場というものは畜熱量を持っており、その熱量を使い切るのが5年程度と考えているからだ。そこをフルに使うと場が腑抜けになってしまう」>。

しかも、藤原の場合その場所から移動するときは、どんな気に入った家具も現捨離していく潔さがある。他の職業でも、藤原を見習うべきかもしれないと思った。同じ職場に長く務めるとそこがどれほど居心地のよいところででも、煮詰まってしまい、緊張感が薄れてしまう。何か新しいことをなすためには、勤務先を移り、新しい挑戦をする必要がある。農耕民族の日本人にはなかなか受け入れがたいが。

藤原の場合は、仕事場に関して言っていて、住むところ(の移動)に関しては何も言っていない。しかし狩猟民族やジプシーにとっては住むところの移動も当たり前になっている。村上春樹は引っ越し好きで、引っ越しはいろいろなものが一切チャラになりいい、というようなことを書いていたと思うが、これは作家として必要なことかもしれない。また村上春樹に狩猟民族の習性があるのかもしれない。(村上はアメリカはじめいろいろなところに住んで、新しい小説を書いている) (千葉を一度も離れたことのない私が、人の移動の大切さをいくら説いても、説得力はないが)。(2019年5月1日)

7 地域格差 一地域の「偉い」順

地域・地区をランキングするという試みは、昔からあったように思う。「東京23区の偉い順」という内容の本を昔読んだことがある。

昔、湘南快速電車を千葉まで延ばすという話が出た時、湘南の人はそれに反対したという話を聞いたことがある。グリーン車を連結した快速に重役のいない千葉方面の人は、乗る人がいないであろうと。東京への通勤時間が同じ時間がかかるころでも、土地の値段がかなり違い（湘南の方が高い）、沿線によって、乗っている人の階層や雰囲気（上品さ？）がかなり違う。

田園調布では相続税が高額で、子どもを祖父母の養子にして、相続対策をしていると聞いたことがある（子どもの苗字が途中で変わるの、ステータスになるという）。

上智の新生が自己紹介する時、東京、神奈川出身の学生は誇らしげに出身地域を表明していたが、千葉や埼玉出身の学生は少し出身を恥じているようなしゃべり方であったことを思い出す。

地名に詳しい谷川彰英先生（筑波大学名誉教授）は、少し前に千葉の地名の本を出し、これから埼玉の地名の本を出す予定にされているが、「高々2～300年の歴史しかない東京に比べ、千葉や埼玉には古い歴史があり、誇るべきものがたくさんある。千葉県民、埼玉県民はもっと自信と誇りをもった方がいい」と言われたことがある。

私の家の近くの県立犢橋〈こてはし〉高校に、かつて木村拓哉とマツコ・デラックスが在籍していたことがあるとのこと。千葉にも有名な芸能人がいる（いた）ことを誇りに思ってもいい。（2017年7月9日）

8 コラボ(総合芸術)の時代

今更ながら、今はコラボの時代だと感じる体験をした（7月1日。昼間）。それは埼玉県所沢市にある「角川武蔵野ミュージアム」の「ファン・ゴッホ展」を見た体験。

「角川武蔵野ミュージアム」は、「人間と自然が折り合ってきた悠久の大地、武蔵野の地にオープンするまったく新しいコンセプトの文化複合施設。KADOKAWAが展開する『ところざわサクラタウン』のランドマークとして位置づけ。アート、文学、博物のジャンルを超え、あらゆる知を再編成した、世界で他に類を見ないミュージアム」と、上記のWEBサイトに説明がある。

その特別展「ファン・ゴッホ展－僕には世界がこう見える」は、これまでの絵画展とは全く違うもので、絵と映像（動画）と音楽がコラボして、観客もその鑑賞体の中に組み込まれるという総合芸術で、絵画や芸術のイメージの変更を迫られた。また、そのミュージアムには、角川のブックストリートや本棚劇場（25000冊あり、自由に閲覧可能）もあり、本の装丁や置き方も大切だということを教えられた（TBS エンタメ情報でも紹介があった模様）（2020年7月4日）

9 地上波のテレビではなくネットの時代

映画やドラマの見方が今変わってきている。これまでは映画は映画館、レンタルのビデオ、テレビでの放送などで見るしかなかった。またテレビドラマは放送日に見るか、録画して見るしかなかった。今は映画やドラマはネット配信のものをテレビやPCで好きな時に見ることができるようになってきている。従来型の見方をしている人も少なくないが、後者のネット配信を体験してしまうと、その便利さ快適さに惹かれ、後者に切り替える人が多くなっていると思う。(もちろん従来型で、テレビの「朝ドラ」や「大河ドラマ」のような、テレビの番組の放映時間が、生活のリズムになり快適さを感じている人はいる)

制作側の手順も変わりつつある。これまでは劇場用映画を作りそれがDVD化される、あるいは定期的な時間配信の為にテレビドラマの制作(その後DVD化されるものもある)であったものが、今はネット配信だけの為に制作されるドラマや映画が出てきて、斬新な脚本や俳優起用で、時代の先端を行くドラマや映画が作られるようになってきている。一早くその方式を採用しているのが韓国ドラマだ。そのことを、韓国ドラマに詳しい藤脇 邦夫が指摘している。(2021年12月15日)

10 映画「天気の子」を観る

今日は、7歳と5歳の子(孫)と映画「天気の子」を観に行く予定にしていた。ところが、行く間際になって、子どもたちは、「行かない」と言い出した。仕方がなくひとりで映画を観に行くことにした。

「天気の子」を上映している映画館は、JR千葉駅から徒歩10分のところにあり、客席は120席程度の小さな映画館。入りは、4分の1程度で、小学生も少しいたが、主流は高校生の女子。年寄り私を除き一人もいなかった。以前にジブリの映画を観た時は、いい年の大人がひとりアニメ映画を見るのが恥ずかしくて親戚の小学生5年生の女の子を誘って行ったが、今回はひとりなので、存在をなるべく消すよう、息をひそめて観た。

映画の感想は、映像がきれいということと、退屈せず見ることができたというのが1番の感想。話は単純なので、4~6歳の子どもでも、楽しめるように思う。ジブリの映画のように、いろいろな解釈を考える必要もないので、子どもでもわかる。今の子どもにとって、ジブリの映画の映像は古く、この新海誠監督の「天気の子」の映像の新しさに惹かれるのではないかと感じた。ただ、幼い子どもと年寄りが共に楽しめる映画って、あり得るのかどうかかわからない。(以下、ネットの感想を少し掲載しておく。)

「映像はとても綺麗。とくに雨の描写は素敵だった」「前作に引き続き、素晴らしい映像美とRADWIMPSの曲がマッチして、何度見ても鳥肌が立ちます。ストーリーも「君の名は」に引けを取らない。とにかく見てほしい、そんな最高の映画です」「見知った景色がたくさん出てきて素敵すぎた。最後まで感動した。東京も雨も素敵に描いてくれて、心地よい余

韻に浸れる」「音楽も映像もとても良くて。話の内容も個人的には君の名はより天気の子の方が理解出来ました。」「人を強く想う気持ちってこういうことなのかと思わされた」「何といても映像描写がダントツに凄い！特に雨。思春期の純粹さと愚かさ、そして怖さが上手く描かれていました」(2019年8月22日)

11 フジロック

今年も7月下旬に、苗場で開催されているフジロックを見に行けずに残念。フジロックには、世界から一流のアーティストが集まるロックの祭典と聞いている。WEBサイトを見ると、その歴史と趣旨について、次のような記載がみられる。

<「自然と音楽の共生」を目指し、1997年夏、富士山麓・天神山スキー場で誕生。初年度は台風の直撃を受け2日目を中止したものの、翌1998年に会場を東京の豊洲に移して開催。1999年から苗場スキー場に会場を移し、今のフジロックの基礎が築かれました。そして今年、フジロックは20回目を迎えます。苗場の大自然に抱えられたそこには、音楽を中心とした特別な空間が生まれます。>

音楽好きの娘が、今年始めてフジロックに行き、次のような感想を寄せている。

<フジロックフェスティバル行きました！こんな素晴らしいフェスがあったのに今迄来なかったことにまず後悔(笑)。国内外の一流アーティストの演奏を真近で一日中見れるなんて最高！！一番初めて見た2CELLOSですでに感動して泣きそうになる。音楽が流れれば、自然と踊り出してフー！と叫んでる人ばかりで、まだ世の中には音楽が好きの人がたくさんいることに嬉しくて(多分CDが売れなくなっただけで、みんな音楽は聴いてるんだね)。生のライブみるとアーティストの息づかいとこだわりが伝わってきて、今迄知らなかったアーティストも魅力的でファンになっちゃった。会場にはたくさんのステージがあって、山奥の小さなステージでも「え？こんな素晴らしいアーティストがここで演奏してるの？」というレベル。ブルーノートで8,000円払ってみるようなアーティストが普通にそこらへんで演奏してる。好きな場所に椅子広げて座って飲んで食べて、自由な感じで聞く気楽さ。しかもジャンルはロックに限らず、レゲエ、ヒップホップ、ジャズ、電子音楽、ポップスと幅広い。大トリのRed Hot Chille Peppersは、普通にコンサートチケット取ったらアリーナ席取れないだろうと思うけど、ステージ目の前で見えるし！一時間半も演奏してくれて、いつもラジオで聞いてた有名曲をたくさん演奏してくれて、最高でした！昨日はお昼から深夜までライブ聞きっぱなし。こんな素晴らしいフェスは、世界に誇れるフェスだね！！

<I went to the biggest music festival in Japan called Fuji Rock Festival. It was so amazing to listen to great artists perform at various stages. Glad to hear Red Hot Chille Peppers play songs which I used to listen on the radio very often > (2016年年7月24日)

1 2 上海の大学生に東京案内する

上海の同済大学で教えている友人から、「教え子の日本語学科の学生が、東京で語学研修に2週間行っていて、暇な日が1日ある。可能であれば、どこか案内してほしいと依頼された。同済大学のサイトを見ると、教職員数4200人、学生数5万人で、世界ランキング28位の大学であることがわかる。

朝10時、宿泊先に近い「参宮橋」(小田急線)の駅に向かった。駅に現れたのは、女4人、男一人の5人の同済大学3年生の学生で、知的で感じのよいおとなし目の学生たちであった。皆日本がはじめてというのに、日本語が堪能。聞くと既に、新宿、横浜、秋葉原、江戸博物館は行って、出来たら、神田の古本屋街と東京大学に行きたいとのことであった。

そこで、最初に四ツ谷で降り、上智大学に寄り、イグナチオ教会をまず覗き、2号館17階からの四谷展望、図書館見学、学生食堂を回った。中国の首相も上智に学んだことがあるようで、親しみを感じたようだった。次に飯田橋で降り、後樂園(庭園)を見た。水道橋を経由して、神田の古本屋街に行った。そこで学生達は、谷崎潤一郎の評論や、額田の大君の本など、皆が日本文学の専門書を探すと言うので、専門店を回った。その後地下鉄で「本郷三丁目」まで行き、東大の赤門、安田講堂、三四郎池を見学した。東大が憧れの大学らしく感激していた(漱石の「三四郎」のことは皆、当然知っていて、興味深げだった。日本の学生で、漱石の「三四郎」を知っている学生はどれだけいるだろう)。その後、東大の小林雅之教授の研究室を尋ね、1時間ほど歓談した。話してみるとそれぞれともしっかりした考えを持っている。四人が大学院進学を考えていて、分野は、教育、文学、社会学、日中比較文化とのこと、一人は日本の企業で働きたいと言う希望で、八月にはインターシップで日本に来るとのことであった。その後、アメ横を通過して、御徒町で、居酒屋(土間土間)に入り、日本食らしきものに挑戦してもらった(焼き鳥も焼き魚も鍋も、美味しそうに食べていた)。その後、自力で帰れるというので、秋葉原別れた。

中国の学生(特にエリート大学の学生)は、日本の一時代前の学生に近く、遊びやおしゃれよりは、学問や将来のことを考え、地道に勉強する態度が身についていると感じた。神田の古本屋街や東京大学に興味を示し、そこに行った時嬉しそうにしているのを見て、現代の日本の学生との違いに愕然とした。一人の学生が必死に探していた「額田の大君」のことには私も無知だし、「忍ばずの池」の由来を中国の学生から教えられる羽目になった。

東京を案内したのは私だが、教えられ得るものが多かった。日中学生文化の比較をきちんとしたくなった。(2012年2月13日)

1 3 狩猟について

今年の大学入試センター試験の国語の問題にも出た河野哲也『境界の現象学—始原の海から流体の存在論へ』(筑摩書房、2014)を読んでいたら、狩猟のことが書かれている箇所

があり、食の問題への1つの切り口になるように感じた。また、狩猟は、その狩の場に溶け込むことが大事と書いてあり、人が何かを判断する時の有効な方法であることも知った。

狩猟は、農耕とは違い、定住せず、手つかずの自然(wilderness)に分け入って、動物を追ひ、食うか食われるかの戦いをひろげることだという。人間は猟に敗れ、動物(たとえば熊)に襲われ食べられてしまうこともあるという。狩猟は「飼育」とは違い、動物を殺すか自分(人間)が殺されるか対等な立場にある戦いであるという。生きるためには、相手を殺さざるを得ず、食うか食われるかの戦いが狩猟である。(動物との対等の)戦いであるのなら、「飼育」のような後ろめたさはない。殺して食べることはできるかもしれない、あるいは殺されても諦めがつく。

もう一つ感心したのは、狩猟はその狩の場に身を潜め、その場の全体状況を把握し感じ、時が来れば一気に行動を起こすこと必要があるという。農耕のように先を見こして計画してことを運ぶのでない。狩猟のように、全体の場の空気を読むというのは、受け身ではなく、ものごとをなす重要なことということ知った。上記のようなことが書かれた河野の著書の箇所を、少し転載しておく。

<「狩猟者は『食べる一食べられる』関係によって自己を自然の一部と感じる。獲物を取るために、環境に同化し、獲物の行動を模倣する。(中略)狩猟者は、自然と覚醒的に一体化し、その変化と流転を感知する。(中略)周囲環境に溶け込まねば、獲物に自分の存在を発見され、逃げられてしまう。」(84-5頁)。「猟とは人間が食料を得るという目的のために、ウイldネスで動物と対峙する行為である」(85頁)。「猟の獲物とは、人間以上の運動性能を持ち、稀少であるような動物である。猟は、高度な生命を自分の生命の資源として、その魅惑的な生命に死をもたらす」(86頁)。「獲物を捕るには、獲物と狩猟者が共に生きている環境を熟知し、獲物の意思を理解し、その行動を模倣して見なければならぬ」(87頁)。「猟は獲物を食べるために捕る。獲った動物を食べるのは、道徳的責務ですらある。殺した獲物を食べないのでは、獲物も狩猟者も生の意味を失うからだ。しかし食べられるのは動物の方とは限らない。相手がクマのような肉食獣であれば、人間が逆に獲物になる可能性もある」(90頁)。「狩猟者の志向性は、志向のない志向性である。それは環境の全変化への知覚である。獲物に変身し、周囲自然に同化した身体による志向性のない知覚と、解釈しない志向性、これが狩猟者の意識である。志向性のない志向性とは、存在に一切の意味を付与しないである。純粋な存在との邂逅としての志向性である。これがウイldネスでの猟する意識である」(97頁)> (河野哲也『境界の現象学』筑摩書房、2014)(2020年6月29日)

VII 文学の社会学

自分には文学的なセンスや鑑賞力があるとは思えないが、好きな作家や評論家の小説や文章を息抜きに読むことはある。その記録を残す。村上春樹、カズオ・イシグロ、江藤淳、藤原新也などのものを読むことが多い。学生にも薦めているが、どの程度読んでくれるのかわからない。

1 村上春樹・川上未映子『みみずくは黄昏に飛び立つ』（新潮社、2017）

村上春樹の小説が好きで、自分はハルキストと思っている人は、かなりいるのではないかと（それ以上に、村上春樹は嫌いという人も多いと思うが）。

村上春樹は、(ハルキストの)川上未映子との対談で、作家とファンの読者との関係を「信用取引」と言っている。「一生懸命時間をかけて、丹精を込めて僕が書いたものです。決して変なものではありませんから、どうかこのまま受け取ってください」という作家の依頼を、「わかりました」と信頼して受け取る関係が成立していること（134頁）。これこそ、ファンであり、村上春樹の場合は、ハルキストになるのではないかと。

この対談の中で、村上春樹が、イディアとかメタファーという『騎士団長殺し』の中でも重要な言葉を、独自の(勝手な)定義で使っていることが明らかにしている。(155頁)。『騎士団長殺し』の登場人物・免白さんが作家自身にも謎(ミステリアス)の人であることが示されている(204頁)。

昔書いた小説を読み返さないということも明言している(村上春樹の過去の小説のことは、対談者の川上の方がよく知っていて、村上が尋ねている)。

村上春樹の小説には、死後の世界がよく出てくるが、本人は死後の世界や来世があるとは信じていないとこのことの述べていて興味深い。

「僕は性格的に、何かを強く憎んだりとか、喧嘩をしたりとか、あまりしない人間なんです」「戦うという行為の中に、ニセモノの要素がどんどん混ざり込んでくるんです」(85～86頁)と、60年代末の学生運動を経験した村上春樹の姿勢が表明されている。

また、グールドのバッハの曲のピアノ演奏が、左右の手で全く独自に自己主張しているが、最終的に調和がとれるという村上の音楽解釈(それが村上の小説の手法にも取り入れられている)が披露されている(103頁)。

この本に関しては、川上は「村上さんは一貫して率直にあけっぴろげに、自身の創作について語っている。ここまで手の内を明かしているのか、と思うほどに」とコメントしている。このインタビューでは、村上春樹の「弱さ」や「いい加減さ」も披露されていて、それも含めて「信用できる人」だなどと思い好感を持っている私も、ハルキストの一人かもしれない。(2017年5月4日)

2 村上春樹『女のいない男たち』（文藝春秋、2014年）

村上春樹の小説が、1年ぶり(短編小説としては9年ぶり)に出版された。さっそく購入して読む。村上ワールドは健在だ。

「女のいない男たち」は、「女抜きの男たち」ではなく、「いろいろな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち」(p9)の物語。

男たちにとって、女性の存在はとても大きい。女性がいなくなった世界がいかに空虚な世界なのか、描かれている。村上春樹らしい恋愛小説である。

登場人物の女性は、皆美しく、知的で、思慮深く、魅力的だ。それに対して、村上春樹の男に対する目は厳しい。男には奥行き(教養)が、要求される。

「僕の奥さんは意志が強く、底の深い女性だった。時間をかけてゆっくり静かにものごとを考えることのできる人だった」、(妻の恋人は)「たいしたやつではないんだ。正直だが奥行きに欠ける。なんでもない男に心を惹かれ抱かれなくてはならなかったのか」

描かれている主人公の男たちは、素敵(素敵)な女性に去られてしまって、生きる意欲も失い、死んでしまうものまでいる。その女性が彼のもとを去った理由がよくわからない(つまらない男にひっかかったのかもしれない)。それでも、男は女性への思いと敬愛を捨て去ることはない。村上春樹は、すごいロマンチストだ。フェミニストと言ってもよい。

最後の2編(「木野」と「女のいない男たち」)は、トーンが少し違っている。「木野」は祟りの物語である。猫が去り、蛇が多数出没し、場所が欠けてしまい、悪霊に崇られ、それを払う旅に出る。

「女のいない男たち」は、主題のまとめのようになっていて、文章が村上春樹特有の修辞に充ちていて感心する。「ある日突然、あなたは女のいない男たちになる。その日はほんのわずかな予言もヒントも与えられず、予感も虫の知らせもなく、ノックもなく、」

(2014年5月11日)

3 村上春樹『猫を棄てる』（文芸春秋、2020）

村上春樹の話題の近著『猫を棄てる』を読んだ。いつもの分厚い小説とは違い、101ページの短いエッセイ、それも自分の父親のこと書いたものという、小説家村上春樹にしては異例なもので、少し驚いた。

村上春樹の父親は大正6年(1911年)京都の浄土宗の僧侶の家に生まれ、1933年20歳の時徴兵され、中国大陸の戦線に参加している。運よく戦死を免れ日本に帰り、京都帝国大学文学部文学科に入学し、俳句を嗜み、卒業後、甲陽学院の国語教師として勤務し、90歳で亡くなっている(母親も国語教師、96歳で存命)。村上春樹は、若くして結婚してから父との関係は疎遠になり、絶縁に近い状態で20年以上まったく顔を合わせていない。父が90歳で亡くなる少し前に会い、和解した。

本書には、村上春樹の父親の所属した軍隊やその周辺の日本軍のこと（主に中国でのこと）が、戦死者の数などの数字をあげて淡々と書かれているが、それを村上春樹が書いているということで、戦争の悲惨さが生々しく伝わってくる。もし父が母（母には婚約者がいたが戦死した）ではない別の人と結婚していたら、また父親が戦死していたら、自分が生まれなかつたし、村上春樹という作家も誕生しなかつたと書いている。また、下記も、同じような村上の歴史観が表明されている。

「我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の、名もなき一滴に過ぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴だ。しかしその一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある。一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある。我々はそれを忘れてはならないだろう。たとえそれがどこかにあっさりと吸い込まれ、個体としての輪郭を失い、集合的な何かに置き換えられて消えていくのだとしても。いや、むしろこう言うべきなのだろう。それが集合的な何かに置き換えられていくからこそ、と」(96-97頁)

この本の感想はいろいろなところに出ているのだと思う。1つだけ、転載しておく。

<村上春樹さんの『猫を棄てる』を読んで、いちばん衝撃を受けたことだ。これまで避けつづけてきた“事実”が、いまの私を存在させているなんて、思ってもみなかった。いや、思いたくなかつたんだろう。過去から繋がれて、繋がれて、ここに存在していることはわかっているものの、悲しいできごとや失われた命の上に、自分が立っているなんて、考えたくない。つらすぎる。でも、それも受け入れなければならない事実であり、知らなくてはいけないことなのだろうと思う。そのうえで、さらに次へと繋いでいかなければならない。背負わせていかなければならないのだ。人間はとんでもない歴史と使命を抱えてしまったものだと思う。>

『猫を棄てる』（文藝春秋）の中に、「我々は結局のところ、偶然がたまたま生んだひとつの事実を、唯一無二の事実とみなして生きていただけなことなのであるまいか。」(96頁)と書き、偶然に人に出会い少しの接触はあったがそれ以上の関係は選択しなかつた人（女性）に関することを、『1人称単数』（文藝春秋、2020）の中に多く書いている。

そこにはその人との関係が続けていたら、今頃どのようになっていたのであろうかという、偶然への思い（惜別？）も込められているように思う。このように齢をとってくると、昔を思い出し、あの時あのような偶然の選択がなかつたら、別の人生があつたのではないかという思いが生まれるように思う。(2020年7月20日)

4 カズオ・イシグロ・土屋政雄訳『私を離さないで』（早川書房、2006年）

もう一度読んでみたい小説のひとつにカズオ・イシグロの『私を離さないで』があることは確かである。何か心の琴線に触れるものがある。ただそれは哀しさが基調になっている。加藤典洋の『世界をわからないものに育てること』（岩波書店、2116）の中に、『私を離さないで』論がある。その中の指摘に、考えさせられることが多くある。特にマージナルな立場

についての言及になるほどと思った。

イシグロは 5 歳のときに親の都合でイギリスに渡り、二つの国の言葉の間に宙釣りになっている。母語をもたない小説家であり、言語的にマージナルな立場にある。

彼の第 2 作『浮世の画家』の主人公の小野は、戦争中に戦争を賛美する絵を描き、戦後にそのことを肯定はしないが、その当時はそのように考える以外に方法はなかった、とその不可避性を信じている。それは「戦前の戦争目的をいまもなお信じるという国家主事者たちとも、これを否定する戦後の民主主義者たちとも違っている」(162-3 頁)。(これは、加藤の『敗戦後論』の立場との共通性がある)

「私を離さないで」に出てくるクローン人間は、「健常者と完全に同等というほどの能力もたぶん、もたされていない。しかし読む者は、より弱く、偽物の生を生きる疑似人間の方が、本物の人間よりもディーセントで、人間的ですらある、という不思議な読後感をここから受け取る。『人間』であることは、必ずしも『人間的』であるための、必要条件ではないようだ」(167 頁)とあるように、クローン人間は人間に対してマージナルな存在であるが、繊細で、健気で、純粹で、心打たれる。

このように言語的にマージナルな作家が書く、日本の敗れた戦争にマージナルな意識をもつ主人公、人間に対してマージナルな存在のクローン人間など、マージナルな作家がマージナルな登場人物を描いていて、何かに同一視(アイデンティファイ)している人間にはわからない新しい、深い問題を探求している。それは、主流や既存の勢力の以上の抵抗性や戦闘性をもつことがある、という加藤の解釈は興味深い。「私を離さないで」には、ネットで見ても、さまざまな感想、書評がある。再読して、いろいろ考えてみたい。(2020 年 4 月 2 日)

5 カズオ・イシグロ・土屋政雄訳『日の名残り』(中央公論社、1990 年)

カズオ・イシグロの著作に関しては、『日の名残り』が最高傑作という人が多い。そこで私も読んでみた。『わたくしを離さないで』を読むのに 1 か月かかったが、今回は 3 日ほどで読み終わった。

イギリスの執事の話と聞いていたので、イギリスの貴族に仕える模範的な執事の話であり、そこには伝統的な英国貴族の高い徳と今は失われた執事という仕事の品位が描かれている小説と思い読みすすんだ。最初の方はそんな感じであったが、後半は必ずしもそんな感じではない。逆に伝統的な英国貴族とそれを無批判に信奉する執事に疑いの目を向けるような内容としても読めると思った。(早川文庫の丸谷才一の「信頼できない語り手」という解説参照)

ネットでみると、いろいろな感想や解説が寄せられている。いくつかを転載する。
<読んでいる間、姿勢を正さずにはいられませんでした。英国紳士に仕える 1 人の執事の佇まいに感動しました。時代の変化を迎えつつある 1930 年代のイギリスでは、徐々に戦争のニオイが色濃くなりつつあります。逼迫した情勢が続きますが、執事のステイブンは

「品格」を保ち、ご主人により良いサービスを提供することを任務とするのです。私的な感情は一切受け付けず、威厳を極め続けた偉大なる執事の姿に、圧倒的な忠誠心を感じます。父の死や同僚の結婚にも一切動揺せず、規律を貫き続けた信念に、英国執事の究極のサービス精神を学びました。><執事としての品格というものを常に考え、それをしっかりと行動に表してた、まさに執事の鏡だったステーブンス。しかし、そうしたプロ意識が主人に物申すことを恐れ、ミス・ケントンとのラブロマンスを遠ざけてしまった。今回の旅を終えるまで、ずっと後悔していたのは、紛れもない事実です。><この小説の主人公は「信頼できない語り手」だ、という示唆によって氷解していくスリリングで痛快な瞬間。小説を読むことの面白さが凝縮された経験だった。ステーブンスが「信頼できない語り手」であるという前提に立って、頭からこの小説を読み返してみると、他にも様々な読み方ができるということに気がつく。2度目に読んだ時には、1度目に読んだ時の感想や感じたことがグラグラする感覚を味わったが、それでもストレートに感動的な描写やセリフがあることがまた、この本を魅力的にしている。最後に2つ、そのセリフを引用。1つ目は、「そっち側からは村の眺めが見事でしょう」(p300)というセリフ。もう1つは、「私は選ばずに、信じたのです」(p350)と告白する瞬間。本当に味わい深いセリフだ。これらのセリフに出会っただけでもこの小説を読んだ価値があった。> (2018年2月15日)

6 カズオ・イシグロ著・土屋政雄訳『クララとお日さま』(早川書房、2021)

内容も訳もよく読み易い本だが、私の読書力が落ちていて、440ページ読むのに3日もかかった(その間、アジサイを見に行ったり、卓球をしたり、ズーム会議に参加したりはしたが)。カズオ・イシグロの著作の翻訳(日本語訳)のある8冊目の本のようなのだが、『私を離さないで』や『日の名残り』との共通点も感じた。誰かに仕えるロボットや執事のように、自分の分をわきまえた謙虚な生き方が描かれている。(人間以上の)、人工的なロボットの純粹さ、健気さに、そして哀しい結末に心打たれる。いろいろなことを考えさせられる小説だが、その余韻に浸りながら、新聞やネットに載った感想を読んだ。共感したものを転載する。

<型落ち「人工親友」の献身と信仰/ ノーベル文学賞を受賞し、世界的な作家の仲間入りをしたイシグロの6年ぶりの新作は、高度な人工知能を搭載した人型ロボットが語る近未来SF小説だ。/ ショートヘアで浅黒い肌のクララは、売れ残りの型落ちながら、ずば抜けた洞察力と高い共感力を備えている。買ってくれたのはジョジーという10代前半の少女とその家族。彼女の「人工親友」としての使命をまっとうすべく、クララは献身的に尽くし始める。/ 病弱な少女とアンドロイドの話。人工親友ロボットのクララはずば抜けた観察力と学習意欲で日々成長していく。病弱の少女に優しい心で接して家族同然の関係を築いていくが、少女の成長により不要になると物としてあつかわれてしまう。前作の「わたしを離さないで」と同じで悲しくなる。病気の娘のアンドロイドを作って代わりをさせたり、貧富の差による社会の細分化など問題が提起され読み返したくなる。/ 《向上処置》を受けた子供の将来は安定し、受けていない子供は大学進学さえ難しい世界。処置の

ために病弱になったジョジーのもとに来たAF（人工親友）クララは、常にジョジーのための最善を考え行動する。一方、母親は娘が亡くなってしまった場合のコピーとしてクララを育てようともくろんでいる。表紙も文章も優しい児童文学の様相だが、実は奥深く切ない内容だった。著者の「私を離さないで」や、亡くした子供の身代わりロボットとして作られた「鉄腕アトム」のことを思い出した。どこまでもまっすぐに皆の幸せを願うクララの清らかさが悲しい。/ 母親、父親、メラニアさんやリックと同じくらいジョジーのことを思い、誰よりも正しくジョジーの幸せを願うクララはとても優しかった。クララの思考は常にジョジーに尽くすためのもので、人のちょっとしたサインによく気づいたり、隅々まで配慮された発言をしたり、AFとして作られたクララは大成功だったと思う。この本を読んでいたら、クララのように不純さのない正しい思考ができるのがAIなのかもしれなくて、人類滅亡を企むAIだとか陰謀論だとかをおもしろおかしく想像するのが人間であると較べてしまった。今後世界はどちらに向かうのか（<https://bookmeter.com/books/17416961> より転載）

7 宇佐見りん「推し、燃ゆ」（『文藝春秋』 2021.3月号）

第164回芥川賞を受賞した宇佐見りん「推し、燃ゆ」を読んだ。不器用で何事にもうまくいかない（家庭に問題があり、高校にも適応できず退学する）少女がアイドルへの「推し」で、自分の肉体や心の痛みを浄化する物語である。

（アイドルへの）「推し」というのは、「片思い」の一つのバリエーションかもしれないと思った。多田道太郎が言うように「それはオリジナルの向こうに、オリジナルを超えて自分だけの夢をみることである。自分だけの夢、自分だけの『オリジナル』を夢みることである」（『管理社会の影』（日本ブリタニカ、1979年）。もし、ほんとうのオリジナルである「推し」の彼が目の前に現われ「付き合おう」と言われれば、彼女は「それは違う」と言うであろう。（以下、宇佐見りん「推し、燃ゆ」より一部転載）

「見返り求めているわけではないのに、勝手にみじめだと言われるとうんざりする。あたしは推しの存在を愛でること自体が幸せなわけで、お互いがお互いを思う関係性を推しと結びたいわけではない。たぶん今のあたしを見てもらおうとか受け入れてもらおうとかそういうふうには思っていないからでなんだろう。あたしだって、推しの近くにずっといて楽しいかと言われればまた別な気がする。もちろん、握手会で数秒言葉をかわすのなら爆発するほどテンション上がるけど。携帯やテレビ画面には、あるいはステージと客席には、そのへだたりぶんの優しさがあると思う。相手と話して距離が近づくこともない。一定のへだたりのある場所で誰かの存在を感じ続けられることが、安らぎを与えてくれるということがあるように思う。何より、推しを推すとき、あたしというすべてを賭けてのめり込むとき、一方的であるけれどもあたしはいつになく満ち足りている」（『文藝春秋』 2021.3月号、376頁）

その文章は、「確かな文学体験に裏打ちされた文章」（山田詠美）、「リズム感の良い文章」（松浦寿輝）、「文体は既に熟達しており、年齢的にも目を見張る才能」（平野啓一郎）、「レ

ディメードの文章の型を踏み外してゆくスタイル」(島田雅彦)と、芥川賞選考委員から絶賛されるもので、読んでいてそのリズム感が心地よい。「寄る辺なき実存の依存先という主題は、今更と言ってもいいほど新味がなく」という平野啓一郎の批判もあるが、芥川賞としては久々のこの賞にふさわしい、今後に期待される新人が選ばれたと思う。(2021年3月6日)

8 遠藤周作『結婚』(講談社、1962年)

暇で、手元にあった小説を読んだ。読んだ本は遠藤周作の『結婚』。遠藤周作(1923-1996)が40歳前後の時に書いたもので、今から60年くらい前のもの。その頃はお見合い結婚が多く、堅実な堅物な男とお見合い結婚した女性が、真面目な夫に生活の安定を感じながらも、何か物足りない、若い時の淡い恋(初恋の相手が徴兵で戦地に赴く前の思い出等)を思い出すというものが多い。一つ、気になった短編があった。

それは、5話の「夫婦の損得」。学歴もなく背も低くあまり見栄えもしない平凡な男が、姉の持ってきた田舎出身の同じく背の低い、目鼻立ちのぱっとしない娘を嫁にもらい、結婚生活を始めるのだが、「こちらはお前を食わしてとる(のに)、お前は気がきかん」と妻を叱ることが多かった。妻は、叱られるたびにますますおどおどとして不器用になり、黙ってしまう。そして、妻は1年目は木の根のように丈夫だったが、2年目から熱を出し始め、医者に行くと「白血病」と診断され、入院して1年余りで亡くなってしまった。

男の思いは、「結婚にはツキがなかった」「妻の病気によって妻から何もサービスを受けぬ夫になってしまった」「なんのために結婚したのかわからぬ」というもので、姉からも「本当のことを言えば、(彼女がなくなって)ほっとしただろう」と言われるものであった。妻の死後、たまたま次のような妻のメモ書きを見て、男は驚き、悔いたという話。その妻のメモは、次のように書かれていた(一部転載)。

「私はあなたに何かしてあげたいけれど何もできない。だから、私は今の自分の病気が、もしあなたがいつか病気になった時の身代わりであるようにいつも神さまや仏さまにお願いしているのです。あなたがその時、苦しまないように、私にもっと、もっと痛さや苦しみを与えてくださいと祈っているのです。それが、それしか、私はあなたにしてあげられません。でも夫婦なのですもの。それだけでも私はうれしいので…」

夫が「この結婚によって受け取るものがなく損をした」と感じていることを知っていた妻が、そのような損得勘定の打算的な夫に対する思いが、(普通考えもつかない)深い愛の気持ち(祈り)だということある。

これは著者の遠藤周作がカトリック信者だということと関係しているのであろうか。この妻の思いは、遠藤周作の『沈黙』や『私が捨てた女』に出てくる登場人物に通底するもので、宗教的なものであると思う。同時に、江藤淳のいうような日本的な「母」の文化(『成熟と喪失』)もそこに感じられる。(2021年4月12日)

9 江藤淳『アメリカと私』（講談社、1969年）

近頃若い人が海外旅行や海外留学することが少なくなっていると言われる。それを補う意味でも、旅行記や海外体験記を読めるのはいいことであろう。

今から約半世紀も前だが、『なんでも見てやろう』（1961年）という小田実の海外旅行体験記が大変話題になった時がある。若さにものを言わせての好奇心いっぱいの冒険旅行の魅力を、小田実が自分の体験から書いたもので、「何でも見てやろう」という当時の若者の向こう見ずな元気さは、今こそ見習うべきものかもしれない。その本のせいで、日本でも世界を身軽に旅行する若者が増えた。

一方、アメリカやヨーロッパではなく、インドを中心に長期の旅行をし、写真も撮り、何冊もの紀行記を書いたのが藤原新也である。そのアジアを長く旅行していた写真家の藤原新也が、アメリカを7か月かけて車（モーターホーム）で回った紀行記『アメリカ』（1990、情報センター出版）は、一味も二味も違った紀行記になっている。アメリカに関しては、短期の観光旅行記や長期の滞在の記録は多くあるものの、アメリカの文化や人々の生活を、7か月という中期の長さの中で、アジア視点も入れての考察は、新鮮で衝撃を与えるものであった。

さらに、『なんでも見てやろう』というおりた観察者の視点に無理がある」と、小田実らの旅行記を痛烈に批判したのは、評論家の江藤淳である。

江藤淳が、奥さんと一緒にアメリカのプリンストン大学に滞在した若い時（2年間、日本文学担当の講師として大学で教えている）のことを書いた紀行記『アメリカと私』（講談社、1969年）は、戦後のぬるま湯のような中で、まったりと生活していた日本人、そして日本の文壇にも衝撃を与えた。

作家の城山三郎は、次のように書いている「実に堂々と肩を並べ、一人の職業人として、そして紛れもない一人の日本人として生き、語り、働いておられる感じです」（「江藤淳への手紙」『新潮45』2016年1月号、pp157～158）

江藤のアメリカでの生活は、旅行者としてではなく、生活者として、強者の論理が働くアメリカで、それに負けずに、日本人としての誇りをもって生き抜くことである。その苦難のエピソードが随所に書かれている。世の中で生きるということは、このような厳しい生存競争の中で生き抜くことなのであるということ、アメリカでの体験から伝わってくる。

敬愛大学の学生を見ていると、のんびりした住みやすい千葉の地に生まれ育ち、このままのんびりした生活が送ればいいと思っている節を感じる。若い時は、小田、藤原、江藤らを見習って、自分を厳しい環境に置くことも大切である。（2016年2月3日）

10 吉本隆明の本で印象に残っていること

私も若い時、同時代の他の人と同様、吉本隆明の著作をたくさん読んだ。今その中で印象

に残っていることを思い出すと、3つくらいのことがある。

1つは、吉本が壇の上から講演をしていたいたら、下でヤジを飛ばす輩がいた。吉本は腹に据えかねて壇を降り、その輩と殴りあったというエピソードである（確か『情況』）。ここには当時の大学教授など知識人が偉そうなことを壇上から述べるだけで、壇を降りて行動しようとしないうる批判が込められていたように思う。

2つ目は、雑魚取りの網を持つもの（「雑魚・ザコ」）が、身を弁えず大きな魚を獲ろうとする愚かさを指摘していたものである（多分「著作集」のどこかあった）。有名になった芸能人が偉くなった気で、政治的社会的な発言をする愚かさを批判してのことだと思う（今はそれが当たり前になっているが）。

3つ目は、芥川龍之介の自殺が時代思想的なものではなく、作家として生き詰まった文学作品的な死であるという指摘。芥川は、抜群の能力により出身の下層階級から上の階層に飛翔したが、育ちと違う階層の文化に耐えられず、創造力が枯渇して地に落ちたという解釈である。

第3のことが一番心に残っていて、私は教育と社会移動のことを学生に説明する時、使ったりしているが、最近読んだ本で全く同じところ（芥川の出身階層をめぐる葛藤）に注目している人がいて驚いた（鹿島茂『吉本隆明1』平凡社、2009）。育ちや育った時代がほぼ同じなのであろう。

ただ、一つ気になるのは、このような時代的な出身階層の話は、今の若い世代に、うまく伝えられないのではないかということである。今は格差社会と言われながら、皆ある程度豊かな中流の生活を送っている中で、社会階層の移動や葛藤の話はピンとこないのではないかとも思う。

吉本隆明の文章を読んでいていつももう一つ感心したことは、ものごとの核心を短い言葉で的確に言い当てることである（キャチコピーのよう）。たとえば、「倫理的な痩せ細り方の嘘くらべ」*という言葉など。これは「良心と倫理の痩せくらべをどこまでも自他に脅迫しあっている」左翼を痛烈に批判した言葉だと思う。これは、今でも左右に限らず、またマスコミでも多いように思う。

*「着たきりスズメの人民服や国民服を着て、玄米食と味噌と食べて裸足で暮らし、24時間一瞬も休まず自己犠牲に徹して生活している痩せた聖者の虚像が得られる。そしてその虚像は民衆の解放のために、民衆を強制収容したり、虐殺したりしはじめる」（『情況へ』宝島、1994＝鹿島 pp.417-9）（2020年1月13日）

1 1 藤原新也著『アメリカ』（情報センター出版局、1990）

実際に自分で海外に出かける前に、先人の海外旅行記を読むのは役立つことが多い。外国旅行記は、短期の印象的なものから、長年外国に住んでのその生活や文化の紹介まで、いろいろなものがある。

その中で、写真家藤原新也の『アメリカ』（1990年）は一風変わったもので、衝撃を受ける。その特徴は、①写真家藤原新也のその本質を瞬時に見抜く感性による記述 ②7ヵ月という中間的な長さで見えるアメリカの特質 ③長くアジアを旅行してきた視点から見るアメリカである。藤原新也は、後日アメリカ旅行に関して、次のように説明している（2016年8月7日、朝日新聞）

「アジアからアメリカに向かったのは世界の構造を知るうえにおいて必然的な旅だった。寝泊まり出来るモーターホームで7ヵ月間をかけ全米を一周した」「アメリカではきのうのことさえいつの間にか忘れていて、初めて旅でメモを取った。存在感の希薄な文化だということ」「世界の快樂原則はここからやってきているということ。たとえばネズミは、かつてペストが猛威をふるった西欧でもっとも忌むべき動物です。そのネズミさえミッキーというクリーンで親しみやすいキャラに変換していく」「歴史が浅いから掘り起こすとすぐに根っこが現れてくる。紀元前からの歴史があるアジアの濃い世界と違い、映画のセットみたいに背景もルーツもない。逆にそこが非常に面白かった。」「市井の一人ひとり日本人より他者に対する思いやりがある面もある。けれども、国家になると二重人格者のように性格が一変する不思議な国」

日本人にとってアメリカは特別な国である。原爆を落とされ戦争に負けたにも関わらず、戦後の復興を手助けされ、その物質的な豊富さには憧れをいだき、さまざまな分野でモデルにしてきた。その実際のアメリカを、藤原は7ヵ月に渡りモーターホームで全米を移動し暮らし、鋭く豊かな感性で人々の様子や文化を観察している。その文章は、写真家のものごとの本質を一瞬にして切り取る感性と、長くアジアを旅行してきた比較の視点と、藤原の独特の柔軟な人間性に裏打ちされ、読んだものに感銘と衝撃とを与えるものになっている。（2019年4月8日）

1 2 学生に勧める1冊の本

これまで仕事や趣味で多くの本を読んできたものからすると、1冊の本を勧めるのは難しい。これは全く私の好みになるが、小説で言えば、夏目漱石、古井由吉、村上春樹、評論で言えば吉本隆明、江藤淳、藤原新也、社会学で言えば作田啓一、上野千鶴子などの本がお勧めである。

ただ、これらの人の名前を全く知らない学生諸君も多いのではないか。こども学科の1年生の授業の中で、上野千鶴子の名前を知っている人を尋ねると皆無であった。氏はジェンダ

一研究では日本の第一人者であるし、社会学者としても優れ、マスコミにもよく登場する。それだけ、大学教師と学生の間には、世代ギャップもしくは好みのギャップがある。そのギャップを埋めるべく、1冊の本を勧めるのは難しい。

一言「右の誰かの本を1冊でも読んでほしい。どれも面白いはず」と言っておきたい。たとえば、江藤淳の『成熟と喪失“母”の崩壊』（講談社文芸文庫）を読んだ時の衝撃は忘れられない。日本の親子関係や日本文化に関していろいろ考えさせられた。その本の解説で、上野千鶴子は「涙なしでは読めなかった」と書いている。

そこで、今回は、1冊の本を勧めるのは諦め、私がグループのメンバーと一緒に書いた本をあげておきたい。本の題は、『キャンパスライフの今』（武内清編、玉川大学出版部、2003年、2100円）。

「授業、デート、アルバイト、サークル・・・etc,データで読む平成版当世学生気質」「学生にとって大学は単に知識を習得する場であるだけでなく、さまざまな体験や出会いの場である。学生達は、授業、ゼミ活動、サークル活動、アルバイト、交友、異性交際、読書、情報行動などによって、高校時代にはできなかった多種多様な体験や活動をし、社会性やアイデンティティを形成している」というのが、本の内容を紹介した帯の言葉。

大学のキャンパスライフの様子を19大学の学生2130名の回答から教育社会的に考察したものである。学生諸君の今のキャンパスライフと突き合わせて読んでもらおうと、キャンパスライフや自己分析に大いに役立つと思う。高校生が読めば、大学選びや大学生活への予備知識になる。「新入生の大学への適応」「大学生にとっての勉学の比重」「学生はなぜ授業中私語をするのか」「体育会系部とサークルの違い」「恋愛の大学デビューは可能か」「合ハイから合コンへ」など、キャンパスライフを送る上で重要なテーマに関して、実証的なデータもまじえて考察し、キャンパスライフのあるべき姿を探っている。(2012年1月21日)

1.3 敬愛大学教育こども学科の1年生に薦める本

私の授業を遠隔で受講している新生に、学生生活を送る上で参考になる本をいくつか推薦した。

今の大学生はあまり本を読むことはないと思うが、コロナで自宅に籠ることの多い今の時期こそ、読書のチャンスと思う。読書は能動的な行為であり、流れてくる情報を受け身で受けとめるテレビ視聴などとは違う、達成感がある。

1 柴田翔『されどわれらが日々』（1964年、文春文庫）

半世紀以上前になりますが、私たちが大学生になった時の必読書でした。恋愛や学生運動がテーマで、未知の世界のことで、ドキドキして読んだ覚えがあります。今は古すぎるかもしれませんが、かえって新鮮かもしれません。この作品は芥川賞を受賞してものです。その後それぞれの時代を象徴する青春小説が、芥川賞を受賞しています。庄司薫『赤ずきんちゃん気を付けて』（1969年）、三田誠広『僕って何』（1977年）、田中康夫『なんとなくクリス

タル」(1980年)と続きます。

2 夏目漱石 『三四郎』

これはもっと古い明治の時代の話ですが、地方から東京に上京してきて大学生活を始めるウブな三四郎の大学での生活や失恋の話で、今読んでも感銘することも多いことでしょう。名作です。夏目漱石には、失意の時に読むと、心慰められる作品が多くあります。(三四郎は青空文庫で読める。https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html)

3 重松清 『きみの友だち』(新調文庫)

これは私が敬愛大学の学生からすすめられて読んだ本で、読みやすく、その後私は重松清の本を何冊か読みました。小学生が主人公で、友人関係やいじめのことが、子どもの視点から書かれている小説で、教育学や心理学の本以上に、子どもの心理がわかると思いました。

4 村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋)

高校時代の5人の友人グループ(男3人、女2人)の高校生活とその後を描いたもので、主人公のつくると君がなぜ他の4人から排除されたのかの謎解きのミステリーの話で、一気の読める本です。村上春樹については、人により好き嫌いがあると思いますが、今日本で一番有名な作家なので、1冊は読んおきたいものです。初期の短編も読みやすくミステリアスですし、エッセイはおしゃれで心温まります。

5 カズオ・イシグロ 『わたくしを離さないで』(ハヤカワ文庫)

ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの代表作です。舞台はイギリスの全寮制の学校生活とその後ですが、人とは何かを深く考えさせられます。少し哀しい話ですが、心に残る小説です。

その他にお薦めしたい本はたくさんありますが、皆さんに一気にお薦めしても、困惑されるだけだと思いますので、今回はこれで止めますが、1冊でも読んでいただくと嬉しいです。(学校や大学生活に関する本ばかりになりましたが)(2020年5月17日)

14 小説やドラマから学ぶ

新型コロナ禍の自粛で、本を読んだりドラマをみる時間が増えている。最近読んだ本や見たドラマから、教育のこと考えてみたい。

村上春樹著『猫を棄てる』(文藝春秋、2020)には、村上の父親が20歳の時徴兵され、中国大陸の戦線に参加したことが書かれている。村上はその責務も感じている。「我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の、名もなき一滴に過ぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴だ。しかしその一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある。一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある」と。

カズオ・イシグロ『クララとお日さま』(早川書房、21)は、高度な人工知能を搭載した人型ロボットが語る近未来SF小説である。人工親友ロボットのクララはずば抜けた観察力と学習能力で、病弱の少女に優しい心で接し、少女の成長を助ける。少女が成長し不要に

なり捨てられてしまう。人工ロボットの献身的な生き方が描かれ、その純粋さ、健気さに、そして哀しい結末に心打たれる。

韓流ドラマ「梨泰院クラス」には片思いがたくさん描かれている。ヒロイン・イソの相手に対する片思いは、彼を傷つけるものに対しては身を挺して守り、敵を殲滅するという強い意志に基づいたものであり、動物の母親が子を守る姿に似ている。その思いが相手に伝わらないのは悲しいが、そのことで気持ちが怯むことはない。

ドラマ「秘密の森」は、韓国の派閥や情実がはびこる検察・警察組織の中で、脳の手術で感情を欠き認識能力のみが卓越した主人公が、正義感で犯罪を摘発し、組織の腐敗を暴いていく物語。

これらの小説やドラマから、個人の尊厳、過去の歴史を引き継ぐ責務、献身的な生き方、無償の愛、正義感など、道徳教育に通ずる内容を読み取ることができる。

これらは混濁とした現実の政治や社会にはみられない現象である。生き方のモデルや価値として子どもや青年たちに示したい。(内外教育「ひとこと」2021年10月5日)

15 本の解説について

書評や解説を読んでから元の本を読むのでは、先入感ができて純粋にその本を読むことにはならないのかもしれない。一方、解説や書評の積極的な意味もある。

社会科学の大層な本を翻訳で読もうとしても、難解で、途中でめげてしまうことが多い、それが解説に導かれてポイントを掴むことができれば、読み終えることができる。

また、解説や書評(文藝批評も)は、原本とは違った独自の価値を有しているともいえる。小林秀雄、江藤淳などの文藝批評は、小説とは違った独自の世界を描き、独自のジャンルを作り出している。

江藤淳の『成熟と喪失—母の崩壊』という名著の中に、小島信夫の『抱擁家族』に関する叙述の部分がある。日本の夫婦関係の未熟さと滑稽さを考察した内容だが、その分析の巧みさに感心させられる。そして夫婦の関係について深く考えさせられる。それに導かれて原典(小島信夫『抱擁家族』)を読むとあまり面白くない。このように、小説より、その批評の方が優れていることがある。

後輩の渡部真氏が、森鷗外の「半日」についてブログで解説している。夫婦関係の難しさを的確に指摘している。そこで鷗外の「半日」を読んでみたが、それほど、私は感心しなかった。渡部真氏の解説がそれだけ優れているのであろう。(2013年1月4日)

VIII 韓国ドラマ、映画

私はNetflixでたまたま韓国ドラマ「梨泰院クラス」を観て、韓国ドラマに嵌まってしまった。ただ多くの年配者のように韓国ドラマの「時代物」は見えていない。見るのは現代の韓国を舞台にしたドラマだけである。

最初は日本と韓国の違いに目がいていたが、多くの韓国ドラマを観るうちに、韓国の風景や人が日常になり、異国のドラマという感じがなくなっていった。

感銘を受けたドラマのいくつかを、ネットに出ている感想も含めて記録に残す。

1 何回も観たい韓国ドラマ

何回も繰り返し観たくなる韓国ドラマをあげるとすると、次の6つをあげることができる。「ある春の夜に」(ハン・ジミン、チョン・ヘイン主演)、「よくおごってくれる綺麗なお姉さん」(ソン・イェジン、チョン・ヘイン主演)、「マイ・ディア・ミスター ; 私のおじさん」(パク・ドンフン、イ・ジアン主演)、「梨泰院クラス」(パク・ソジュン、キム・ダム主演)、「RUN ON ; それでも僕らは走り続ける (イム・シワン、シン・セギョン主演)」、「秘密の森」(チョ・スンウ、ペ・ドゥナ主演)である。

何回も観てしまうのは、それだけロスがあるのかもしれない。見るたびにさわやかな気分になったり、癒されたりする。(「秘密の森」は少し違うが) (2021年10月27日)

2 韓国ドラマ「ある春の夜に」(2019)

Netflixで放映されている韓国ドラマ「ある春の夜に」全15話を見終わった。少し前に見た「梨泰院クラス」とはまた別の意味で、よくできたドラマだなと思った。今、韓国のドラマは、皆このようレベルのものなのであろうか。日本で今このレベルのテレビドラマは作られていないのではないか。

韓国の若い人(30歳代)が主人公のドラマで、日本では昨年7月にNetflixで放映されている。中身は、韓国の若い人の恋愛ドラマで、恋愛の障壁になるライバルや家族関係などさまざまあり、二人の心も揺れ動き、見ていてハラハラする。ヒロインの韓国女性(ハン・ジミン主演)が、知的で、勝ち気でありながら、心優しいために悩み、相手の男性(チョン・ヘイン主演)もとてもさわやかな優しい青年である。見ていて、二人の関係がほほえましく、応援したくなる。演技が自然で、ドラマの見ているというよりは、知り合いの若いカップルを見ているような気になる。

惹かれあった二人の会話が、スリリングで面白い。日本人の会話とは何か違うような気がする。そこが韓国ドラマの面白さなのかもしれない。ただ、何が違うのかは明確にわからない。

い。表面的などうでもいい会話というものが少ない。一つ一つの言葉に皆深い意味がある。発した言葉で、相手が驚くと、それは「冗談」と打ち消すことがしばしばある。そのようなことでシリアスなことをさりげなく言うことも多い。ホンネで話すので、その発せられる言葉で、相手が傷つき突然怒りだし、二人の関係が危うくこともしばしばある。とにかく会話に緊迫感がある。でも相手が好きだということが、言葉や表情から伝わってくる。それだけ演技がうまいのかもしれない。

韓国の若い人にとって恋愛は大きな価値で、運命の人との出会いという言葉もよく出てくる。親世代の結婚生活はあまりいいものとして描かれていない。今の韓国でも、結婚には親の許可が絶対必要のようで、結婚の許可を親から得るのが大きなテーマになっている。

バックの音楽はたくさんの OST が流れる「梨泰院クラス」とは違って、「ある春の夜に」は、数少ない同じ主題歌が何度も流れる。(2020年5月23日)

3 韓国ドラマ「よくおごってくれる綺麗なお姉さん」(2018)

今ネットフリックスで1番人気の韓国ドラマ「愛の不時着」(2019-20)のヒロインを演じているソン・イェジンが、その前に主演しているドラマ「よくおごってくれる綺麗なお姉さん」(2018)を、ネットフリックスでみた。これをみたのは、ソン・イェジンが主演しているという理由と、先にみた「ある春の夜に」(2019)と同じ演出家のアン・パクソンの作品ということによる。

主演のソン・イェジンは、「愛の不時着」のヒットで、今世界で一番輝いている女優かもしれない。1882年生まれで30代半ばである。このドラマは、年下の恋人(「ある春の夜に」のチョン・ヘインが演じている、1988年生まれ、31歳)との恋愛が主要なテーマである。ここでの二人の恋愛を阻むものは、周囲の家族で、とりわけヒロインの母親の家柄や学歴や職業へのこだわりは強烈で、見ている方は癡癡する。このドラマは、恋愛への純粋な思い(「その人と少しでもいっしょにいたい」や「その人に為なら何でもする」)を、思い出させるものであり、韓流ドラマの主流を行くもの1つなのであろう。ネットから、感想をピックアップしておく。

「前半幸せすぎて、色々な韓ドラ見てきた中でも一番幸せになった。ソン・イェジンの演技が上手すぎて、感情移入してしまった」「ジュニみたいな彼氏最高だ。こんなに愛されるジナが羨ましいって感情移入できるのも、ソン・イェジンの演技が素晴らしいってことかも知れない」「終始ジナのお母さんに腹立ちすぎてイライラしましたが、それぐらい出演者の方たちの演技が上手くて自然で面白かったです」「前半に沢山楽しい部分あったのに、後半のインパクトが強すぎ。お母さん怖すぎ。恐怖って感じ」「後半から大号泣。ジナには、ジュニが必要でジュニには、ジナが必要。沢山キュンキュンした。めっちゃおススメ。早く2人とも結婚して!」「OSTも古風?な感じで珍しい」

4 韓国ドラマ 「マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～」(2018)

全16話を、Netflixで見終わった。見終わるのに1ヵ月くらいはかかったように思う。人に薦められて見はじめたが、最初の方は何か暗く、韓国の庶民階層の暗い生活がいくつも、脈絡もなく描かれているようで訳が分からず、かなり早い回で見るのをやめてしまった。その後断続的に見て、後半になるとあまりにドラマチックで次の展開が読めず、ハラハラドキドキしながら見た。

人生に敗れた人々が酒を一緒に飲み、傷を嘗め合いながら何とか生きていくもどかしい場面も多くありながら、何か温まるストーリーであった。韓国では家族の繋がりが強い、兄弟がこんなに仲がいいのか、同郷の絆も強い、学校の先輩後輩関係は後まで響くなど、日本との違いも知った。このドラマは、中心の二人だけでなく、脇役の人たちの人生も味わい深い。特に、ヒロインも含め個性的で魅力的な4人の女性が登場しているのもいい。

このドラマの人間関係は、どの関係も皆ギクシャクしている。それは、現代社会の人間関係がそれだけ難しくなっているということの表れでもある。唯一安定しているのは、生育家族(生まれ育った家族)の人間関係である。韓国の伝統的な家族主義的な関係が結局基本にあるように描かれている。子どもが大きくなっても母親が子どもを思い、子どもも母親を一番大切にする。兄弟は喧嘩しながらもお互いを気遣い、兄弟の幸せや悲しみを共有する。生育家族との関係が強すぎて、主人公(ドンフン)の夫婦関係はうまくいかない(奥さんは主人公が最も嫌う男と浮気までする)。

主人公(ドンフン)の兄(サンフン)は職場を首になり、家で酒ばかり飲み、娘の結婚の御祝儀をねこばまでするようになり、奥さんに愛想をつかさされる。弟(ギフン)は、映画監督として一度脚光を浴びたものの才能のなさに気付き、主演女優にその責任を押し付け、その罪悪感とその女優への愛情と後ろめたさから、慕ってくれる彼女の気持ちを受けとめられない。天才肌の友人は、理想的な近代家族の限界を感じ、相思相愛だった女性と別れ、僧侶になってしまう。

主人公とヒロイン(イ・ジアン)の関係は、上司と部下、叔父と姪(父と娘)、援助者と被援助者、詐欺の標的、恋人関係、というさまざまな要素を内包しながら動的に展開し、最後に行きつくところはどこなのかわからず、ハラハラさせられる。

現代は、伝統的社会の安定した家族関係、近代社会の友愛を基礎にて成立する核家族ではやっていけなくて、さまざまな人間関係が交錯する中で、皆苦しみながらも、過去は「どうってことない」と目をつぶり、「ファイト」と未来に向けて歩く(時に「かけっこ」もする)生き方(「リジリエンス」な生き方)をする時なのであろう。そのようなことを考えさせられるドラマである。

ネットから感想を少し、転載しておく。私と同じような感想が綴られている。

「とても良いドラマでした。最初は良さがわかりませんでした。それぞれの心の動きや相手に対する気持ちの変化が見えて来て、どんどん嵌まって行くドラマです。本筋を支えるそれぞれの出来事も涙と笑いが満載で楽しめます。とてもお薦めのドラマです」「あまりにも

重い内容に始めは戸惑いましたが、見ていくうちにすっかりはまってしまいました」「辛い人生をいきる女性とその女性を取り巻く人々。目を背けたくなるようなシリアスな場面もあるけれど、人生について考えさせられる時間を与えてくれました」「見終わってみれば、人情物語であたたかな気持ちになれます。優しい人間に癒される、そんなドラマです。」
(2020年12月26日、29日)

5 韓国ドラマ「梨泰院クラス」(2020)

全16話を見終わった。10話以降は、1日に2~3話を続けてみて、今日は少し梨泰院クラスロス状態。16話も見ると、その世界や登場人物が日常的になり、ドラマが終わってしまうとその喪失感は大きい。韓国ドラマながら、共感できる部分が多く、日韓の共通点を感じた。

ネットでも2020年のお薦めの韓国ドラマでも「梨泰院クラス」があがっている。<面白すぎる…!と話題沸騰!いわゆる“韓国ドラマ”っぽい恋愛要素は少ないものの、主人公セロイの下克上ストーリーに共感してドラマにハマる人がどんどん増えている本作。特に、これまであまり韓ドラを観ていなかった人や男性にもファンが多いようです。><なんととっても音楽とのマッチングが素晴らしいのも本作の魅力。「あのOSTが頭から離れない…!」という人も続出しているんだとか。また、どんぐりのような髪型ですら似合ってしまうパク・ソジュンのイケメンっぷりにも注目です! >

このドラマに描かれ優位な価値観に関して、感じたことを書いておきたい

①強い信念に基づく一途な行動、困難に立ち向かう果敢な行動、がメインテーマのひとつ。
② 仲間(友情、恋愛)の大切さがもうひとつのテーマ。③ ①と②の組み合わせで人間の4類型ができる。(A—信念・仲間、B—信念のみ C—仲間のみ、D—信念も仲間もなし=損得と利己的行動。)主人公のセロイとその仲間はA類型が多く、敵役はD類型が多い。④ 中で描かれている恋愛関係は、一歩方向(片思い)が多い(グンス→イソ、イソ→セロイ、セロイ→スマーグオン)。ただその片思いは秘めているのではなく、はっきり公言され、その成就に向かう努力が評価される(失恋で泣く様子も激しいが)。⑤ 韓国は学歴社会といわれるが、主人公のセロイは中卒・高校中退で、ヒロイン・イソも超優秀ながら高卒である。学歴に価値は置かれていない。強い信念と行動が評価されている。セロイの初恋の相手スアは超美人で、大卒で控え目な女性だが、信念が弱く、そのような女性は韓国では生きにくい。⑥ 母親はほとんど出てこず、いても影響力は小さい。強い父親が求められていて、その父親の信念に基づく行動(背中)が心の支えという息子が多い。信義や仲間を大切にしない父親からは、問題児が育っていると描かれている。⑦登場人物の日常に交される会話は、ひとつ一つの言葉は短い、ホンネ(本質)をズバリと発していて、緊迫感がある。相手の言葉に「エ?!」と驚く場面が多い(毎回、数場面あるのではないか)。主人公セロイをめぐるヒロイン・イソと初恋相手のスアの会話のレベル(緊迫感)は、漱石の「明暗」の中の、二

人の女性の会話のそれに匹敵する高さと感じた。⑧主役のセロイはなぜ初恋で10年も思い続けてきた心優しいスマを振って、事業（復讐）パートナーのイソの方を選んだのか。控え目の女性（スマ）より、自分の人生を自分の力で切り開き好きな男を守る積極的な女性（イソ）の方を選択したのは、それが自分の生き方に合っているからであろうか。しかし、まだ釈然としない部分も残る。それは、初恋同士の二人の心情の中にもあり、二人とも前に向かって進む以上は、別れは仕方ないと思いながら、そのような選択しかできない生きることの哀しみを感じているのではないか。その哀しみがバックの音楽（OST）があらわしているように思う。⑨「梨泰院クラス」のOSTの4番目のバンドと6番目の男の子の歌が特に印象的。8番目の女の子の失恋の歌もいい。k-ポップはこれまで聴いたことがないので、有名な歌手やバンドなのかどうかかわからないが、こんなレベルの音楽が韓国には多いとすると、音楽的に日本の先を行っているなど思う。（2020年5月24日）

6 韓国ドラマ「秘密の森」(2017)

「秘密の森」の第1シリーズ16話を見終わった。見始めて4日ほどで16話まで見たので、1日に3～5話ほど見たことになる。新型コロナの感染拡大と大雨の天気のため、どこにも行けず、ドラマでも見るしかなかったせいもある。

「感情がない孤独に生きる男性検事が、情深い女性刑事と出会い真実暴く！韓国で大人気ドラマ『シグナル』に続く、人気刑事ドラマ！」と説明がある。これまで、私が多く見てきた韓国ドラマと少し感じが違った。

殺人事件や汚職事件が絡むサスペンスドラマであり、娯楽性が高く、そこに何か感情移入し、生き方のモデルを見出そうとするものではないのかもしれない。しかし何か不思議な魅力のあるドラマである。

脚本が秀抜で、伏線が周到に用意されているらしいが、最初はそれになかなか気が付かない。さらに韓国名がわからないと、複雑に絡み合う人間関係がなかなか理解できない。韓国ドラマ「秘密の森」の「シリーズ2は、シリーズ1以上にストーリーは複雑です」とそのドラマを薦めてくれた知人から告げられている。（2021年8月16日）

7 韓国ドラマ「愛の不時着」(2019)

韓国ドラマ「愛の不時着」全16話をネットフリックスで観た。話題のドラマだけあって、よくできたドラマだと思う。ブームを引き起こしたことが納得できる。

ジェンダーの視点からも現代にマッチしているようだ。その分、古いジェンダー意識に囚われている人にはそのよさがわからず、ジェンダー意識の「踏み絵」にもなるドラマのようだ。

ネットで書かれていることを少し書き写しておこう。

「韓流ドラマ今まで見た事なかったけど、初めて愛の不時着を見てはまった。」「本当に『人を愛する』とはどういう事かをこれでもかと思わせつけられたドラマでした。」「最近の韓流ドラマのヒロインは、ひと昔前の可憐で受け身タイプの女性から、男性に頼らず自分の将来を自分の力で切り拓いていく、元気で活発なタイプへと変わってきている。『愛の不時着』のセリも、財閥の令嬢でありながら、自らファッションブランドを立ち上げて成功させたビジネスウーマンであり、愛する男のために命まで投げ出すほど愛に積極的な女性だ」「ヒロインは美しいだけでなく経済的に自立しており、ヒーローを守る強さを持っている。2人の主演俳優が見せる素晴らしい演技力に加え、ジェンダー・ステレオタイプを覆すキャラクターの魅力が、古典的な「愛」をモチーフにしたドラマを格段に面白くしている」「悪役であるセリの義姉たちも、坊っちゃん育ちの夫をコントロールして生きる力が強くて憎めない。北のオンニたちはそれぞれの個性が際立っている」「ユン・セリ役を演じたソン・イェジンはまさに神の一手だった。女性視聴者の共感を得られる抜群の演技力と、男性視聴者をテレビの前に釘付けにできる美貌を兼ね備えた女優」。(2020年7月13日)

8 韓国映画『私の頭の中の消しゴム』(2004)

この映画『私の頭の中の消しゴム』(2004年)を、ソン・イェジンが主演というので今回はじめてみた。日本で上映された韓国の興行映画のうち、歴代2位の記録を持つ映画である。当時全く知らなかった。よくできた映画だと思った。アカデミー賞映画『パラサイト』(2019年)より、出来はいいのではないかと感じた。。ネットの解説を転載しておく。

<ヒロインは、ドラマ『愛の不時着』で再びの全盛期を迎えているソン・イェジン。2003年にドラマ『夏の香り』や、映画『ラブストーリー』で人気を博した彼女は、その翌年に本作に出演。不倫に涙して化粧がドロドロに落ちた顔から、お嬢様らしい品のある表情、チョルスの前で魅せる満面の笑顔、病気を知っての絶望に陥った表情、そして記憶を失くした虚無の表情までを繊細に表現し、“メロドラマの女王”との称号を得た。一方、チョルス役のチョン・ウソンは、ドラマには滅多に出演しない根っからの映画俳優。アウトローのイメージで、男くさい作品に出演することが多かったが、本作ではそのイメージを活かしつつもラブストーリーということで女性ファンが倍増。』(安部裕子)(2020年8月11日)

9 韓国映画「ザ・ネゴシエーション」(2018年)

ヒットした韓国ドラマ「愛の不時着」を見て、ヒロインのソン・イェジンのファンになった人も多いのではないか。ウィキペディア(Wikipedia)で調べると、(データは完全ではないと書かれているが)、ソン・イェジンは、1882年1月生まれ。映画に20本、ドラマに13

本出演している（私がこれまでに見たのは映画2本、ドラマ3本である。どれも面白かった）

ソン・イェジンは「清純で、美しいというイメージだったが、意外にもさばさばしていて気さくで、コミカルなシーンにも意欲的で、自分の意見をハキハキ伝える面があるかと思うと、少し天然な部分もあって、そういう姿がとても魅力的だった」という監督評もある。

最近、ネットフリックスでソン・イェジン主演の映画「ザ・ネゴシエーション」（2018年）を見た。ソン・イェジンは、ソウル市警危機交渉班の警部補で、事件現場で犯人との交渉役を演じている。通常そのようなネゴシエーターは理性的で情には動かされない人になると思うが、ソン・イェジンの演じる交渉人は、情に厚い韓国の人々の典型のような性格で、国家や警察のトップの冷酷な指令には従わず、それで犯人は心動かされる部分はあるが、結果は必ずしも望んだものにならない。

ドラマ「秘密の森」と同様、韓国の公（大企業や警察トップ）と私（情に厚い人間性）が、ぶつかる場面も多く、興味をひかれる。この映画の成功は、ソン・イェジンの天然の人間性と演技力にあり、彼女のよさが十分発揮されていると思う。（相手役は『愛の不時着』で共演したヒョンビン）（2022年3月11日）

10 韓国ドラマ「彼女はキレイだった」（2015）

韓国ドラマ「彼女はキレイだった」をネットフリックスで見始めた。最初「なんか失礼な題だな」と思ったが、ストーリーを知って納得した。女性が「キレイ」ということはどういうことなのかといろいろ考えさせられた。男はキレイな女性に惹かれるのは古今東西普遍的のようだが、それはなぜなのだろう。（女性がイケメンの男子に惹かれることもあるが、男のそれには及ばない）。

第1話のストーリーは次のよう。<（ヒロイン）ヘジンは小学生のころ相思相愛だったソングンがアメリカから帰国するとのメールを受け、（親友）ハリに待ち合わせ場所まで送ってもらった。そこに現れたソングンは肥満児だった過去をみじんも感じさせないイケメンに成長しており、正反対の残念な女性に成長した自分を恥じたヘジンは、（超美人の）ハリに自分の代役を頼み…。>

最近大人気の韓国ドラマ「梨泰院クラス」の中卒で前科者で飲み屋の社長の男ばいヒーローのパク・セロイを演じたパク・ソジュンが、このドラマではアメリカ帰りの育ちがよくかっこいいイケメンを演じていて、最初その育ちの品のよさから同一人物とは思えず、思わずネットで調べてしまった（パク・ソジュンが好きな女性ファンにはたまらないであろう）。

女性が綺麗であると男からちやほやされることが多いが、それに奢れることなく、懸命に生き、いい性格ややさしい心情を保持することは難しいのではないか。その点そうでない女性の方が、努力家でいい性格でやさしい心根の人が多く（、と私は思う）。ところが愚かなことに、男は美人の方に惹かれる。

「彼女はキレイだった」のヒロインは、そのことがわかっていて、幼馴染のイケメンに自

分の正体を明かせず、超美人の友人に代わりになってもらう。そこに悲しみがないわけではないが、持ち前の元気さと笑いで吹き飛ばすのが、このドラマの魅力である。

もちろん女性が綺麗になるように努力することは、自分の顔や体を素材に美を追求することであり、画家がキャンバスを素材に美を追求するのと変わらないことで、非難されるべきことではない。また男が女性の綺麗さに惹かれるのは、美しい絵や美しいものに惹かれるのと同様で、自然なことであると思う。

1 1 韓国ドラマ「屋根裏のプリンス」を観る (2012)

「前半は抱腹絶倒、後半はサスペンスと涙の連続」というのが一般的の評のよう。私は、見終わるのに 2 週間はかかった。ラブコメとして楽しめばいいドラマのようであるが、シリアスなドラマとしてみると、少しストーリーに無理を感じる。ヒロイン（ヘン・ジミン主演）の自己犠牲や輪廻の考え方に魅かれた。

ヒロインの名前は、プヨン＝パク・ハで、それは蓮の花を意味する。「生きて死に、死んで生きるものは何か？」という謎かけがドラマの中であったが、その答えが蓮の花。蓮の花は咲き終わると朽ちて土にまみえるが、次の花の糧になり生きる。このように蓮の花は自己犠牲に徹し、美しく咲き、哀しく散る。

私は別に輪廻転生を信じるものではないが、このドラマが輪廻転生のドラマであり、その象徴である蓮の花の名前のヒロインの自己犠牲や、七夕の輪廻転生（天の川）や、先日千葉公園で観た蓮の花の美しさが、何か繋がっているように感じ、惹かれるものがあった。

(2020 年 7 月 8 日)

1 2 韓国映画「虐待の証明」(2018)

このところ韓国のドラマばかり見ている。そこで、今度は韓国の映画を見てみようと思い、韓国ドラマ「ある春の夜に」でヒロインを演じていたハン・ジミンが主人公を演じ、第 38 回韓国映画評論家協会賞で主演女優賞を受賞した映画「虐待の証明」(ミス・ベク)を、レンタルして観た。ドラマの紹介や感想は、ネットで次のように書いてあった。

<あらすじー母親から虐待され、捨てられて施設で育ったベク・サンアは、心に傷を抱えたまま生きていた。彼女は荒んだ生活を送り、周囲からは「ミス・ベク」と呼ばれ揶揄されていた。そんなある日の夜、サンアは道路の片隅で震えている少女ジウンと出会う。お腹を空かせたジウンの体は痣だらけで、誰かに虐待を受けているのは明らかだった。目の前の少女と過去の自分とを重ね合わせたサンアは、ジウンに手を差し伸べようとするがー。>

私の見終わった感想は、あまりはっきりしたものでない。いくつかあげると、①テーマは子どもへの虐待で、事実に基づいた映画ということで、決して明るい内容ではなく、気分的

には沈んでしまう映画である。②児童虐待が韓国でも日本と同じように社会問題になっていることがわかった。児童虐待をする親は、自分も虐待された経験があるという負の連鎖が示唆されている。警察や児童相談所の対応の遅さやいい加減さは、日本と同じように描かれている。しかし児童虐待の酷さ、警察の取り調べの凄さ（容疑者を殴っている）、刑の重さ（殺人罪が適用される）は、日本より韓国がより強烈のように感じた。③有名女優のハン・ジミンが、よくここまで、泥だらけの体当たり役を演じるものだと感心した。そしてハン・ジミンらしさも出ていたように思う。④映画としては、韓国らしく、また出演者の演技は上手で、バックの音楽も沈痛ながらよく、よくできた映画なのであろう。児童虐待を扱っている映画だが、もう少し別の観点からみた方がいいのかもしれないと思った。

韓国人の国民性に関しては、「かなり粗野で、激情型で、しかも情が厚い」という印象がある。それがこの映画「虐待の証明」にはよく現れている。主人公だけでなく、脇役の刑事もその姉も粗暴ながら情が厚く、虐待された子どもを結局は引き取り大事に育てるようになる。韓国は、急速な近代化を果たし、生活様式は近代化し、ドラマ「ある春の夜に」に描かれているように、若い人はおしゃれで人柄もソフィステートされているが、その奥底の心情には、情が厚く激情的なものが存在し、時々それが噴き出すのではないか。日本人もかつてはそうであったが、韓国より先に進んだ近代化で、それが消えていったのでないか。日本でも1950年代中頃から60年代末に吹き荒れた「大学闘争」の時は、学生がゲバ棒や火炎瓶を持ち、機動隊に立ち向かって行ったり内ゲバで殺し合ったりしていた。そのような激情は現代の日本の若者にはない。そのようなことをこの映画から感じた。

(2020年5月27日)

1.3 韓国映画「パラサイト—半地下の家族」(2019)

今年度のアカデミー賞を受賞した韓国映画「パラサイト」を見た（劇場ではなく、レンタルしてパソコンで）。私の感想はともかく、見た人の評価をネットで見してみた。アカデミー賞を獲得しただけあって、専門家の評価はきわめて高い。一般の人の評価はどうであろうか。

1つのサイトで見ると、だいたい5点満点の5か4の称賛が7割、3の中間が1割、2か1の酷評が2割という割合で、一般の人の評価もおおむね高い。

その中身を見てみると、称賛（4 & 5）は「経済格差を縦の構図を巧みに用いて描いた演出センスに脱帽する。何から何までセンスが良い作品だ」「貧富の差の拡大というグローバルに深刻化する問題を取り上げ、予測のつかない超一級のエンターテインメントとなった」「最初から最後まで引き込まれ、あっという間の2時間。エンディングも最高」。など。

中間（3）は「面白いが、深さ・鋭さには欠ける」。

酷評（1 & 2）は「目で見ただけの映画 何も入ってこなかった！共感する事もなく感情移入する事もなく 考えさせられる事もない」「パラサイトは刺激的ではあるものの素材が調和していない感がある。最終的に富裕層も貧困層も救われず、後味も最悪な映画だった」「評判がよかったから期待してみたけど、本当につまらない作品。色々な感性があると思う

がこれを面白いと評価する人が信じられない。時間の無駄。アカデミー賞もたいしたことない。」などである。

全体では称賛が多いが、そうでない評価も少なからずあり、同じ映画でも見る人によって評価が違うことがわかる。(2020年6月26日)

14 日本のテレビドラマ 「六本木クラス」

第4次の韓国ドラマブームを巻き起こした原動力になった3作品の一つは、「梨泰院クラス」(他の2つは、「愛の不時着」と「賢い医師生活」)と、『人生を変えた韓国ドラマ』(光文社新書、2021.1)の著者・藤脇邦夫が書いている。確かに、私が韓国ドラマを見るようになった契機は、ドラマ「梨泰院クラス」である。

その「梨泰院クラス」の日本版ドラマ「六本木クラス」が、先週7月7日(木)夜9時のTBSで始まった。

第1回を見ての感想は、①かなり丁寧に作られたドラマ ②「梨泰院クラス」に似せて作っている ③同じ音楽が日本人のバンドの演奏で流れている。オリジナル韓国版の方が迫力がある。④わざわざ、韓国で成功したドラマの日本版を作る意味はなんだろうなどである。ネットで、その解説や感想を見てみた。

<2020年に動画配信大手「Netflix」で配信されブームを巻き起こした人気韓流ドラマ「梨泰院(イテウォン)クラス」をテレビ朝日が竹内涼真を主演に迎えリメイクした「六本木クラス」(木曜後9・00)の第1話が7日に放送された。作品タイトル「六本木クラス」がツイッタートレンド1位になるなど注目度の高さを示した。/ SNS上には多くの反響が寄せられた。「ほぼほぼ原作通りの展開。悪くない」「観たけど、端折られてるところ多いな」「案外よかったな。余計なオリジナル要素追加したりしてなかったし、キャスティングもなかなか。」挿入歌は“超豪華”全4曲!本家「梨泰院クラス」のカバー曲もサプライズ披露

この「六本木クラス」が、Netflixで見ることができるとわかった。もちろん放映済みの部分だけだが、Netflixだとコマーシャルなしで見ることができる。日本版を作った意味があるのかどうかは、これからの展開次第であろう。

3話まで見た限り、とてもいい出来のドラマだと感じた。プロデューサー(監督)、主演者がいいのだと思うが、舞台の六本木のおしゃれな街の雰囲気もドラマを引き立てている。韓国ドラマ「梨泰院クラス」の核心の場면을きちんと押さえ、それを日本の役者で再現している。よく出来たカバー曲を聴くような心地よさを感じる。この日本版ドラマは、オリジナルなドラマを繰り返し見るのとは違った楽しみがある。(2022年7月9日)

IX 花紀行

草木や花に惹かれ、いろいろ見に行きたくなるのはなぜだろう。江藤淳は『成熟と喪失』（1967）の中で、「日常性の危うさを感じる人が、草木や花といった自然に目が行く」と書いている。私の中に何か危うさがあるかもしれない。でも人は歳と共に関心が、花→盆栽→石と移るといわれる。石を愛でるようになったら危ないが、花や草木ならまだ大丈夫かもしれない。

さらに、江藤淳は「自然に関心がない人は、人工的なものに浸食され、自然を奪われ、人間に集中することを余儀なくされている」とも書いている。草木や花への関心は人工的なものへの浸食が少ないともいえる。この1年半くらいの「花紀行」をまとめてみる（ブログの方には、それぞれ数枚の写真も掲載している）。

1 菜の花が満開

千葉市にはまだ自然が残っている。ただ財政難なのか自然が手つかずで放置されているところも多い。家から車で10分のところにある花島公園の下を流れる花見川沿いは、いい散歩道・自転車道になっている。しかし川べりは雑草が生い茂り、夏草が枯れたままになっていて風情もない。ただ川べりの一部に小学生が種を植えたという菜の花が今満開で、散歩が楽しめた。

その菜の花を見ながら、今朝 you tube で聴いた曲（南沙織が吉田拓郎と「菜の花をあなたに摘んであげたい」という歌う曲「春の風が吹いていたら」）が耳の奥で鳴った。

（2021年3月6日）

2 季節の花—千葉市「花の美術館」

今日（5月3日）は稲毛海浜公園にある千葉市の「花の美術館」に行った。「花の美術館」は、温室の建物で中にいろいろな花が生育しているが、外や館内や中庭でも様々な花が楽しめる。外は今の季節は、バラやポピーが綺麗。館内は、ジキタリス、ストック、アジサイ、ランなどがアレンジされ咲いていた。中庭には、上品なシャクヤクと春のコスモスのような花＝アグロステンマが花時で見とれてしまった。

このように季節の花に魅かれ、つい時間があるとそれを見に行きたくなるが、草木や花に魅かれるのは歳のせいかもしれない。若い時は、草木や花に興味はなかったように思う。また、歳をとったからといって誰でも草木や花に皆惹かれるわけではなく、惹かれるのは精神的に悩み、何かの埋め合わせのようなものを必要としているのかもしれないとも思う。卓球仲

間に聞いても、菜の花を見に行ったり、「花の美術館」に行ったという話をほとんど聞かない。

江藤淳は『成熟と喪失』(1967)という名著の中で小島信夫の『抱擁家族』に言及し「外部の自然は、非日常的な、きわめて特権的な瞬間しか登場人物の意識にのぼらない。(それは妻に不貞を告白されて)、日常生活の次元からものの次元につきおとされた俊介の眼に映じた暁方の庭である」と書いている。このように、日常性の危うさを感じる人が、草木や花といった自然に目が行くのかもしれない。(逆に別の箇所)江藤淳は「むしろ作者は描くべき自然を奪われ、人間に集中することを余儀なくされている」とも述べている。この指摘に従えば、自然に関心がない人は、人工的なものに浸食され、自然を奪われ、人間(関係の悩み等)に集中することを余儀なくされているとも考えられる。(2021年5月3日)

3 茨城県のコスモス畑に行く

今日(10月3日)は天気もいいので、千葉から途中の高速道路が空いている茨城県に行くことにした。茨城県の潮来の畑のコスモス畑が綺麗というネットの情報を見て、車で北千葉より関東自動車道に乗り潮来を目指した。

関東自動車道は空いていて1時間弱で、目指すコスモス畑に着いた。駐車場もなく、観光客はちらほら20名程度。広大な畑一面にコスモスの花が咲いていて壮観であった。しかし、2日前の台風の影響で花がかなり散っていて、少し残念。(2021年10月3日)

4 日光、水上の紅葉

例年であれば、10月下旬は紅葉の季節であろう。この週末は、紅葉を求めて千葉から北上したが、どこも紅葉はまだで、綺麗な紅葉は見るができなかった。

車で日光のいろは坂を登り、さらに中禅寺湖畔を少し登ったところにある半月山展望台から、日光の中禅寺湖と男体山との眺めると、色づき始めた木々の葉はきれいで、それなりに楽しめた。

今回のコースは、日光→奥日光→片品→沼田→月夜野→苗場→湯沢→六日町→八海山→苗場→猿ヶ京→水上→谷川岳である。

紅葉がまだの為、苗場の Gondola と谷川岳散策を諦めたのは残念。温泉は、苗場、湯沢、猿ヶ京で入った(皆、源泉かけ流し)。

特によかったのは、丸沼高原(山や道には雪)、苗場のボードウォーク(フジロックの名残り)、美味しいへぎ蕎麦(中野屋・塩沢店)、魚沼スカイラインの眺め、水上の辺鄙などところにある気品のある「天一美術館」である。紅葉の時期に再訪したい。(2021年10月24日)

5 紅葉 リベンジ (苗場)

前回千葉から北上した折、どこも紅葉には早過ぎて見ることはできなかった。そのリベンジで、11月3日と4日、苗場のドラゴンドラと谷川岳の山麓に紅葉を見に出かけた。

前回の訪問からたった10日しか経過していなかったが、山の様子は一変して、紅葉の真っ盛りであった。

しかし例年より紅葉が遅いこともあって、(新型コロナ禍の自粛のせい、紅葉時期の予測を見誤った人が多かったせい、)紅葉を見に訪れている人は少なかった。3日の祭日の苗場プリンスホテルの駐車場も地元の車ばかりで、観光バスも1台も見なかった。

苗場のドラゴンドラもほとんど待つことなく乗れた。ゴンドラから見る苗場の紅葉は、日本一の眺めかもしれないと思うほど絢爛たるものであった。ゴンドラの下ボードウォークも散策したが、紅葉が見頃なのに、誰にも会わなかった。

苗場から水上に出る峠の道に行く車もほとんどなく、そこから谷川岳のロープウェイ駅に行く道も空いていて、谷川岳の山麓の紅葉もゆったりと鑑賞できた。

谷川岳の帰りに昼食で立ち寄った水上高原ホテル(旧水上プリンスホテル)のゴルフ場の芝生と紅葉も素晴らしいものだった。(2021年11月5日)

6 稲毛海浜公園の菊展に行く

今日は、菊展を見たいと思い、稲毛海浜公園に行った(家から車で15分)。

その菊展はいつも11月上旬に菊好きの年寄りが開いているもののようで、数十鉢の小規模なものもあるが、個々の菊に気品があり、見ていて心が落ち着く。

菊の鉢も販売しており2鉢購入した。公園内の花の美術館では、ハロウィーンの終わりとクリスマスの飾りつけが始まっていた。

稲毛の浜は波もなく、水は比較的綺麗で、家族連れが波遊びを楽しんでいた。(2021年11月9日)

7 検見川浜の皇帝ダリア

近所に皇帝ダリアが群生しているところがあるので見に行った。いつも行っている検見川浜の近くの県立検見川高校のグラウンド脇である。20本以上の皇帝ダリアの幹から咲いたピンクの花が今満開で、壮観であった。数人の人が見に来ていた。

帰りに寄った検見川浜は、今日は風がなく、穏やかな海で、ウインドサーフィンも波間に立ち往生であった。キャバリア犬に2匹会い、海で泳いでいる犬も見て、心落ち着く休日となった。(2021年11月14日)

8 外房御宿の皇帝ダリア、皇帝ヒマワリを見に行く

今年皇帝ダリアは近所でもう十分見たと思ったが、今日の朝日新聞千葉版の朝刊に御宿の皇帝ダリアとヒマワリが今見頃という記事が載っているのを読んで、やはりそれを見たくなり出かけた（家から車で1時間40分）。

家を出た時は晴れていたが途中から雲行が怪しくなり、外房の御宿に着いた時は大雨だった。それでもここまで来たのだからと、傘をさして皇帝ダリアを見に行った。

1カ所は一重だけでなく八重の皇帝ダリアたくさん咲いていた。もう一カ所は少し内陸に入った畑のところで、皇帝ダリアは少ないものの、黄色い皇帝ヒマワリが群生していて楽しめた（朝日新聞を読んだ人は多いと思うが、来ていた人は数人。）

御宿の海を見るのは1年ぶりだが、相変わらず広い砂浜や水はきれいで、人は少なく、サーフィンをする人がちらほらいる程度。御宿唯一の茶色のドロツとした温まる温泉場は閉鎖されていて入ることはできなかった。その他閉鎖されている店がいくつもあり、地方都市の人口減少と新型コロナの影響を感じた。（2021年11月18日）

9 梅の季節 一昭和の森公園に行く

季節の花を楽しむというのが、歳を持つてからの恒例行事になっている。去年は、2月23日に土気の「昭和の森公園」（車で30分）に行き、満開の梅を見ている。今年も今梅が満開だろうと、今日（2月25日）、同じところに出かけた。

今年は寒さが続いたのか、まだ咲いていない梅の木も多く、少しがっかり。「昭和の森公園」は、今の季節は梅以外ほとんど花もなく、菜の花もまだ先のように（1分咲き）。遠くに九十九里の海が見えた）。

これから、まだ梅、菜の花、ストック、チューリップ、桜と、いろいろ花をいろいろな所に見に行くのが楽しみ。帰りに寄った家の近くのホームセンターでは、春の花がたくさんあり、いろいろ買い庭に植えたくなり困った。（2022年2月25日）

10 南房総に頼朝桜を見に行く

もう春の桜（ソメイヨシノ）の開花予定がテレビで報じられるようになっている。順序として、梅や河津桜（千葉では頼朝桜）のお花見をして、それからソメイヨシノの桜を見ないと、季節感が狂ってしまう。

今日は、天気もよく、内房を経由して、富士山も見ながら、南房総の佐久間ダムに、頼朝桜と梅を見に行った（車で1時間半）。佐久間ダムには水が戻り、まだ水仙も咲いていて、満開の頼朝桜と梅を堪能した。

道の駅で、季節の野菜と花の苗を買い、これで桜の季節を迎えられる（2022年3月7日）

11 桜とモノレール

今年は、桜の開花が急だったような気がする。3月下旬だというのに、まだ寒い日も続き、今年は春の訪れが遅いのかと思っていたら、昨日のテレビでは、東京の桜が満開で、多くの人がお花見に行っている様子が放映されていた。

慌てて家の前の小学校の桜に目をやると、一気に8分咲きのようになっていて驚いた。昔はよく見に行った千鳥ヶ淵の桜は、まだ東京の新型コロナの感染終焉の兆しもなく行けず、近場の千葉の桜で我慢することにした。

千葉市の動物公園近くの桜や県の総合スポーツセンター(天台)の桜も例年通り満開で、春の訪れを感じた。桜とモノレールの写真も一応撮れた。(2022年3月29日)

12 花見川の桜

今日(3月31日)も千葉の近場の桜を見に行った。八千代にある「やちよ農業交流センター」で、貸自転車を借り、花見川のサイクリングロードを、花見川沿いに40分ほど下り、薄いピンクの染井吉野の満開の桜を楽しみ、帰り(上り)は染井吉野と濃いピンクの陽光の桜の混在を楽しんだ。(2022年3月31日)

13 水路の上の桜並木

千葉では昨日夜に雨が降ったが、昼間は曇りで青空も少し見えたので、近所に桜を見に行った。例年見ている桜も剪定されたのか、昨年ほど絢爛豪華というわけではなく、少しスカスカで寂しいところが見られた。

ネットで桜の剪定を調べると、『桜切る馬鹿梅切らぬ馬鹿』ということわざがありますが、桜にとって剪定はある程度ダメージにはなるものの、むしろ桜の健康のためにも必ずしないといけない手入れなのです。桜の剪定を行うのに最も適した時期は、桜の葉が落ち切った11月~12月上旬までです」とある。

昨年の剪定で少し寂しい桜があるのも、桜の為に仕方がないのであろう。水路の上や大きな木は剪定が難しいのか、例年通りの桜が見られた。(2022年4月1日)

14 佐倉のチューリップ畑

桜の季節が終わると、次はサツキやバラそして紫陽花の季節になる。その間に、菜の花、パンジー、ポピー、チューリップなど小さめの草花が綺麗で、楽しませてくれる。

昨日（9日）は、「佐倉ふるさと広場」にチューリップを見に行った（車で30分）。広い畑に多くの種類のチューリップが咲いていた。その種類は80種にもなり、周囲には桜や菜の花も咲いていて、風車もあり、春を楽しんだ。

500円で畑から好きなチューリップを10本（JAFの会員は15本）自分で選んで球根から掘り持ち帰ることができる。30本のいろいろな種類のチューリップを持ち帰り、庭に植え、近所にも配り、春の訪れを楽しんだ。（2022年4月9日）

15 武蔵丘陵森林公園のポピー、ネモフィラ、ルピナス、山ツツジ

ツツジやサツキの季節にはまだ少し早いというので、ポピーやネモフィラの花畑を見に行くことにした。千葉県でもマザー牧場やドイツ村にも咲いているところがあるようだが、まだ行ったことがない場所ということで、埼玉の武蔵丘陵森林公園に行った。場所は、関越道の東松山から熊谷方面に10分のところにあった。

その森林公園は国営で、大きさは東京ドーム65個分という広さで、びっくりした。南の駐車場から、目指すお花畑（ポピー、ネモフィラ、ルピナス）まで、森の中の道を歩いて30分以上かかり、ちょっとしたハイキングだった。歩道とは別に一方通行の自転車道も設けられ、自転車乗りも快適であった。

ポピー、ネモフィラ、ルピナス畑も広大で綺麗だったが、森の中を歩いている途中に見る、山ツツジがとてもきれいで、癒された。

国営ということで、県営の公園よりお金をかけていろいろ整備でき入場料も安くできるのか、満足できる点を多く感じた。（入場料；大人450円、シルバー210円、中学生以下無料、駐車料金650円、貸自転車420円）。帰りには近くの日帰り温泉（「おがわ温泉花和楽の湯」）にも入り、千葉からは少し遠かったが、快適な1日であった。（2022年4月24日）

16 昭和の森公園のツツジ

昨年の4月22日のブログに「『千葉市の昭和の森公園』に、ツツジを見に行った（家から車で30分）。平日で人は少なく、花は綺麗であった。広い公園の一角に鯉のぼりが上がっていた。その先の九十九里海岸にも行き、広々とした海を眺め、帰りに大玉の『白子の玉ねぎ』の10キロ入りを3袋購入し、近所の知り合いにも裾分けした。」と書いた。

今日は4月30日なので、「昭和の森」のツツジも満開であろうと期待して出かけた。公園内は連休2日目で、鯉のぼりも上がり家族連れは多かったが、ツツジが少ししか咲いていなくて、がっかりして1時間もいなくて退散した。ツツジの開花がまだなのか、最近の強風と雨で散ってしまったのわからない。

その後九十九里海岸にも行ったが、海は風が強く、砂浜に降りることはできなかった。

今年の「白子の玉ねぎ」は雨で不作とのことで、値段が1.5倍になっていた。昨年と同じことをしても、同じになることはないことを体験した。(2022年4月30日)

17 八千代京成バラ園に行く

昨年は、八千代の京成バラ園を見に行ったのは5月1日で、少し早過ぎて、3分咲きくらいであった。今年は、時期を見計らって、今日(5月18日)出かけた(車で30分)。バラはちょうど見頃で、どの花も咲き誇り、さまざまな種類のバラの絢爛豪華な饗宴を見ることができた。ただ昨日までの雨で、痛めつけられた花もあり、その点は少し残念であった。花の命の短いことも感じた。(2022年5月18日)

18 水上、苗場の新緑を見に行く

このところ花ばかり見たので、少しは気分を転換して、新緑を見に出かけた。行先は、関越道の沿線の2か所。最初の場所は、群馬の水上で降りて谷川岳の下を流れる川沿いの道を歩く予定だった。道がデコボコ陰しく、少しで諦めた。でも川沿いの新緑は綺麗。滝もあった。

次に行った場所は、高速を月夜野で降り、猿ヶ京の温泉に入り、三国峠の50の急なカーブを登って行った苗場。苗場はスキーシーズンも終わり人影はほとんどない。そこのボードウォークの新緑を楽しんだ。水芭蕉の群生していた。夏のフジロックの時は何万人という人が訪れる場所だが、行きは誰にも会わず、熊に遭遇しないかだけが心配だった。

広い場所が緑の木々だけで、鳥のさえずりはきこえるが、人を誰も見ないというのは、都会では考えられない。空気も新鮮で、癒される空間と時間を満喫した。(2022年5月21日)

19 潮来のあやめ(菖蒲)を見に行く

バラの季節が終わると、次は、「あやめ」の季節ということで、今日(6月1日)は、茨城県の「水郷潮来(いたこ)あやめ園」に行った。千葉から比較的近く、東関東自動車道の「北千葉」で高速に乗って、成田空港の先の「潮来」で降り、下の道を10分ほど行ったところにあった(家から50分)。

ここに来たのは初めて。色とりどりのあやめ(菖蒲)がたくさん湿地に咲いていて、そばの水路には櫓(ろ)船が行きかい、潮来の歌が流れ、なかなか情緒溢れる独特の雰囲気であった。

入場料無料というのも嬉しい。「あやめ」の鉢も2鉢購入したので、これから家の庭でも楽しめる。帰りは利根川を渡り、対岸の佐原の香取街道沿いの昔の商家の町並みを散策した。

朝思い立っての、行き帰りも含め6時間の日帰り旅行であったが、江戸情緒を味わった半日であった。(2022年6月1日)

20 茂原「服部農園あじさい屋敷」に行く

近所でもアジサイの花は、ちらほら見ることができるが、やはり群生してるアジサイを見たくて、茂原の「服部農園あじさい屋敷」に行った。

「総面積 27,000 m²の屋敷に 18,000 m²、250 品種・10,000 株以上のあじさいが色彩豊かに咲き競います」と、案内のあるように、いろいろな種類の色とりどりのアジサイが、森の丘陵に咲いていた。足場は悪くなるが、雨の日に見に来た方が、さらに趣があると思った。(自宅から車で50分ほど)

帰りは、西暦784年に開基され、1028年に建立され、重要文化財になっている「笠森観音」にも寄り、千葉の初夏を楽しんだ。

21 検見川の大賀蓮を見に行く

1か月ほど前、日程を間違い見損なった東大の検見川グランド脇の大賀ハスを見に行った。駐車場があるかどうかわからなかったので、朝7時前に自転車で出かけた(自宅から20分ほど)。

早朝にも関わらず多くの人が見に来ていた。ガイドの人の丁寧な説明を聞きながら、蓮を鑑賞した。千葉公園の蓮はピンクの花が咲くものがほとんどであったが、ここの蓮は多くの種類の種類があり、心癒された。ボランティアの人が親切で、この人たちによって、ここの大賀ハスが守られていることを知った。(2022年7月17日)

22 佐倉西部自然公園のひまわり畑に行く

今日は台風も通り過ぎたようなので、夏のひまわりを観たくて、ネットで調べ、近場の佐倉に出かけた。家から車で20分の所にある「佐倉西部自然公園」。ひまわりの花が畑に5万本植えられ、今咲き誇っているとのこと。行ってみると、たくさんの黄色い背の高さほどのひまわり畑があり壮観。ひまわりはまさに夏を感じる花である。ボランティアの人が数人にて、昨日の台風で倒れたひまわり(花は健在)を無料で何本でもどうぞと言われ、持ち帰り、花瓶に飾った。「佐倉西部自然公園」は、佐倉市が自然保護のために費用もかけているところで、歴史のある佐倉市の見識も感じた(2022年8月14日)。

X 定年後の生活、自分史

高齢化社会になり、世の中に高齢者が増えている。高齢者の日々の過ごし方はさまざまである。大学や会社など組織には定年というものがあり、人は定年後の違った生き方を余儀なくされる。定年後の生活について、知人や自分のことも含めて振り返ったものを集めてみた。

1 暇について

同世代の友人と、メールで近況などを報告し合っている中で、「暇って何」ということが話題になった。友人は、実直な人で、暇については、「人生に無駄なことは一つもない」「何もしない時間にも意味はある」「勤勉さや真面目さの結果として得られる暇は人生の果実・ご褒美」など、その素直で穏やかな人柄を表す意見を送ってくれた。「武内さんは暇の哲学についてどう考えます？」と聞かれ、私は、その質問の核心には触れられず、その周囲のことを、あれこれ述べるだけで終わってしまった。(一部転載)

<私は、哲学は苦手です、暇についても、哲学的な考察は全くできません。でも、文化的な考察は好きで、京都学派の人(多田道太郎、作田啓一、井上俊など)の本は、よく読みました。そこには、暇や怠惰についての考察がたくさんありました。確か、働かず何もしないでぶらぶらしている若者に、年寄りが「なぜ働かないのか？」と聞いたら、その若者は「働くといいことありますか？」と質問し、年寄り「お金がたまり好きなことやのんびりできる」と答えると、その若者は「もう好きなこと、のんびりしています」と答えたという話を、多田道太郎が書いていました。関東と関西の学問の学風は違うと思います。関東は役立つことをして、関西は暇や楽しいことを大切にするように思います。

暇に関しては、社会階層も関係していると思います。食べるために暇なく働き続けてきた親を見て育った中以下の階層の子どもは、勤勉という価値を内面化し、暇にすると罪悪感をいだくのではないのでしょうか。また世代も関係し、若い世代は、余裕のある贅沢な生活が当たり前で、働くより暇にして好きなことをすることに価値や生きがいを感じているように思います。

社会学者の副田義也先生が、遊んでばかりいる大学生でも大学に通う意味はあって、もし彼らが大学に入学せず、社会に出てしまったら、どのような犯罪に走るかわからない。大学は、「時間の浪費の制度化」をしているところあって、退屈で時間を持て余す若者の、犯罪防止制度としての十分機能している。そのような趣旨の考察を、マンガ『嗚呼・花の応援団』の分析でしていました(『遊びの社会学』)。

その中でも言及されていたが、退職した老人が多くなって、そのまま放置しておいたら、不良老人たちが何をしでかすかわからない。卓球でも、絵でもいいが、さらに害のない「ブログ」を書かせたり、読ませたりさせておけば、社会への不満や批判に目がいかず、今の社

会（体制）は安泰である。私のブログは、そのような社会の安全弁機能、社会体制維持機能を果たしているのかもしれない。（ただ、読者は少ないし、そんな影響はないのだから、所詮この議論も、暇つぶし）>（2021年5月24日）

2 別荘地と老後の生活

ハレとケの違いは日常的にいろいろなところで感じる。時間的なことと言えば、休日（ハレ）と平日（ケ）の違いである。平日と休日は、やることも気分的にも全然違うというが多くの人の実感であろう。

ところが、職業によってこの区別のつきにくい人もいる。大学教員や作家などはその最たるものであろう。これらの職業の人は、休日でも仕事を抱え、はっきりした休みがあるわけではない。本人は休日でも仕事を自発的にやっているのでもいいが、その配偶者はたまったものではない。「一緒に生活していて、一番ストレスが溜まるのは作家の奥さんだ」というようなことを江藤淳が書いていた（「アメリカと私」）。

空間的なことと言えば、生活する場の建物と別荘地のそれとの違いに、驚くことがある。軽井沢の別荘地（特に旧軽）を散策して楽しいのは、そこの別荘地の建物が、普通に住んでいる地に建つ建物と違うからである。建物や庭へのお金のかけ方が、日常的に生活する場の家へのそれと全く違う気がする。別荘地のものは、贅沢と意匠を凝らしたものが多いからである。ハレ（別荘）とケ（生活の場）では、金銭感覚が違ってはたらくのかもしれない。庶民の感覚からすれば、たまにしか行かない別荘地の家や庭に、贅沢の限りを尽くすのは割が合わない気がするが、その贅沢こそ、別荘地の誇りなのであろう。

千葉の御宿にも高台の地に、昔、西武が売り出した別荘地があり、立派な家が数多く建っている。先日そこを散歩してみて、その建物のセンスの良さに感心した。広い敷地に贅沢な建物が多く建っている。きっと、バブルの頃に、建ったものであろう。瓦は茶系のものが多く、統一がとれていて、雰囲気的には、ハワイの郊外を思わせる。

ただ、そこを歩いてみて、時代の移り変わり、今の時代も感じた。まず、人の姿をあまり見ない。車庫に車がある家が5分の1程度はあるので、住んでいる人はいると思うが、人影は少ない。わずかに出会う人は、老人ばかり。その別荘地の端に立派な老人ホームがあり、体が動けなくなったら、そこに入る予備の家に皆住んでいるように感じた。バブルの頃、平日に猛烈に働き、その稼ぎで、この地に贅沢を尽くした別荘を建て、退職してここに住まうようになったが、その時、夢見ていた引退後の生活がこのように寂しいものであったか、という寂寥感がその地を覆っていると感じた。

若者や子どものいない、老人だけの別荘地ほど、さびしいものはない。その点、軽井沢やハワイは、若者や子どもも押し寄せる数少ない、現代に生き残った別荘地のような気がする。

われわれの生活は、ハレの場や時間とケの場や時間が、両方あるのが好ましい。しかし、老後になると、そのような区別を持つことが難しい。歳をとってからの暮らし方は、難しい。（2013年2月23日）

3 老後の時間志向 ー現在志向 過去志向、未来志向

時間軸で言えば、人は、特に老後はどこを見て生活しているのでしょうか。社会学者の見田宗介の有名な価値の4類型を作る軸は、時間軸（現在志向か未来志向）と空間軸（自分志向か社会志向）の2軸がある。

井上揚水の「傘がない」の主人公は、それ以前の学生運動の若者が「未来」と「社会」を志向していたのに対して、それ以降の学生が「現在」と「私」を志向していると分析したのは社会学者の副田義也先生である。今の学生達の好きな歌の歌詞を見ると「未来」を志向している歌が多いように思える。

私達の高齢者の世代は、時間的にどこに置いているのでしょうか。未来に何か期待しているとは思えない。そうすると過去志向か、それとも現在志向か、。(2016年5月15日)

4 老いによる思考力や表現力の衰えについて

今日の朝日新聞の朝刊に池上彰は、14年間続いた「新聞斜め読み」の連載を自ら辞退した理由を次のように書いている。

「仕事の引き際は、難しいものです。いつまでも働けることはありがたいことです。でも、誰にも老いはやってきます。老いの厄介なところは、自分の思考力や表現力の摩滅に自身は気づきにくいということです。いつの間にか、私のコラムの切れ味が鈍っているのに自身が気づかなくなっているのではないかという恐れから身を引くことにしたのです。いや、そもそも切れ味などなかったと言われるかもしれません。」(朝日新聞3月26日朝刊)。

同じようなことを感じることが多い。それは他人のことでも、自分のことでも。これまで凄いなと感心していた人（有名人など）の言動が、「往年の切れ味がなくなっているな」と思うことがある。また齢を取ると、自分の衰えに自分では気が付かないことが多い。体力や体調の衰えは、自分でもかなりわかるが、知力や表現力などの摩滅は自分では気が付きにくい。他人から指摘してもらい、自覚するしかない。(2021年3月26日)

5 齢をとっても柔軟に

一般に齢を取ってくると、体力の衰えだけでなく、気力も衰えてくる。気力が低下すると、外に出かけるのも億劫で、人に会うのも面倒になり、引きこもり気味になる。

また柔軟性を失い、頑固になる。この頑固さには、気を付けたい。テレビで見ていると、それほど高齢ではないが、「家族に乾杯」の笑福亭鶴瓶（1951年生まれ）や「にっぽん縦断こころ旅」の火野正平（1949年生まれ）などは、年寄りの頑固さより、柔軟性（一種のボケ、判断保留）が勝っていて、見ていてほっとする。この二人から学ぶものは大きいと思う。

内田樹は、年寄りの頑固さに関して、的確な指摘をしている。一部抜粋しておきたい。

＜この人たちは「複雑な話」をする能力がなくなっているんです。中腰に耐える、非決定に耐える、年を取るとそれができなくなる。体力気力が衰えると、はやく腰を下ろしたくなるんです。中腰つらいから。老人になって、現場を離れたことでまっさきに衰えるのは、この力です。老人になると、確実に身体は衰えます。でも、心は衰えに抗することができる。それは複雑化するということです。老いるというのは自己複雑化の努力を放棄することだと僕は思います。自戒を込めてそう申し上げます。(内田樹『『善く死ぬための身体論』のまえがき)。

藤原新也は、齢を取ると人の話に耳を傾けず、自分に入り込みようになり他者の話が耳に入らない「オタク傾向」に陥ることを警告している

6 高齢者と卓球

卓球というのは、なんと慎ましいスポーツなのかと思う。その使うスペースは、一部屋分にもならない。広大なスペースを使うゴルフと比べると何百分の1、いや何千分の1のスペースしか使わない。卓球のラケットもボールも安いし、服装も地味である。あまり脚光を浴びることもなく、人気もない。

私は、家の近くの小学校の体育館で毎週日曜日の午前中に練習がある「卓球愛好会」に入れてもらい、気が向いた時に、参加させてもらっている。ただ、気が向く時があまりなく、月に1回、ないし2か月に1回くらいしか参加していない。したがって、いつも腕は初心者並である。

世の中には卓球好きな人というものがいて、学生時代から卓球をやり続け、定年退職したいまもほとんど毎日卓球をしているという人もいる。その「卓球愛好会」には90代の人一人、80代の人3～4人いる。卓球は、手足だけでなく、目も使うし、健康によく、年寄り向きなのであろう。(2016年3月25日)

7 高齢者とテニス

今日(1月4日)午前11時からテニスの初打ちをした。平日の昼間からテニスや卓球をするというのは、大学教師や自由業の人でもやらないであろう。そのようなことが出来るのは退職した高齢者の特権である。

私の参加している毎週火曜日11時から2時間の「テニス打ち方教室」(千葉市長沼原勤労市民プラザ)は、参加者は暇な高齢者ばかり十数人だが(年齢の若い男性、女性もそれぞれ少数はいる)、どうも私が最高年齢のような気がする(実際は私より歳上は2人いたが)。それだけテニスは、手首や腕だけではなく足も全身も使うハードなスポーツなのかもしれ

ない。

私のようにテニスと卓球の両方をやっている人は少ない。それぞれどちらかに打ち込み、週に何回もやっている人が多い。昔はゴルフをやっていて今はテニスという人はいる。昔ゴルフで今は卓球という人はあまり聞かない。ゴルフとテニスと卓球と、スポーツとしてどこが違うのか。使う面積や費用は格段に違い、何となく社会的格差—ゴルフ、テニス、卓球の順—があるような気がする。

青少年の頃のやったスポーツと年取ってからのスポーツは同じなのか違うのか、生涯スポーツという観点からそのようなことを解明した研究はあるのであろうか。私が生涯教育専攻の学生あるいは放送大学の学生だったら、そのような卒論を書くのと思った。

(2022年1月4日)

8 高齢者の相手をしてくれるのは野生の鳥だけ？

野生の鳥は冬場は餌がなく困っていることであろう—そんな勝手な想像をして、昨日も午後4時に近い夕方なのに、検見川浜にパンやご飯粒を持って出かけた（車で12～3分）。やはり夕方なので、昼間はたくさんいる鳩やカモメの姿は一匹も見えなかった。多くの鳥は夕方ねぐらに帰るのであろう。飛んでいるのは少数のカラスと、群れで戯れているスズメと、海辺に浮かんでいる鴨だけであった。雀は少しパンの切れ端を警戒しながら突つき啜って飛び立つが、海辺の鴨は近づくと沖の方に逃げてしまう。

私のように鳥に餌をやる高齢者は時々いて、紙の袋から餌を出し、遠慮がちにあげている。老人の相手をしてくれるのは野生の鳥だけというのも、少しわびしい。その鳥も夕方にはねぐらに帰ってしまう。(2022年1月24日)

9 そこに居場所がない 寂しさ

昨日は、上智大学の大学事務局に用事があり、久しぶりに上智大学新2号館に行った。自分が20年間勤め、研究室のあったところが、今は自分の居場所ではない、というのは不思議な感覚である。自分がいなくても、自分がいた頃と同じような日常が滞りなく回っている。それは、一種のさびしさの感じでもある。

昔、10年勤めた武蔵大学に非常勤で行っていた時、ちょうど教授会が開かれていて、それが外から窓越しに見えたが、自分はもうそこの一員ではないし、どんなに懐かしくても、そこに入ってはいけないのだと知った時の、衝撃は大きかった。

もしかすると、それは、自分の死後、自分のいた家族や職場やさまざまな人間関係が、自分抜きで回っているのを、天から（あるいは地下から）見る時の感覚かもしれないと思った。

(2012年9月14日)

10 私はなぜ教育学の研究者になったのか 一自分史

私の場合、なぜ教育学の研究者になったのかと人から聞かれても、明確に答えることができない。気が付いたら、大学で教育学（教育社会学）を教えるようになっていたというのが正直なところである。

大学へ最初は理系に入学したが、自分には合わないと感じ、三年次に教育学部に進学した。私が学んだ1960年代の東大の教育社会学コースでは、主任の清水義弘教授は中央教育審議会の委員をしてマンパワーポリシーを先導していた。松原治郎助教授は「社会開発と教育」という本を出版し、社会開発への教育の役割を提起していた。両先生の関心はマクロな教育政策にあり、ミドルの学校やミクロな人の心理には向いていなかった。それらは私の関心を引かず、当時は教育の本は読まず、小説ばかり読んでいた。

大学卒業後の進路先も決まらぬまま大学4年の9月になり、中学校に教育実習に行った。当時たまたま木原健太郎著『教育課程の分析と診断』（誠信書房）を読んだ。教育社会学にもこんなに面白い本があるのかと思った。その内容は、木原教授が名古屋の小学校のクラスに入り込み、エスノグラフィーの手法で、児童の実態やその家庭背景を調べ、自ら作ったアナライザーも使い授業分析をするもので、学級の中で起こっていることが児童の生活のデータも含めて生き生きと描き出されていた。感激の余り小学校で調査の真似ごとをし、そのデータで卒論を書き、大学院に進学した。

大学院では、御茶の水女子大学の河野重男教授の演習もあり、「学校社会学」の面白さを学んだ。特に高校研究や生徒文化研究に興味をもった。6月に「東大紛争」が起り、ほとんど研究もしないまま一年間が過ぎ、短期間で「学級集団の研究」というテーマで、英米の学校社会学の研究を参照し、学級集団を教師と児童・生徒の文化葛藤からみる視点で、修士論文を書き上げた。

博士課程の時、私立の開成学園高校の「倫理・社会」非常勤講師として半年間、教壇に立った。当時受験競争の真ただ中の時代で、受験に翻弄される高校生の姿を目の当りにした。成績上位の生徒は受験中心の高校生活に何の疑問も抱かず、中位の生徒は受験を適当にやり過ごし、下位の生徒は無気力になっていた。

研究室の助手時代は、清水教授の科研費の研究「高校の適正規模の総合的研究」を手伝った。当時第二次ベビーブームの生徒の為の高校増設期で、どの規模の高校が適切かをデータで検証する時代になかった研究だった。全国の高校生のデータをもとに、高校の規模別に生徒の学校生活が違うかを検証したが、一定の傾向が見出せなかった。しかしそこに「高校間格差」という変数を投入してみると、はっきりした傾向が見出された。格差の上位の高校は伝統もあり指導が確立しているので学校規模が大きくなっても問題がないが、新設校で大規模校を作ると伝統もなく教員の意思統一が出来ず指導が行き届かず生徒は荒れや不適應を起こしていた。この研究から、マクロな教育制度が、ミクロな生徒文化や生徒の学校適応と密接に関連していることを知った。

東京の中堅の武蔵大学に専任講師として勤めるようになって、ゼミの学生たちと、大学生

の学生文化の特質をデータで明らかにした。たとえば学生の席の位置と受講態度や日頃の行動やファッションとが関係するという仮説で、33 教室で席別に 100 名余の学生の受講態度とファッション、日常生活を観察とアンケートで調べた。

上智大学に移ってからは、研究仲間と大学間の学生調査を四回実施し、学会発表、報告書、本（『キャンパスライフの今』,「大学とキャンパスライフ」）を出版した。文科省主導で高等教育の改革は急速に進んだが、そこに学生の実態に関する視点が欠けていると感じた。同じ大学生でも、大学の類型により、学生の学習動機も学生文化も大きく違っていた。学生の実態から大学教育のあり方を探った。

敬愛大学こども学科に勤め、教員養成の学科に入学してくる学生は、子ども好きで素直な学生が多いと感じた。遠隔授業で、学生に読解力、文章力のあることも知った。教員養成の大学が、学生を熱心に指導すれば、これからの日本の教育は安泰なのではないかと感じた。

私の研究を『学生文化・生徒文化の社会学』（ハーベスト社 2004 年）にまとめたが、主に調査データや生徒や学生の実態から教育のあり方を考えるものであった。

（『教育展望』 2020 年 9 月号）

1 1 上智大学 100 周年お祝いの会

上智大学創立 100 周年のお祝いの会が、四谷のニューオータニホテルであるというので、出かけた（11 月 1 日）。上智を定年で辞めてから 3 年半が経つが、昔の知り合いの懐かしい人たちに会うことで出来た。

教育学科で同僚だった加藤教授、香川教授、高祖教授（理事長）、平野教授、湯川教授、越前教授（神父）。石澤学長・輝道副学長。学内共同研究で一緒した先生たち。上智ローヤルテニスクラブのメンバーの先生たち。上智での教育社会学会のシンポにも出ていただいた Anne McDonald 地球環境学大学院教授。有名な渡部昇一教授も見かけた。上智大学の伝統と未来を感じた。上智大学の発展を心よりお祈りする。（2013 年 11 月 2 日）

1 2 さだまさし「いのちの理由」を聴く

「人は何の為に生きるのか」など青臭いことを考えるのは青少年期で、歳を取ると段々そのようなことは考えなくなる。ただ「人のいのちを繋ぐため」ということは自然に考えるようになる。そのようなことを、さだまさしの「いのちの理由」という歌を聴いて思った。

<私が生まれてきた訳は 何処かの誰かに救われて/ 私が生まれてきた訳は 何処かの誰かを救うため/ 夜が来て 闇自から染めるよう 朝が来て 光自ずから照らすよう/ しあわせになるために 誰もが生きているんだよ/ 悲しみの海の向こうから 喜びが満ちてくるように/ 私が生まれてきた訳は 愛しいあなたに出会うため/ 私が生まれてきた訳は 愛しいあなたを護るため>（一部抜粋）（2016 年 7 月 24 日）

教育、大学、文学、ドラマ、日常 一教育社会学的考察一

著者

武内 清

敬愛大学客員教授、敬愛大学名誉教授、上智大学名誉教授

メールアドレス k-takeuchi87@nifty.com

ホームページ <https://www.takeuchikiyoshi.com>

発行者 武内清

発行日 2022年9月14日

印刷 宮坂印刷 (TEL. 043-251-4537)